

Z32-B88

金の星

二月号

第九卷
第二號



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

オハナシ

巖谷小波間・鹿島鳴秋 著
橋本邦助・太田三郎
細木原静枝・岡野榮
杉浦非水 畫

四六倍假裝全五冊
紙數各冊八十餘頁
定價各壹圓
送料各八錢

童話も
童話も
昔のことも
昔のことも
今のこともある
面白くて
爲めになる
オハナシ

日本一の噺

巖谷小波 著
岡野榮・小林鐵吉
杉浦非水 畫

袖珍假裝全三十五冊
紙數各冊三十餘頁
定價各貳拾五錢
送料各金四錢

繪が一頁に
お噺が一頁
繪が踊れば
お噺も踊り出す
これこそ本統の
日本一の噺

オトギタ

巖谷小波 著
太田三郎・岡野榮
細木原静枝 畫

四六倍列假裝全三冊
紙數各冊三十餘頁
定價各八拾錢
送料各六錢

歌と繪と
次々に續いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
舌切雀は？
運動會の賞品は！

東京日本橋通

丸善株式會社

東京一神田三・丸ビ

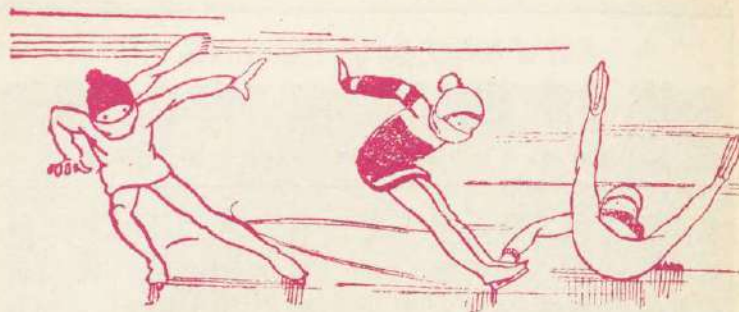
横濱
神戶
大阪
東京
名古屋
京都
札幌

大坂
神戶
京都
名古屋
東京
大阪
札幌



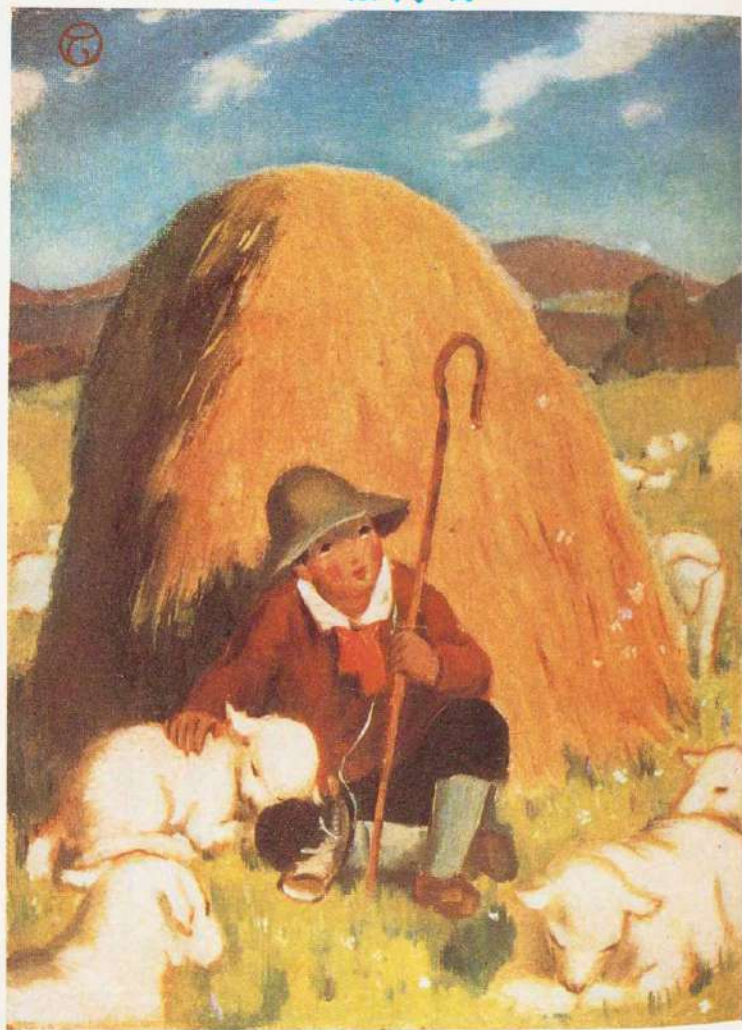
目次

雪なげ	(表紙・石版)	岡本歸一
日向ぼつこ	(口繪・三色版)	寺内萬治郎
お嫁さんの馬車	(童話)	野口雨情
同作	(二)	藤井清水
暗闇	(長篇)	小島政二郎
かくれんぼ	(童話)	渡邊直
少年と南蠻人の仇討	(童話)	岡崎六郎
漂流二百三十日	(長篇)	久米絃一
狸の子か坊主の子か	(童話)	立石美和
漫畫秘介日記	(六)	河盛久夫
魔術奥義書	(童話)	西條八十
鬼界ヶ島	(童話)	野口雨情選



親指の血を飲む王子	(童話)	川崎春二
博多のお人形さん	(童話)	大木雄三
おきつこたぬ吉	(童話)	杜仙之介
海賊船	(童話)	西川喜平
白帆の唄	(長篇)	犬田卯
やぶ	(童話)	小城庄一
元日に鳴く金の鶏	(童話)	野口雨情選
魔女の鳥	(長篇)	成川冬至
大石主税	(長篇)	山本二郎
島の子供は	(童話)	三島霜川
遠足のことも	(童話)	達崎龍
父の肖像	(自由畫)	齋藤佐次郎選
讀者だよ	(信)	山本鼎選

こつぽ 向^ま日^ひ



畫郎治萬内寺

の評好大るす表代を界曲作謠童本日 集譜曲謠童星の金

錢六金料差・錢拾八金下以輯三・錢拾六金各輯二輯一

第一輯 人 買 船 (目曲)	第二輯 一 つ お 星 さ ん (目曲)	第三輯 青 い 空 (目曲)	第四輯 赤 い 靴 (目曲)	第五輯 夢 ご り (目曲)	第六輯 子 守 唄 (目曲)	第七輯 お 人 形 さ ん の 夢 (目曲)	第八輯 べ ん べ ん 鳥 (目曲)	第九輯 あ の 町 こ の 町 (目曲)	第十輯 名 所 め ぐ り (目曲)	第七輯 夢 の お 國 (目曲)
本居長世作曲・野口雨情作謠 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る 船、十五夜お月さん	本居長世作曲・野口雨情作謠 一つお星さん、七つの子、曉と夜、鶴さん、 象の鼻、四丁目の犬	本居長世作曲・野口雨情作謠 青い空、薪、雨夜の傘、でん／＼蟲、春の酒 盛り、呼子鳥	本居長世作曲・野口雨情作謠 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、鵜飼船 屋、眠り蟲の子	本居長世作曲・野口雨情作謠 夢とり、おしやれ橋、つば子、十と七つ、雲 雀の水汲、雀の機織り	本居長世作曲・野口雨情作謠 子守唄、鵜と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、 蕨切主、殿の下道	本居長世作曲・野口雨情作謠 お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、 芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱	小松耕輔作曲・雄略製作謠 べん／＼鳥、蟹のお使、仔牛、赤い子馬車、 紅殻鶏鈴、さみだれ	中山晋平作曲・野口雨情作謠 あの町この町、雀歸り、木の葉のお船、高野 山、鼠の小母さん、狸話寺の狸樂	本居長世作曲・野口雨情作謠 長柄の橋、往くより、阿彌陀池、宮城野の萩、 お乳給、石山寺の秋の月	島井清乃作曲・菊日影情作謠 夢のお國、鬼が来い、赤い機ンば、鶴さんお 手とり、鵜の歌、夢の歌

番七八三五六川石小話電
番六九五九五京東替振

社星の金

郷本京東
町坂動

好評あるアイデー書店の新刊書

服部龍太郎著

(兒童圖書館叢書)

世界音樂家物語

四六判 三〇九頁
定價 二圓
送料(書留)十二錢

★ 今日まで、小學、中學、女學校の音樂教育は、單に唱歌教授にのみよつて其任務を果たされて來た。勿論「唱ふこと」は音樂を知るについて最も重要なことである。
★ 併し更に一步を進めて、音樂史、音樂家の傳、音樂の形式について親切に教授され
★ たならば、子供達の世界は何れほど幸福を増すか知れない。本書はその意味に於て、各學校、又家庭の必備書として心より推稱いたします。(挿畫十二葉、裝幀恩地孝四郎氏)

世界偉人物語(忽四版) 遠藤早泉著 定價 二二〇

世界英雄物語(忽四版) 奥野庄太郎著 定價 一六〇

ホームシングス 山田耕作作曲 定價(各冊) 〇八〇

東京市牛込區 山伏町一四 込牛區 六三六五 電話 三二四一 振替 東京 六五三二 院書アイデー 發兌

錢六料送・錢十六價定・本美入箱判六四

錢六料送・錢十六價定・本美入箱判六四

魔法のバラ

悪い王子の爲めに國を追はれた優しい王子が女
神から魔法のバラをさづけられ、そのバラのお
かけで、あらゆる困難から救はれるといふ面
白いお話です。

ほら博士

ほら博士はかせといふほど大ぼら吹おほぶきの男爵だんしやくのお話はなしです。實じつになんともかんとともお腹なみなかへて笑わらはずにはゐられない面白いお話おもしろい はなしです。まア一度読んでごらん下さい。

盗ぬすまれた王女

ベルシヤの不思議なお話です。リンダガルといふ王女様が悪い魔法使にさらはれたので、それを王子があらゆる困難をおかして助けに行きお話です。

親指卜ム

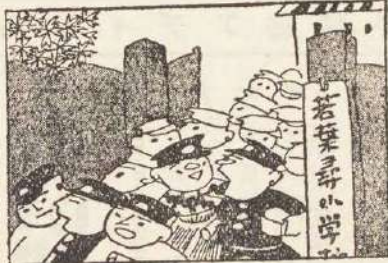
西洋の一寸法師のお話です。親指のお話をし
ない親指トムが、ありとあらゆる冒険を行な
う痛快な物語です。お腹なかへて笑ふ事幾度か知れません。

利口お馬りかうま

るは、じぶん
 驢馬が自分の一生を皆さんにお話ししたのが此
 の本です。利口な驢馬だけにそのお話しもほか
 では聞かれない愉快なものです。見世物に出た
 りしてなかう。面白いです。

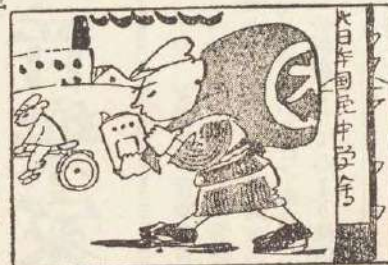
信吉ノ成功

○小學校ヲソツグフシタ、タ
クサンノゴドモタチハ、イヨ
イヨヨノナカハトビダシタ。
ヨノナカハ小學校ニキルトキ
古毛少タホ下、タノシタハ、ナ
カツタ。



小學校卒業後

CINDENキチハ、ウチガビンホ
 ウナタメ、テウチニダサレタ
 ガ、ヒトニマケナイキテ、ダ
 イホソコクミンチエウガク
 クライニニフタワイシテ、ユ
 ーロクアペンキヨウシホ。



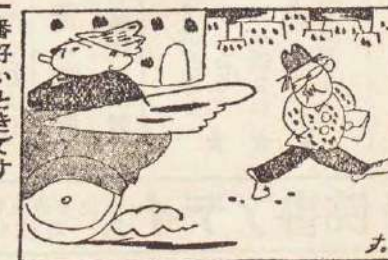
僅か一ケ年半で中學卒業の學力と資格が得られる。

ヨサタモ、ウチノテツダイ
チシナガラ、ヨーキロクデマ
ンキロウシタガ、トンキチト
ヨタロウハ、トウキヨウノ、チ
エウカダヘハイツテモ、ナマ
ケテ、カッドウシナシン、バカ
ヲミテアルイタ。



◎入會するには今が一番好いときです
講義録見本規則書中込無代します
駿河京
大日本國民中學會
電話料田舎電氣學塾電話料田舎電氣學塾東京四二〇番

二十ノホドツテ
キチハ、ヨツバナカイシヤノ
シヤチヨリナリ、ヨサクハ
ソノカイギインニナツタガ、
トンキチトヨタロウハ、オナ
サケテ、シンキチノカイシヤ
ニツカツテモラウテイ。



金社の星編 世界少年少女著名大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

第一編 第二編 第三編 第四編 第五編

ロビンソン漂流記

ナポレオン物語

ドン・キホーテ

コロンブス物語

ガリバー旅行記

大人國小人國めぐり

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程夢山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不孝だといはれてゐます。

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルジカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セントヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語をわかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

イスパニヤのある村にクイザノといふ男が、氣が少し變になつて、毎朝騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、瘦馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語です。

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘憺して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめてゐます。

金社の星編 世界少年少女著名大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

第六編 第七編 第八編 第九編 第十編

ロビン・フッド物語

アラビヤナイト

ギリシヤ神話 オデッセー物語

シェークスピア物語

グリム童話

『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャイウッドの森に住んで正義のために戦つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで胸をなぐさめます。悪い知事や僧正や、王をやつつけて、最後に尼のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊んでゐる物語りです。昔アラビヤに悪い王があつて、毎日一人づつ、お姫を迎へては翌日は殺してしまふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤナイト』だといはれてゐます。

ギリシヤ詩聖ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戦争に盡く海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。

有名なシェークスピアの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のま』『ベニスの商人』『かみくし』『眞夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に絶度讀まわつても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金社の星 世界少年少女名著大系

編六四箱入類本・定價各冊九錢・送料金六錢

第二十二編 第二十三編 第二十四編 第二十五編 第二十六編

母を尋ねて三千里

不思議國めぐり

青い鳥

爲朝一代記

ハムレット

本書は伊太利文豪アマチスの世界的名作『タオレ』の中から、最も面白い部分を選んで一冊としたものであります。三千里の道をはるゝと母を求めて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を棄てて少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語ばかりです。少年少女必読の書。

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がいました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんであるうちにつひつと眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議な夢を見ました。覺めてからのち、アリスはお姉様にその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

メーテルリンクの傑作『青い鳥』の名を知らぬ者はありません。原作は劇になつてゐますが、本書はそれをお話風に改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、未来の國と移り歩くナルナル、ミナル二人の姿は、ちやうど活動寫眞でも見るかのように、皆様の眼の前に存ぶでせう。何人も一讀すべき名著であります。

鎮西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありませう。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスベラナイ魅力をもつてゐる。本書の表紙の裏に、向つて弓を射てゐる爲朝の男姿に、讀まずして本書の内容を語つてゐます。金の星社自慢の本として、お薦めします。

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シェークスピアの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父を熱愛したか、又、可憐な花の如きオフィヤ姫のはかない最後など、一讀、再讀、いよゝ熱涙を覚える名篇であります。

金社の星 世界少年少女名著大系

編六四箱入類本・定價各冊九錢・送料金六錢

第二十六編 第二十七編 第二十八編 第二十九編 第三十編

新ロビンソン漂流記

ホムペイ最後の日

少年鼓手

ロミオとジュリエット

竹取物語

アマチスを結出した汽船が大暴風雨に出遇ひ、南洋の無人島で難破してしまひ、一族六人の者が助けられませんでした。その内四人は少年でした。この六人の者が救ひの船の来るまでの二年間の話を書いたのが此の物語で、野生の植物を食物にした、猿や鹿鳥をお友達にしたりして、實に面白いお話です。

伊太利のベスビヤス山の大噴火と共に地の下に埋つてしまつたボムペイの町のお話です。妖術使や魔法のやうな悪い人間が出て來ると共に、可憐な盲目の花賣娘や、空の星のやうな美女や、義侠に富む勇士などが現れて、歴史にながく傳へられる『ボムペイ最後の日』のあらはれにして、悲しい物語となつてゐます。

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えた時、雪なだれにあひました。その時なだれの下から勇敢にも軍鼓を打つた『少年鼓手』の話は世界に有名です。かういふ勇敢な少年少女のお話ばかり十篇を集めたのが此の本ですから、血をどり、涙ながれるものばかりです。

有名なシェークスピアの作つたロミオとジュリエット二人の物語は、最初から終りまで泣かすには讀めない程あらはれにして、はかないものです。最後は二人の死によつて終る悲劇中の悲劇ですから、あらはれた話、悲しい話の好きな方には、さつと大歡迎を受けます。是非讀んでいただきたい世界の悲劇です。

『竹取物語』は世界にはこのことの出來る日本の大文學です。日本中で一番美しいかぐや姫を、自分のお嫁さんにしよつと大勢の皇子やおくげ様たちが競争をします。しかし、かぐや姫は月の世界の人であつて、かりに此の世に生れたのですから、五色の雲に乗つて月の世界へと歸つてしまふのです。

録目著名行發社星の金

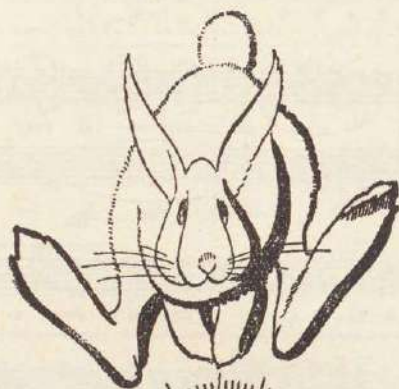
系大傳人偉 編一第	系大傳人偉 編二第	系大傳人偉 編三第	系大傳人偉 編四第	系大傳人偉 編五第
ジャヌヌタルク	ローマ 英雄 シーザー	ネルソン	リンコルン	太閤秀吉
大木雄三先生著。有名なオルレアン の少女ジャンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を 滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁 とも血ひたたり、涙ながるゝ悲劇的物語 である。	霜田史光先生著。シーザーは古代の大英 雄である。世界歴史を通じてシーザー程 の英雄は幾人と数へる程がない。その シーザーの變化絢りない運命を書いたの が本書である。	三井信衛先生著。トラファルガアの海戦 に名譽の死を遂げたネルソンの傳記で す。その國を愛する赤心と、己の責任を 重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與 へます。何人も一讀すべき名著です。	久米鏡一先生著。最も優れた立志傳とし て、この『リンコルン傳』をおすすめす る。紙一枚、ペン先一ツ貫へぬ熱いリンコ ルンが、如何にして大統領の榮位をもち 得たか。本書を讀まざる者は一生の不幸で ある。	三島雅川先生著。日本の英雄として世界 に誇り得るものは、太閤秀吉である。本 書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參 考にして研究し、それを三島先生の名筆 によつて面白く書現したものである。
錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編六第	系大傳人偉 編七第	系大傳人偉 編八第	系大傳人偉 編九第	系大傳人偉 編十第
ナイチンゲール	ワシントン	大楠公	ローマ 英雄 ピーター大帝	お釋迦様
入交綱一郎先生著。女神様のやうに氣高 い心を持つたナイチンゲール嬢の一生を 書いた本です。この人の傳記を讀んだも のは誰でも、本當に清い心の人になりま す。少年少女の爲に書かれたはじめての本 です。	三井信衛先生著。アメリカを獨立させて 最初の大統領になつた大偉人ワシントンの 傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人とな つたワシントンのお話は、誰が讀んでも 勇氣をづけられます。	三島雅川先生著。楠正成の傳記を正しく 書いた本として、これ以上の本はありません。 せん。この本を讀んだ人は成程と正成の 偉かつた事に感じるでせう。面白くてそ して本當の正成のお話がある本です。	大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロ シアを盛んにする爲めに、帝王の身であ り乍ら造船職工にまでなり、また自分の 子や妻までも殺さなければならなくなつ た變化極りないピーター大帝の物語です	齋藤佐次郎先生著。お釋迦様ほど立派な 方は恐らくこの世の中に生れなかつたで せう。そのお釋迦様の一生をわかりやす く、面白く、そして正しく傳へたのが此 の本です。得がたい本です。
錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送

星の金

號月二



1927
FEB.



(通巻第八拾七號)

！し近日行發の作名

一ヶ年の間「金の星」誌上に連載され讀者から非常な好評を以つて迎へられてゐた小島先生の愛犬物語が金蘭社四大叢書の一つたる世界名篇物語叢書中の第十四編として金蘭社から發行される事に決定しました。小島先生は今更云ふまでもなく現代の文壇に最も重きをなしてゐて、其名筆はあらゆる讀者を心酔せしめてなほ餘りありとさへ云はれて居ります。なほ附録として「リツキイ・チツキイ・デビイ」を添へた事は一層本書の光輝をます物と信じます。名作「愛犬物語」の發行日近し！御期待下さい。

四六判箱入美本
本文約二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九十錢
送料十二錢

世界名篇物語
叢書第十四編
愛犬物語

小島政二郎先生著

八二込駒上鴨巢外市京東

社蘭金

番一〇七一六京東替振

お嫁さんの馬車

作曲 藤井清水

作謠 野口雨情

31.M ♩=126

(美しく上品に)

mf

はしでゆくのは はなめ さんか

Sva

mf

p

mp

すずがーなりませ しん しん と

Sva

mp

p rit.

f a tempo

ふれて なるのか ゆられて なるか

Sva

a tempo

mf

p

mp

ふれーなりませ しん しん と

Sva

mp

p rit.

a tempo

すずがーなりませ しん しん と

Sva

a tempo

mf

p

mp

ふれーなりませ しん しん と

Sva

mp

p rit.

お嫁さんの馬車

野口雨情

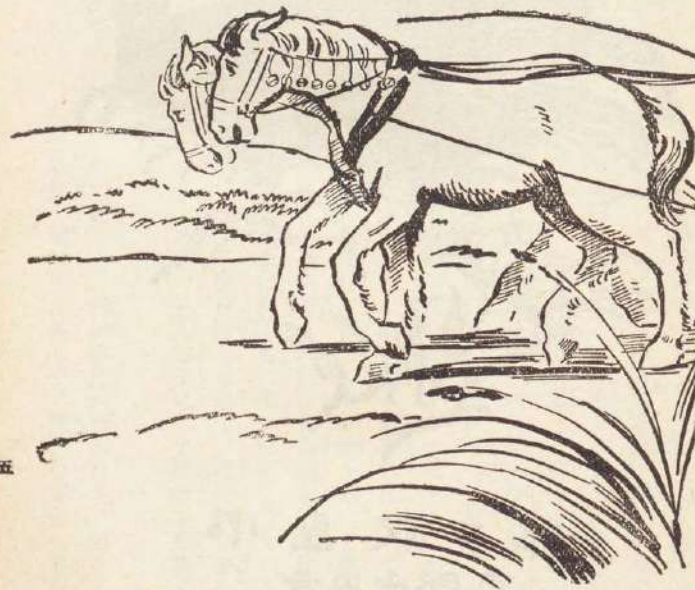
寺内萬治郎畫

馬車でゆくのは
花嫁さんか
鈴が鳴ります
しやん／＼こ
ふれて鳴るのか
ゆられて鳴るか



ふれて鳴ります
しやん／＼こ
鈴をふるのは
花嫁さんか
馬がふります
しやん／＼こ

(註。藩州では、お嫁さんにゆくとき鈴をつけ
た馬車に乗って、鉦や太鼓でおくられて
ゆきます。)



暗闇城



小島政二郎
寺内七郎

二

(前回の梗概は一二四頁にあります)

『ポーランドの貴族かい?』と重ねて僕が訊ねた。
『どう致しまして。ポーランドには、あんな奴は生
れませんよ。』

『ちやフランス人かい。』と、デュロツクが云つた。

『え、あの男はフランスからやつて来たのだとみ
んな云つてをりますよ。』

『ちや赤い毛をしてゐるかね。』

『狐のやうに赤い毛でさあ。』

『フーン、さうか。それちや彼奴に違ひない。』少尉
は興奮に身をふるはせながら叫んだ。『僕がここへ
やつて来たと言ふのも、全く天の配剤の妙だ。誰が
世の中には正義の神があるなどと言ふのだ?—
さあ、行きませう、デュエール君。僕は自分一個人
の事件に關係する前に、先づ部下の宿を取つてやら

なければなりませんから。』

彼は馬に拍車を加へた。さうして、十分程の後に、
僕等はアレンスドルフの宿屋の前に來てゐた。部下
の兵卒達は、今夜ここに宿泊することになった。

ところで、かうした出來事は、僕には何等の關係
もないこと故、僕は全然デュロツク少尉の行動にと
う云ふ意味が含まれてゐるのか考へて見ようとし
なかつた。第一、僕の目指すロッセルは、まだく
すつと遠方だつた。だから、猶數時間歩いて後、ど
こか路傍の宿屋に、僕とラタプランの宿を求めよう
と思つてゐた。で、皆と一緒に葡萄酒を一杯飲み終
ると、僕はまた表に出て馬に跨つた。すると、デュロツ
ク少尉が慌てて馳け出して來て、僕の膝を掴んだ。
『デュエール君、そんな風にして僕等を見捨てない
で下さい。』

『だつて君……。何か事件があるなら、かういふだ
からと打ち明けてくれりや、僕だつて少しぐらゐは

力にならないものでもないけれど……。」

「少しどころではありません。デユラール君、僕が今までに聞いた噂によれば、あなたこそ今夜は是非僕の傍にゐて力添へをしてくれなければならぬのです。」

「しかし、僕はこれから自分の聯隊へ参加しなければならぬのです。」

「どちらにしても、あなたは今夜中には向うへ行き着くことは出来ないでせう。明日でなければ、ロツセルまでは行かれますまい。——今夜僕と一緒にゐて下されば、非常に有り難いのですが、僕一個の名譽ばかりではなく僕の一家の名譽に關する事件にお力添へして下さいになるのです。尤も、身に危険なことも少しは起るかも知れませんが……。」

實に彼は言いことを云つたものだ。いきなり僕がラタブランから飛び降りたことは云ふまでもあるまい。



「兎に角、中へはひらう。さうして、何をするのか、十分知らして貰はう。」

彼は僕を居間へ連れ込むと、うしろのドアをしつかりと閉ぢて、誰もはいつて来られないやうにした。よく發達した體軀に、彼はランプの光を一杯に浴びて立つてゐた。眞面目な顔付と、銀鼠色の制服とが實にピッタリよく似合つて、僕は一時に彼に引き附けられるやうな氣がした。云ふまでもなく、彼の態度が、丁度僕が彼の歳頃にやつてゐた通りだつたので、大いに同感を催した點もあつた。

「二言三言お話しすればすつかり分ることなのですが、」彼が説明し始めた。「今まで僕がお話しなかつたのは、僕にとつて、事件が口にするのも苦しいことだからなのです。——僕の父は、クリストフ・デュロツクと云つて、有名な銀行家だつたのですが、九月革命の虐殺の時、民衆の手で殺されてしまひました。御存じの通り、群衆は牢獄を占領して、所謂三

人の裁判官を選出し、不幸な貴族階級を裁きました。僕の父は、罪もないのに、死刑の宣告を下された一人です。しかし、父はしじゅう貧しい者の味方として知られてゐましたので、澤山の人々が、父のために命乞ひをしてくれました。丁度その時、父は熱病をわづらつてゐたので、毛布に包まれたまま、半死半生の有様で、三人の裁判官の前へ運び出されました。」

「彼等のうち二人までは、父を放免することに賛成してくれましたが、三人目の、若いジャコビン黨の一人が——その男は、偉大な體格と、野獸のやうなあら／＼しい心とを持つてゐたので、惡黨共の頭になつてゐましたが、其奴が、いきなり父を擔架から引きずり卸すと、あの重たい長靴で、蹴つて／＼蹴り捲つて、とう／＼往來へ投げ出したのです。そこで父は見るも無慘な死にやうをしました。あなたもお分りでせうが、これは全くの人殺しです。三人の

うち、二人までが助命に賛成してゐたのですから。」
『そこで、社會の秩序が回復するのを待つて、僕の兄が、この男の行方を尋ね始めました。僕はその時まだほんの子供でしたが、何しろ一家に關する問題なので、よく僕のゐる前でさまざまに論じられました。其奴の名はカラバンと云ふのです。彼はサンステールの護衛兵の一人で、有名な決闘家でした。』
『すると、ある時、ストローペンタル男爵夫人と云ふ外國婦人が、僕の父と同じやうに、ジャコビン黨の連中の前へ引き出されたことがありました。その時カラバンは、その男爵夫人の命を助けてやる代りに、夫人の全財産と所領地とを貰ひ受ける約束を結んでしまひました。かうして彼はその夫人と結婚すると、爵位と名前とを繼いで、ロベスピエールが失墜すると同時に、フランスを逃げ出してしまつたのです。その後、彼がどうなつたか、僕は知ることが出來ずにゐました。』

『あなたはきつと、名前も爵位も分つてゐる男を探し出すのは、譯はないではないかと仰しやるでせう。しかし、僕は、革命のために無一文になつてしまつてゐたのです。お金がなくて、どうしてこんなことが探索出來ませう。するうちに、再び帝政時代が來て、一層この探索はむづかしくなりました。』
『僕の兄は、軍隊生活を始めて出征すると共に、ストローペンタル男爵を探して、南部ヨーロッパを隈なく歩き廻りました。しかし、兄は、去る十月のエナの戦役に、自分の目的を貫徹しないうちに、戦死してしまひました。そこで、今度は僕の番が來たのです。僕は今の聯隊に編入されてまだ半月と経たないのに、初めて斥候に出たポーランドの村で、久しく尋ねあぐねてゐた當の相手の居所を突き止めることが出來たのです。その上に、まだその上に、我軍の中でも勇ましさと親切なことにかけては有名なあなたのような方と一緒になれたと云ふことは、何と



云ふ運のいいことでせう。』

話はこれで十分わかつた。僕は非常な興味を以つて耳を傾けてゐたが、しかし、デユロツクが僕にどう云ふことをして貰ひたがつてゐるのか、その點がハッキリしなかつた。で、「一體どうしたら僕はあなたのお役に立つのです?」と聞いて見た。

『一緒に持つていたゞきたいのです。』

『あの城へですか。』

『さうです。』

『いつ。』

『今すぐ。』

『行つて、君はどうしようと云ふのです?』

『それは向うへ行つてからでないと分りません。しかし、兎に角僕と一緒にゐていたゞきたいのです。』
僕の性質として、冒険に参加することを斷ることは出來なかつた。その上、僕はこの青年の氣持に大いに同情してゐた。で、僕は彼に手を差し出した。

「ロツセルへは明日の朝出發することにして、今夜は兎に角君と行動を共にしよう。」

僕達は、部下を寢室に残したまま、城までは一哩あるかないかの近き故、愛馬を疲らすでもないと思つて徒歩で出掛けた。しかし、實を云ふと、騎兵の歩いてゐる姿くらゐ僕の嫌ひなものはない。馬上豊かに跨つたところは、地上稀に見る雄々しさだと思ふが、それに引きかへて、片手に櫛を握つてサーベルが地に引きすらないやうに氣を附けたり、體を廻す時にも拍車を掬ひはしないかと爪尖立つたりするところは、堪らなく醜いものだ。が、幸ひ夜のことで誰も見えてゐる人はなし、僕等は平氣で歩いて行つた。

二人ともサーベルを腰にさげてはゐたが、僕は皮袋から一挺のピストルを取り出して、マントの下へ忍ばせた。どうも何か荒ッばい仕事が始まるに違ひないと思はれたからである。

城へ行く樅の林の中の路は、眞暗だつた。唯時々頭の上に、星がまばらにチラ／＼と見えるばかり。しかし、やがて目の前が打ち開けたと思ふと、すぐ行く手に騎兵用の短銃でも射撃出來さうなくらゐの近と城が聳えてゐた。

それは、大きな異様な建物で非常に年經たものであることは一目見て明かだつた。建物の角々には、尖塔が立ち、こつち側にだけ樹形が見えた。黒々と聳えた中に、たつた一ヶ所だけ灯の洩れる窓があつた。その外には、何も見えす何の物音も聞えなかつた。

暗闇城と云ふ名の通り、何とも云へない一種異様な鬼氣が身に逼るのを僕は覺えた。

しかし、デユロツク少尉は、元氣よく歩調を早めた。で、僕も彼のうしろから、不氣味な路を城門に向つて歩いて行つた。

(つゞく)



かくれんぼ (推薦)

新潟渡邊 直

お月さん かくれんぼ
かくれんぼしてる

雲に かかれて
かくれんぼしてる

誰ぞ かくれんぼ
かくれんぼしてる

雲さ かくれんぼ
かくれんぼしてる

少年と南蠻人の仇討

岡崎六郎
寺内萬治郎盡



りでした。

丁度、その頃の事です。

天文十二年、信濃の川中島で武田信玄と上杉謙信とが火の出るやうな合戦をやつてから、六年を経た天文十八年、日本の一方では九州の一端に天主教といふキリスト教が傳つて大騒ぎを始めてゐました。はじめ、布教はなかく困難をしましたが、西洋から偉い坊さんが續いてやつて来て、熱心に傳道を致しましたので、頑固な昔の人達も漸く天主教に耳を傾けるやうになりました。

その中に織田信長などといふ偉い大將が出て天主教を保護して、その布教を許しましたから、天主教を奉じる人の數がめき／＼と殖えて、九州はおろか日本國中に大きく擴りました。中にも九州の長崎あたりは、その地方の大名の大村侯が熱心な信者の一人だつたので、長崎の南蠻寺は、今日は十五人明日廿人と、日に日に洗禮を受ける人の數が殖えるばかりでした。

季節は何時頃でしたか、或る日、前川春之進といふ中年の武士が、自分の子の秋之丞といふ十四五の少年を連れて、長崎に近い田舎道を歩いて居りますと、丁度向ふから行き違ひに出遭つたのは馬に乗つた西洋人（その頃は南蠻人と云ひました）の一隊です。どうした機みからか、春之進が南蠻人と喧嘩をして丁ひました。

双方二言三言云ひ合ひましたが、何と云つても相手は南蠻人ですから、話の通じる道理がありません。かッとなつた春之進は、とう／＼腰にさした太刀の鞘を拂ふが早いか、先頭に乘つてゐた南蠻人の一人へ切つてかかりました。しかし、向ふは馬に乗つてゐます。

南蠻人が驚いて馬を跳上げた拍子に、太刀は空を打つて、春之進はもんどり打つて倒れました。そこ

へ背後にゐた南蠻人の一人が、春之進の背中へ火縄銃を打ちかけましたからたまりません。春之進は其の場に血煙をあげて倒れてしまひました。そして、伴の秋之丞が手を出す隙もなく、南蠻人の一隊は何處へか逃げ去つてしまひました。

取り残された少年の秋之丞は、子供ではありませんが、敵を倒して父の仇を討つのが武士の本望でありますから、敵の後を追はうと立ち上りました。しかしふと思ひ浮んだことは、自分の身は既に神に捧げた天主教の信者であることです。天主教は人を殺すなかれと教へて居ることを秋之丞は思ひ出して、力なく地べたに坐つてしまひました。秋之丞は淋しく父の亡骸の傍に膝いて、十字を切つて、男泣きになりました。

あたりは何時の間にか暗くなりました。夕べの風が冷く吹いて來て肩をなで、行きます。咽び泣く聲がとぎれ／＼に闇の中に聞えるだけで、黒い山、黒

た。そして、その歸り途に南蠻寺へお禮まゐりに立寄ることになつてゐましたので、長崎の町は大層なさわぎです。

「ワリニヤンさまの祟い御姿を拜みませんかえ。」

「何處をお通りになられるのだらう。」

「本町通りを真直ぐ南蠻寺に行かれるさうです。」

「未の刻までにはお出でになるさうだから、もういい時刻だ。さあ／＼、参らう。参らう。」

女子供は云ふに及ばず、待までも、祟いワリニヤン法師のお姿を拜まうと、先を競つて本町通り筋へ駆け集りました。物見高い人々は、早や道に垣を作つて家々の軒下に立ち並んで、ワリニヤン法師の御通りを今やおそしと待つて居りました。

その頃、長崎の町には、澤山のポルトガル人が、商賣のため店を開いて居りましたが、元よりこのポルトガル人達は、天主教の信者でありましたし、又同じヨーロッパ人でもありますから、ワリニヤン法

一六
い森、何一つ答へるものもなく、静まり返つて居ります。

その中に泣き聲はビタリと止まりました。するとかれこれ一時間もたつたところ、闇の中から叫び聲がしました。

「憎い南蠻人め、命に換へても討とつてやる。仇討せずには置くものか。南蠻人は天主教の信者だ。その信者が人殺しをしたのだ。戒めを教へる南蠻人が戒を破つたのだ。私は天主教が嫌になつた。私は日本の武士だ。親の仇を討たねば末代の恥だ。あゝ、私は命に換へても南蠻人を討ちはたしてやる。」

その叫び聲は勿論秋之丞でした。

その頃、長崎にワリニヤン法師といふ有名な天主教の坊さんがをりました。

ワリニヤン法師は、殿様の太村侯が神様の御守護によつて、めでたく隣り國と和睦が出来て國へお歸りになつたので、殿様にお喜びを申上げに参りました。

師を大層敬つてをつたことは云ふまでもありません。ですから、こんな日には日頃兎角輕蔑され勝であつた南蠻人達も、今日こそはと、吾がもの顔で大

通りに一齊に出て、ワリニヤン法師を待つてをりました。

「南蠻人どもが、今日は随分見當るのう。」

「あれ、あの股引を見なされ。いゝ格好ぢや。」

「アツハ、アツハ、。」

「ワリニヤンさま程のお偉い方が、南蠻人だとは勿體ない。」

などといわ／＼罵り合つて、街は大變な賑ひです。

暫くすると、向うの人混みの中から、

「喧嘩だ。喧嘩だ。」

と云ふ叫び聲が上りました。それと云つて彌次馬連が、その方へ駆け寄りましたから、混雜はいやが上にも高まつて、街はまるで戦場か火事場の様な騒ぎとなりました。

そのうちに相手が南蠻人で、此方が日本人の子供だと云ひ、なんでも子供が父の敵討をするのだと云ふ聲がだん／＼聞えて來ました。そんな事はこれまでにないことです。人々はワリニヤン法師のお通りも忘れて、喧嘩の方へ集りました。

成る程、人ごみの中をのぞいて見ると、少年と南蠻人とが、はたし合ひをやつてゐます。よく見ると、其の少年と云ふのは、紛れもない秋之亟でありました。そして、相手の南蠻人は、秋之亟のお父さんを鐵砲で射つた男です。

とばかり打つて出られたのですから、驚くまいことか、青い目を白黒させましたが、仕方がないので、腰のサーベルを引き抜いて立合ひしました。

しかし、見物人の方から考へると、一方は驚くほど丈の高い、おそろしい南蠻人であるのに、此方は腕の細い少年ですから、勝はどうも南蠻人のものらしく思はれました。

しかし、二三度太刀をガチャリ／＼合せてゐる内に、秋之亟の太刀先が敵の肩のところへ走つて、あはやと思ひましたが、届きませんでした。しかし、そのとたんに見物人が、

『わッ。秋之亟、しつかり！』

と呼びかけましたから、秋之亟は、勇氣を得て、得意の突きを喉もと目懸けて打ち通しました。敵もサーベルを持つて、それを打ち拂つて見ましたが、へ／＼／＼剣では叶ひません。南蠻人の喉からは、血がバツと流れました。



南蠻人は六尺もある大男です。秋之亟は相手の頭を狙ふわけにも行きません。そこで、相手を一べんでやつつけるには胸を狙ふより外はないと見てとつて、隙があつたら、敵の胸を真二つにしてやらうと身構えてゐました。

南蠻人の方では、見物人の中から不意に、親の敵

見物人達は、またも
「秋之亟、秋之亟！」
と叫びました。

血まよつた南蠻人は、劔を夢中で振り廻しましたが、見當が定りませんから、却つて、秋之亟の落着いた太刀先きにつけ入れられるばかりです。敵は、だん／＼後下りを始めて来ました。

秋之亟は、今度こそと思つて、敵の退いて行く處を追ひかけ、巖も砕けと胴を突きましたが、受けとめられて、走つた先が敵の股を刺しました。

その時、敵は叶はぬと見て取つたか、ひらりと身をかはして人々を押し抜けて、夢中で逃げ出しました。

「卑怯者ツ。待て！」

と、秋之亟は呼び乍ら追ひかけました。

秋之亟は本町通りを二丁程追つかけて、やがて、南蠻寺の門前へ差しかかりましたと、足下に立ちふ

さがつた石の様なものがありました。
血走つた眼で秋之亟が見ると、其の蹲つて居るものと云ふのは、なにやらしきりと口に稱え乍ら、掌を合はせて居る南蠻人の老僧でありました。秋之亟は、はつと思つて耳をそばだてました。

「デラス。デラス。」

と神を呼ぶ壯嚴な老僧の聲。

これを聞いた秋之亟は、恐しい電氣に觸れた様に、身體が悚つとして、顔が蒼白くなりました。秋之亟は、思はず、ばつたりと、大地に身を投げ出しました。そして土で顔を掩ふやうに兩手をついてそこに倒れてしまひました。

「あゝ、ワリニヤンさま。法師さま。」

と、微かに微かに、咽び泣きの中に洩れて聞えて来るのは、秋之亟の聲でした。

その老僧こそワリニヤン法師でありました。

(をばり)



漂流二百三十日

久米 絃一

岩岡とも 枝盡

(前編までの梗概)

これは、カザロンと云ふ人の漂流譚です。カザロンは、帆船に乗つて、大西洋の真中に出了。ところが、船底の積荷に火事が起つたのです。運轉士のカーチスは、落附いた人で、なから、出来ただけの手當をして、なんとかして火事を消しとめようとした。この文の中に出てくる、「私」と云ふのは、カザロンの事です。

一、綿火薬

私はその晩、眠る事が出来ませんでした。曉方になつてウト／＼としたかと思ふと、一ツの恐ろしい夢を見ました。それは、チャンセラー號が、大洋の真中で、炎々と焰をあげて燃えてゐる悲壯な有様でした。櫓は折れ、帆は切れ／＼

に引きちぎれて、船の周囲の波は赫々と焰を反射してゐました。眼が覺めた時、私は身體中に、グツシヨリと汗をかいてゐました。甲板へ出て見ると、幸ひ四邊の有様は、昨日と變りがないようすです。たゞ、船底の火勢は、いよ／＼猛烈になつて來たと見えて、甲板の上の熱さと云つたらありま

せん。板と板の縫ぎ目からは、松脂やタールが流れ出して、ジユクジユクと煮えたつてゐます。水夫達はカーチスに率ゐられて絶間なく甲板の上へ水を注いでゐます。しかしそれも、瞬く間に乾き切つてしまふのでした。たゞ一ツ幸せな事は、船客の中の誰一人としてこの火事に氣が附いた者が無かつた事です。私はカーチスに、確く秘密を守る事を約束しました。

ところが此處に、容易ぶらぬ出来事が起つて來ました。お晝過ぎに、私は船客の一人のルービーの室の前を通りかゝりました。すると中から、何か聲高に云ひ争さう聲が聞えて來たのです。

「君、戲談ごちやないせ。もしもの事があつたら、どうするつもりなんだ。」と、叱るやうに云ふのは、技師長ホルステーンの聲です。「なアに、心配はありませんや。私は充分氣を附けて荷造りしたんですからね。」と云ふのは、ルービーです。「いくら安全に荷造りしたと云つて、君、考へて見給へ。爆發物ぢやないか。爆發物を積荷の中へ入れてくると云ふ法があるもんか。」

「君はそれに就いて、船長の許しを得て來たのか。」

「いや、船長の許しは未だ貰ひません。別に大した事ぢやありませんからな。」

と、ルービーは落附いたもので

爆發物と聞いて、私は愕然としました。そして、人の室である事も忘れて、いきなり中へ駆け込みました。

「なんだつて。爆發物が積んであるんだつて？」

私は大きな聲で喚鳴りました。

「さうです。ルービーさんが、綿火薬の三十封度入りの樽を、船底へ隠してゐるのです。」

と、ホルステーンは云ひました。



「綿火薬！」私は思はす叫んで、ルービーの顔を見詰めました。ルービーはニヤ／＼笑ひながら、煙草をくゆらせてゐます。

私は直ぐ外へ走り出て、カーチスを連れて來ました。流石のカーチスもこの時は餘程驚いたようすでした。

カーチスは、ルービーの肩に手をかけて、

「ルービーさん。貴方は飛んでもない事をして呉れましたなア。」と云ひました。

併し、ルービーは平氣なもので

「貴方がたは、なんだつてそんなにやい／＼云ふのです。別に大した事では無いぢやありませんか。貴方がたが、危険だと思召しになるのなら、何時でもよござんす、その樽を海の中へ投げ込んで下さい。私の荷物には全部、保険がついてゐるのですからね。」

と、晒々して答へました。

これは流石のカーチスも、むツとして拳を握り固めました。又

思ひ返したらしく、ぢいッと腕を組んで我慢してゐました。
併し私には、カーチスほどの落附きがありません。いきなりルービーの胸ぐらを掴まへて、『馬鹿ッ。貴様は今この船に火事が起きてゐると云ふ事を知らないのか！』と叫びました。

二、ルービーの狂亂

叫んだあとで、私は直ぐと後悔しました。これは飛んでもない事を云つてしまつたと思ひました。併し、もう後の祭りです。見る／＼ルービーの顔が眞青に變りました。首を左に曲げ、眼を大きく見張つて、私の顔を見つめてゐました。

が、突然私の腕を振りもぎると、狂氣のように外へ走り出しました。

『火事だッ！火事だッ』

ルービーは頭を掻きむしつて、船の上から下へ、大聲で喚きながら駆け廻りました。

人々は驚いて飛出して來ました。水夫達は、もう愈々最後の時が來たのだと思つて、直ぐボートの所へ駆け寄つて、それを降さうとしました。

『いけない！ボートを降ろしちやいけない！』

カーチスは眼の色を易えて叫びました。そして、甲板の上を右へ左へと逃げ廻る船客達に向つて、『皆さん！静かにして下さい。大丈夫です。大丈夫です。』

と、力の限り叫びました。人々は、やつと落附いて來ました。そこでカーチスは、極く簡単に、船底の積綿に火事が起きていること、併しそれは手當次第で、必ず消しとめられると云ふ事を話しました。

併し、ルービーは、全く氣が變になつたと見えて、相變らず『火事だッ、火事だッ』と叫びながら船の中を飛び廻つてをります。私は、もしや、ルービーが、例の火薬の事を喋べりはしまいかと、心配になつてきました。若しそんな事があつたら大變です。水夫達はさつと申し合はせて、この船を逃げ去つてしまふに違ひありません。私は、カーチスと相談して、



ルービーを船室へ押しこめて、出られないやうにしました。

先づこれで一段落ついたものの、おさまらぬのは火薬の事を知

つてゐる私達三人です。

カーチスは私の手を取つて、『カザロンさん。私共の立場は、容易ならぬ事になつて來ました。私の只今の、苦しい心の中を察して下さい。下さるのは、たゞ貴方ばかりです。』

と云ひました。

私は顔を伏せて、返す言葉もありませんでした。全く、カーチスの云ふ通り、チャンセラー號は、今地雷火の上に乗つてゐるやうなものです。そして、地雷火には既に口火がつけられてゐます。遅かれ早かれ、それは爆發するにきまつてゐます。

この困難な時に當つて、船長のヘンリーはどうしてゐたでせう。

三、船長の病氣

残念な事に、船長は一週間ほど前から頭の工合が變になつて、殆んど仕事をすることが出来ませんでした。船長には、以前から精神病の素質があつたのですが、今度の航海には、殊にその發作がひどくなつたのでした。

船長は、一日中自分の室に引込んで、何をすると云ふ事もなく、ボカンとしてゐました。その光りの無い眼は、いよ／＼ドンヨリと曇つてゐました。

こんな風なので、チャンセラー號の實際上の船長の仕事は、殆んどカーチスが代つてやつてゐるのでした。

ルービーの事件のあつた翌日の事です。船長はなんと思つたか、フラ／＼とカーチスの傍へやつて來ました。

「カーチス君。僕は君に話があるんだ。」

船長は眼を据えて、ちいッとかカーチスの顔を見ながら云ひました「カーチス君。僕はこの船の船長ぢやないか。え、さうだらう。」

「さうです。貴方はこの船の船長です。」

「さうだらう。俺もさうだと思つてゐる。だが俺はもう、船に乗つてゐるのが嫌になつてしまつた。海を見ると、頭がガン／＼して堪らない。俺はもう今日限り船長はやめてしまひたい。カーチス君、君

コナ

一つ代つてやつてくれないかね。」それを聞いたカーチスは、悲しうな顔をして、船長の顔を見ました。

「船長。どうかそんな事は仰しやらずに。……少し御養生なされば、きっと元通りになりますから……。」

「まあい。そんな事は云はんでいい。それはお世辭と云ふものだ。……ところで、エート、何んだつけない、エート、この船の名は何んと云つたつけない。」

「チャンセラーです。」

「さう／＼、チャンセラー。……では、かう云ふ事を君に命令するいゝか。『チャンセラー號の船長ヘンリーは、十月十二日以後、船長

の職を、ロバートカーチスに譲る。』と、いゝか分つたか。」

船長はかう云つてしまふと、クルリと後を向いて、又靜かに自分の室へ歸つてしまひました。

カーチスは決心しました。船長の病氣が癒るまでは、自分が代つてその職に就かうと、確く心を決めました。

カーチスからその事を聞いた時、乗組員一同は思はず「わア」と喜びの聲を挙げました。實際、チャンセラー號は、この危い時に當つて、又と得がたい立派な船長を迎へる事が出來ました。

四、最後

晩になつて風が出來ました。

船は大波のウネリに乘せられて、大きく前後に揺れました。

私は、船室の中が熱苦しくて、とても眠れないので、甲板へ蕪溜園を出して眠りました。

真夜中の事私は突然、騒がしい物音に眼を覺されました。火事の事が氣になつてゐるので、僅かな物音にも、ハツと驚くような始末でした。

私は直ぐ聲のする船口の方へ駆けつけて見ました。と、どうでせう。船口の隙間から、濃々と黒い煙が噴き出してゐるのです。水夫達は一心になつて、隙間々に帆木綿を詰めこんでゐます。耳を澄すと、船底の方に當つて、シュウシュウと云ふ何か板でも燃えるよ

うな烈しい音が聞えてきます。

「カザロンさん。とう／＼倉庫の外へ燃え移つてしまひました。もう駄目です。」

と、傍にゐたカーチスが云ひました。私はさう云ふカーチスの顔に、悲痛な笑の浮んでゐるのを見ました。

その途端、中甲板の方に當つて突然、ドーンと云ふ凄じい爆音が聞えました。振りかへつて見ると今や火は甲板へ燃え抜けたと見えて、一條の火柱が高く空へあがつてゐるのが見えました。それに續いて、紅蓮の焰が盛んに火華を散らし出しました。丁度その上へ吊してあつた一隻の救命ボートは、粉微塵に吹飛ばされてしまひまし

た。

私は、愈々最後の時が来たと思ひました。

りました。

忽ち甲板の上は、云ひようのない混亂に陥りました。水夫達は

ました。

それと見たカーチスは、水夫等の間に割込んで、



水夫の一人はカーチスの命を待たずに、警鐘を減多打ちに打ち鳴

直ぐにもう一隻のボートの所へ駆け寄つて、吊綱をゆるめようとし

『よせ、よせ！ この波の荒いのに、ボートを降ろしてどうするん

だ！ 見ろ、粉微塵になつてしまふぞ！』

と叫びました。

併し水夫達は、今度はどうしても聞き入れません。カーチスを突飛ばして、ズル／＼と吊綱をゆるめました。

その途端、山のような大波が、さつと崩れかゝつて来ました。あなやと思ふ間にボートは強たかチャンセラー號の横腹に叩きつけられて、あとかたもなく碎かれてしまひました。

水夫等は陸然としました。もう残るのは、一隻の小さな捕鯨用のボートしかありません。これでどうして全員二十九人の者が逃れる事が出来ませう。

其の時、ルービーが、監禁室の窓を叩き破つて出て来ました。ルービーは、もう全く氣が狂つてゐました。

『綿火薬！ 綿火薬！ 我々は粉微塵になつてしまふ！』

ルービーはかう叫びながら、甲板の燃え抜けた口の廻りを、ぐる／＼と火取り虫のように駆け廻りました。

私は近寄つてルービーを抱き止めやうとしました。併し、時は既に遅く、ルービーは、つと身を翻したかと思ふと、忽ち燃え熾る船底の焰の中へ飛び込んでしまひました。

我々は二度と彼の姿を見ませんでした。

私はその晩の恐ろしい光景を、未だに忘れる事は出来ません。

チャンセラー號は、さながら火の船でありました。甲板の真中は大きな鎔礦爐のように、白熱の口をあけてゐます。焰はその口から真直ぐに立昇つて、その先は殆んど檣の頂上まで達しようとしてゐます。

周囲の波は赫く火を照りかへし、遠く空の雲までが、赤々と焰に色どられてゐました。

恐らく周囲何十里の海上から、この火の船、チャンセラー號の姿を明らかに認める事が出来たでせう。



狸の子か

坊主の子か

立石 美和

羽鳥 古山 畫

今とちがつて、昔は、電氣も瓦斯も、石油ランプはおろかな事、ローソクさえも無かつたのですから、日が暮れたら最後、その暗いこと、淋しい事、キツネも出て来る、タヌキもあばれる。それ何處其處へ強盗が出る、いや幽霊があらはれる。あそここの松の木には三ツ目子僧がすんで居る。どこの土境には目

も口もないノツペラボーが居て、晝間は山へ入つて寝て居るが、夜になると歸つて来て、通る人の顔をさすると云つたさわざ。
誰だつて、恐ろしがつて、夜歩きなんかする者はありませんでした。
ところがまた、その時分には、今とちがつて、面白い勇敢な人もたくさん住んで居たと見えて、
『よし、俺が一つ退治てやらう。』

なんて、強さうな事を云つて、刀を四本も五本もさして、わざ／＼淋しい夜道を歩きたがる人もあつたさうです。

で、そんな理ですから、誰か一人度胸のすわつた人とか、武術のすぐれた人が現はれて、幽霊や化物の正體を見現すとか、また、悪戯者のタヌキを切り殺すとかいふ様な事があると、それをほめそやす世間の評判といふものは、それこそ大變で、神宮競技で、世界記録を破つた位のさわざではないのです。

今でもさうですが、松島の瑞巖寺と云へば、昔から有名なお寺でした。このお寺に仕様のないいたずらな小僧さんが居ました。

何しろ、未だなりたての小僧さんですから、皆から、「おい小僧!」「それ小僧!」と朝から晩まで、こき使はれて、おいしい物もたべられないし、第一

體の体まるすきもない。

『何んだ馬鹿々々しい! みんな俺を馬鹿にしてゐる! よし! 一つ敵を打つてやらう……!』

さう考へたので、夜になると、そつと、抜け出して、境内の、大きな松の樹に登つて、ちいつとかく居りました。そして、晝間こきつかわれる年上の坊さん達が、下を通ると、眞黒に繁つた枝の上で、
『ボロ／＼! ボロ／＼!』

と、恐ろしい聲を出しておどかします。

『わあッ!』

何の坊さんも、皆腰を抜かさんばかりに驚いて、ころがり乍ら逃げて行きます。

さあ小僧さん、嬉しくつて、面白くて、とてもやめられない。晝間、
『おい小僧!』

と、偉らさうに云はれても、もう腹が立たない。
『いゝよ、また晩に腰を抜かしてやるから!』お腹

の中で笑つて居ます。

だん／＼面白くなつて、だん／＼度胸がすわつて来て、小僧さんこの頃では、もうボロ／＼なんて聲で、おどかすのはつまらなくなつて、すつと、下の方へ低く張つた、枝の先の方まで這つて行つて、下を通る坊さん達の頭を、黙つて、ツルリと、撫でる事を覺えて終ひました。

これには、誰だつて度ぎもを抜かれたに違ひありません。忽ちの大評判で、

「松島の瑞巖寺へ化物が出る！」

「いや、あれは、千年も経つた大狸ださうだ！」

「たしかに幽霊ださうだ。伊達の殿様に手打ちになつた、士ださうだ！」

いろ／＼なうわさが、奥州中に廣まる。さあ斯うなると、先程も御話した天下の豪傑が、「俺が退治てやる！」と、我も我もと、思ひ／＼の得物を携へて、雲の如くに松島さして集つて来る。これからが

面白い。

三

見るから天晴な旅装、雲の如くに集つた武藝者もいざとなれば弱い者で、真暗闇の中で、突然ツルリと頭を撫でられると、「わあつ！」と叫んで、無我夢中で、刀をふり廻す位が關の山、夜が明けると、「誠に残念！ 今少しの所で打ちもらした。いづれ改めて來ませう。」

そんな事を云つて、ゴソ／＼と出立して終ひます。所が、得意になつて、悪戯を續けて居た小僧さんも、少し閉口したと云ふのは、その頃評判の劍客、谷口高名齋といふ、ほんとうの達人が、やつて來たのです。

谷口先生は、奥州津輕の人、何故高名齋といふかと云ふと、體程の變人で、

「私は、名も無い輩は大の嫌ひだ！ 名も知れぬ奴

に確な奴は居らん！ なんでも、天下高名の士と交を結ばねばならん！」

さう云つて、若い時に國を飛び出し、日本中を押し歩いた人。凡そ有名な劍客で、この先生と、一度や二度、立合はない人が無い代り、對手が、何んなに強さうな人でも、

「先づお名のり下さい。」

「島田貴美之進で御座る。」

「これは有名でない。とんと聞かぬ。さだめしへつばこで御座らう。御手合は御免蒙る。」

さう云つて、どん／＼にげ出して終ふ。誰いふとなく、谷口高名齋と呼ばれた先生。

四五日といふもの、うつかり、手を出してツルリとやるのもいゝが、それと一絡に、バサリと抜き打ちに、腕でも落されては大變だといふので、小僧さんも、おとなしく引つ込んで居ました。すると先生は、

「ハ、ア、さては化者も、私に恐れて、最早退散したものと見えますな、結構々々。手を下さずに亡ぼす、これは武術の奥義である。滞在も今宵限、明日は早く出立いたませう！」

と、落着き返つて威張つて居ます。

もと／＼負けの氣の小僧さんですから、斯う威張られると、残念で残念で我慢が出来ない。何んとかして、あの高慢の鼻柱を折つてやりたいものと、腕組をして、首を振り／＼考へ込んで居ましたが、ふと眼にとまつたのは、今にも落ちこちさうに、眞赤に熱きつた庭先の百々柿。

「占めた！」

小僧さん、何うする氣か、ボンと膝をたいて飛びあがりました。

四

どつぷりと日が落ちて、やがて、しん／＼と夜が

更けて來ました。

今日が最後の夜だといふので、谷口先生は、用心深く身装えをして、廣い瑞巖寺の境内を、行つたり來たりして居ました。やがて、評判の、松の太木の下へ佇んで、ちいつと耳を傾けました。が、遠



い遠い所で、ボロツクホーホー、それから犬の鳴き聲が聞える丈です。

やがて向ふの山から、大きなお月様が、ぬうつと顔を出して、四邊が急に明るくなつて來ました。

「はッ！ いゝ月だ。斯う明るくなつては、化物も出られまい。あつはつはつはつ！」

顔中口にして、大きな聲で空を見て笑ひました。いや、笑ひかけた時です。上の方で、バカ／＼と音がすると、何ものかゞ、すうつと飛び下りて來ました。はつとして、身をかわす間も何もありません。谷口先生の、きれいに剃り込んだ頭が、ヒヤリとしました。

「やられた！」

先生は思はず頭を抱えました。と、大變！ べたべたと、兩手に一杯血糊がつきました。だら／＼と顔へ流れ落ちて來ます。先生は、自分の頭が、眞二つに割れて終つたのかと思ひました。



「助けて呉れえ！」

いふ聲につれて、割れる様に戸を叩く音に、寢とぼけた坊さん達が、あわてゝ戸を開けると、血だらけの頭を抱えて、谷口先生がころげ込んで來ました。大變なさわざです。

「先生、先生、何うなさいました？」

「眞向に切り下げられた。私の命もこれ迄です。當瑞巖寺の大僧正は、天下高名の大和尚、何うか呼吸ある中に、引導を渡していただきたい。」

あまり氣の毒ですから、大僧正もお起きになる。大勢の坊さん達が、おひ／＼燈火をかゝげて、集つて來る。燈を寄せてよく見ると、これはこれは！ 何といふ事でせう。谷口先生のちよん髷には、大きな柿のへたがくつ附いて居て、頭から顔から、熟柿の實だらけになつてうなつてますが、その實、何處にも、かすりきす一つ、して居ないのです。勿論、あの小僧さんの惡戯に決つて居ます。

これには、坊さん達も自分の臆病を棚にあげて、腹を抱えて笑ひころげました。

五

ところで、これ大では、餘りしれ切れとんぼです

から、最早少し話させて下さい。

強い強いといふ土の度胸も大低は知れたものだ。恐い奴なんて居るものかと、安心して、得意になつて、それから、だん／＼上手になつて、小僧さんの悪戯が、いよ／＼烈しくなつたのは、云ふまでもありません。

ある日、矢張り夜更けでした。気軽な大僧正の和尚様は、何を思つたか、寝まき姿で、一人、ひよこひよこと起き出して、廣い境内を歩いて居ました。誰か來さうなものだと、松の樹の上で、待ちあぐんで居た小僧さんは、見ると、年取つた、ちつぽけな男ですから、大僧正とは思ひません。一つおどろかしてやろうと、例の一番下の枝の方へ這ひ下りて來ました。

運の悪い和尚様！ いたすら小僧が、待つて居るとは知らずに、ひよこ／＼と、其處を通つたものです。

「うまいぞ。」

小僧さん、すうつと手を延して、ツルリと和尚さんの禿頭を撫でました。

「ほ、う！」

和尚さんは、不思議にも驚かない、感心した様な聲を出して考へて居ます。

小僧さんは、今度は、ぐつと手を延して、べたりと、和尚様の頭を押えつけました。

「なる程、温いぞ！ 幽霊かと思つたら、さてはお前は生きて居るな。」

和尚さん少しも驚かない。小僧さんは、自分の方が少し氣味が惡くなつて來ました。それに、餘り驚かないので、やけくそになつて、今度は、クル／＼つと、二三度和尚さんの頭を撫で廻して見ました。すると和尚さんは、ニコ／＼と笑つて、

「いや、仲々柔らかい、可愛い手だ。さてはお前は子供だな。狸の子か？ 坊主の子か？」

と云ひました。が、おしまひの、

「坊主の子か！」

と云つた聲は、雷を十も合せたやうな大きな聲だつたので、小僧さんは、びつくりして、思はず足をすべらすと、どつと、和尚さんの上へ落つちて終ひました。

和尚さんは、落ちて來た小僧さんを、ひよいと抱えて、其處へ立たせると、

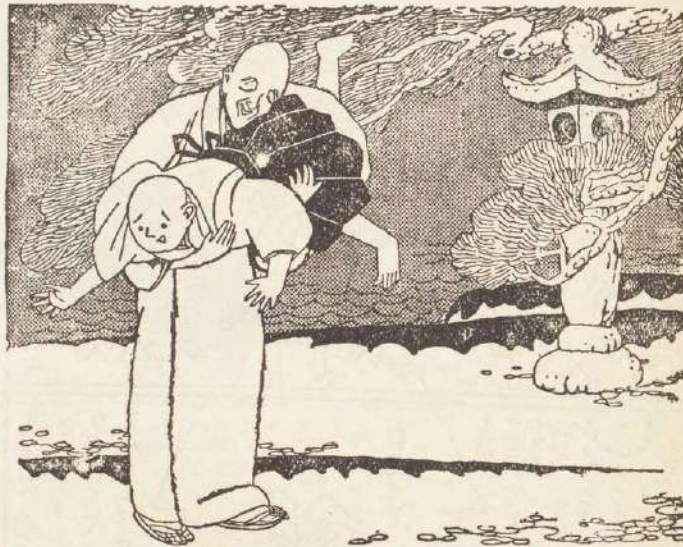
「けがするなよ。をかきな小僧だ！」

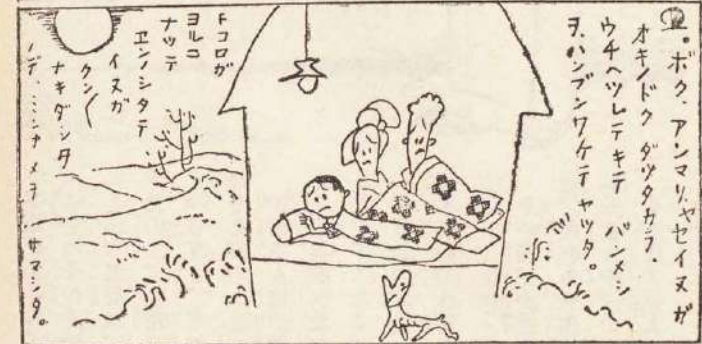
さう云つたまゝ、後も見ずに、ひよこ／＼寢屋へ入つて行つて終ひました。

その後、小僧さんも、一生懸命修業して、終ひには、矢張り大僧正になりましたが、

「一生の中、あの時程、恐ろしかった事はない。」と、よく話したさうでありました。

(をほり)





魔術義書

西條 十画
い き

二

(前回の梗概は一二四頁にあります)

ズボンの衣匣の空財布がたたくふくれてゐるのに
びつくりしたジョゼは、急いでそれを引き出して見
ました。すると、チンチャン、チャラン、チャンチ



ヤンとたまらなくいい音がして、山吹いろの金貨が
財布の口からあふれて床の上にこぼれ落ちてました。
もうまちがひはありません。たしかにムーア人の
魔法博士の處方がその奇態な効能を現したのです。
ジョゼは「ウーム。」と一聲唸りました。次いでそ

の顔はあまりの嬉しさにとろけさうになりました。

かれはそこでさつそく第二の實驗をやつて見よう
と想ひ、何がよからうかとあたりをきよろ／＼見廻
した末に、心の中で『この汚ない宿屋の室が直ぐに
王様の住むやうな立派な室に變るやうに、それから
このボロ／＼な古洋服が縞子の裏をつけた新しい天
鵲絨の服に變るやうに。』と念じました。

と、念ふが早いか、バツと瞬く暇もなくその室は
天井から、床から、椅子から、窓掛から、眼も眩い
やうな結構をつくした美しい室に變つてしまひまし
た。同時に、かれの着てゐた服は、ちやうど鹽をふ
りかけられた蛞蝓が溶けるやうに見える間にスル／＼
と消えて、いつか自分は注文通りの上品な、裁りた
ての天鵲絨の服を着て立つてゐました。

『うまいぞ！ ばかに工合がいいぞ。』

ジョゼはその手際にすつかり満足して、玉座に腰
をおろす王様のやうに、ふつ／＼としたその贅澤な

椅子にやをら腰をおろしました。

『お次は、ええとまづ腹拵へと行くかな。』

ジョゼは今度は心の中で、テイブルの上いちめん
に並べられた御馳走と、それのお給仕をする美しい
五六人の黒人の少女のことを念ひました。するとそ
の念ひは直ぐに叶へられて、眼の前には見たことも
無いおいしさうな料理の皿が、數へきれないほど並
び、それからたつ／＼ばしい煙のかげに、可愛い眼
をした黒人の女奴隷が、恭々しく頭をさげて御主人
の命令を待つて並んでゐました。

ジョゼはそれのご馳走を舌鼓うつて喰べてしまつて
から、今度は上等な珈琲を注文したり、葉巻煙草を
とり寄せたり、あぐくの果には管絃樂團を呼んで、
好きな音楽をさんざんやらせたりして、二時間ばか
りといふものは勝手放第、我儘放第なことをして遊
び樂しました。

そのうちにジョゼの心には、もうこれならば大丈

夫。この調子ならば世の中のこととは何でもかでも自分の思ひのままになる。」といふ見當がはつきりつきましたので、そこで一杯機嫌の何とも云へないいい心もちで、ぶらりと宿屋から戸外へ飛びだしました。昨日まで寒貧の旅からすのジョゼに、王様にも負けないすばらしい権力が降つて湧いたのです。いや、たとへどんな王様でも、この世にはまだ儘にならないことが在るでせう。ところがジョゼには儘にならないことは廣い世の中にただのひとつも無いのです。かれが喜びで有頂天になつたのも無理はないでせう。

ところでこのジョゼと云ふ男は、貧乏こそしてゐるものの、心だては至つて正直な人間でした。ですから若しかれで無いほかの人間が、かうした魔法を覺えたら、それこそどんな悪いことでも構はずして廻るでせうに、かれにかぎつては決してそんな曲つたことにその術を使はうとは思ひませんでした。その

證據にかれがいま心の中で起したのは、ごくをとなしい望みでした。それはまづ昨日宿屋の主人から死んだと聞かされた、昔馴染のアロンゾ伯爵が残した大きな土地を買ひとり、自分が伯爵になつて、入るだけのお金を持つてこれからさきを静かに暮さうと云ふ望みでした。そこでジョゼは今日その土地が競賣されるといふアルジュルの村まで出かけて行かうと思ひたちました。

ジョゼが街道をぶら／＼やつて來ますと、そこは町へゆく百姓たちや、荷車や、馬車や、驛馬でいっぱい賑かさでした。その中でジョゼは右を見たり左を見たりしながら、ちよい／＼と例の魔法を使つて見ました。

まづ通りすがりの乗合馬車を見ますと、ちやうど満員で弱々しいお婆さんがひとりなかで頼りなく立ちんばうしてゐました。そこでジョゼは誰かその中の一人が下りてやればいいと思ひました。すると

かれがさう思ふが早い、腰かけてゐた若い男の一人が、急に何か思ひ出したやうに手をふつて、御者に馬車を止めさせました。さうして、

『さうだ。おれはこの村に寄らなけりやならない用事があつたんだ。』

と呟き、呟き大急ぎで車から下りました。立ちんばうのお婆さんは、『やれやれ。』と云つた顔つきで、あとの空いた席に腰を下して、馬車はまたゴト／＼と走り出しました。

路ばたの樹の下にひとりのお爺さんの乞食が坐つてゐました。幾日もものを喰へないらしく、見るから弱り切つて、通行人にお辭儀をするのもやつとどやうでした。ジョゼはこの、乞食の鼻さきにふいとどこからか、金貨が一枚落ちて來たらさぞ面白からうと思ひました。すると、その途端に、乞食のすぐ眼の前の埃の中でキラリと光つたものがありました。乞食は何かと思つて大急ぎで拾ひ上げて見まし



た。ところが、まがひもない金貨だつたからたまりません。かれはこんなものがどうしてここに落ちてゐたのかと怪しむ間もなく、天のあたへと三度も四度もおし頂いて、すぐバンでも買ふつもりなのでせ

う。そこへ飛んで行つてしまひました。
これを見たジョゼは面白くて「たまりませんで
した。で、人に施しをするのはこの位で止めて今度
は悪い奴にすこし罰を加へてやらうと思ひました。
しばらく歩いて或る橋の上まで来ますと、ちやう
どその真中で部下の兵士の敬禮のしかたがわるいと
云つて、大怒りに怒つてゐる士官がありました。餘
鬚をひねりくどく叱言を云つてゐるその様子が
あんまり威張りくさつてあ
ますので、ジョゼは「あ
んなにまで永く叱言を云はな
くつてもよさうなものだ。
あんな士官の帽子は風で河
の中へでも吹き飛ばされて
しまへばいい。」と、思ひま
した。と、さう思ふか思は
ないうちに、さつとどこか

らが一陣の強い風が吹いて来て、「ごめん。」とも云
はず大威張にそつくり返つてゐる士官の帽子を河の
中へ飛ばしてしまひました。
「これは怪しからん！」
士官は大慌てに慌てて、橋の欄干へ飛びついて、
河を眺めました。河の水はその白い羽根飾りのつい
た帽子をのせたまま、士官の泣き顔を笑ふやうに悠
悠と流れて行きました。

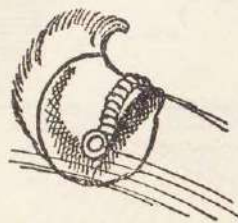


それから少し来ますと、
今度は路ばたで一人の意地
悪さうな顔をした馬方が、
重い材木を曳き惱んで動け
ないでゐる驛馬を、用捨な
く鞭をあげてビシリと
擲りつけてゐました。
「なんて可哀さうな真似を
する男だ。こんな男の鞭は
折れて自分の顔にぶつかる



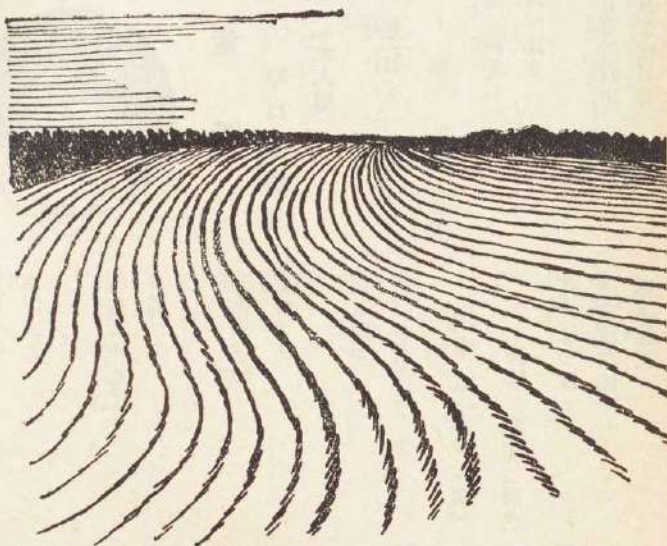
がいい。」

ジョゼはかう思ひま
した。するとその拍子
に、勢よく驛馬の背に
當つてゐたその鞭は、
急にビシャと二つに折
れて、その一方が飛ん



だはずみに。馬方の顔にひどくぶつかりました。
「おゝいてえ、いてえ。」

馬方は兩手で顔を押へました。
ジョゼはその馬方の様子があんまり可笑しいので
おもはず「ブツ。」と噴きだしさうになりましたが、
やつとこのことで抑へつけました。
さうして見ると、いつか自分は見覚えのある昔の



ら、かれはここは牧場に變へてしまつて羊を飼つた方がよほど工合よさうだと思ひました。麥畑の方は、またむかふに在る荒地を百姓たちに開墾させて、そこにいつばい生へてゐるヒースを根こぎにさせたあとに、新しくこしらへればよいと思ひました。

ジョゼはもう事實自分がこの土地の地主にでもなり切つた氣もちで、ふところから手帖を出し、鉛筆で線をいろいろに引きながら、このところをかうして、あすこの隅をああしてという／＼これからの計畫を夢中になつてたててゐました。

と、その時、おもひがけなく頭の上で誰かがどなる聲がしました。

「コラー、おまへはいつた誰の許しを得てここへ入つて來たんだ？」

(つづく)



アロンゾオ伯爵の邸のそばに來てゐました。そのこんもりした森が街道の片側にづつと續いてゐました。

お午ちかく太陽の光がだん／＼暑くなつて來ましたので、ジョゼは目を

避けるため、かねて勝手知つたこの森の中の小徑をぬけて、目ざすアルジェルの村の競賣處へ行かうとおもひ、邸の中へ入り込みました。

ちやうど雨あがりの、明るい夏の日で、籬は眞白な花でおほはれ、森の中は數知れぬ小鳥の歌でにぎやかでした。

小屋がけをした木樵たちが大勢で、鼻唄まじりで伐り倒した老樹を、いろいろに細かく刻んでゐました。ジョゼはこれを見ながら、今日にでも自分がこの土地を買つたら、こんなによたらに樹を伐らせたり、またこんなところに景色をわるくするやうな小屋などを建てさせはしないぞと考へました。また麥畑を通りなが



童謡

野口雨情選

(大人篇)

神田の子(賞)

湊 一訓(東京)

鳥 神田に
雨が降る

日暮の灯が
みなばけた

神田の川に
水がふえ

橋は荷を引く
お馬たち

子供は祭の
夢見てる

雨に灯が
皆ばけた

汽車ぼつぼ(賞)

青柳 花明(群馬)

汽車ぼつぼ
汽車ぼつぼ
汽車ぼつぼ
停車場だ

シグナル
カタリと
手まねいだ

プラットホームで
驛長さん

赤すぢ

帽子で

待つてるぞ

茅野の雨

小山えうじ(神奈川)

茅野の雨の濡れ鳥

鳥さ子がない

子がほしい

四八

茅野の雨の濡れ地蔵
地蔵さ子をうむ
子を育つ

茅野の鳥濡れ鳥

地蔵さおがんで
子をうみな

春の歌

阪野 潤(大阪)

椿の花が

お簀の蔭で

紅店出した

春風吹いて

さら／＼笹葉

お日様ぬくい

権現山の

おしやべり目白
紅買ひに來てる

暗い晩

廣瀬 益世(茨城)

暗い晩だよ

裏庭で

桐の葉はつさり

おちました

お馬はヒーンと

眼がさめた

寒い山風

來たのだろ

桐の葉はつさり

寒かろな

春の歌



あは雪ちらちら
ちらちらり

空ゆく雁

鳥本 夫二(名古屋)

釣になりなりゆく雁の

お首がのんびり

ようのびた

カリカリ啼いてゆく雁に

お里のたよりが

聞きたいな

のんびり首がようのびた

一本棹に

ならないか

五位鷺

古村 徹三 (大阪)

こんもり
茶臼の
山の空

黒く

いつばい

五位鷺な

みだれて

啼けば

日のくれよ

しぐれ

大池伊津郎 (名古屋)

銀の雨 金の雨

サンサラリ

あの山 この山

サンサラリ

しぐれりや峠に

馬の鈴

濡れてしやらりこ

サンサラリ

綿 蟲

塚田 清六 (北海道)

綿雪蟲

寂しいな

父さんゐないに冬が来る

綿雪蟲

おゝ寒い

五〇
達いお山にや雪が来た

綿雪蟲

呼んで来い

山から父さん呼んで来い

つぐみ

澄田 郁 (京都)

さらさらさみしい

みぞれあめ

つぐみのお宿は

やぶの中

さらさらみぞれに

笹が鳴りや

つぐみの子供よ

さみしかる

落葉

原 まさる (長崎)

カラ／＼

落葉

落葉の踊り子

冷たい

風に

吹かれて踊る

ちよん／＼

雀

とんで来てあそべ

お山の

中の

踊り子落葉

お留守番

山岡 静子 (岡山)

チリンと鳴つたは

お家のか

チリンと鳴つたは

お隣りか

母さまお土産は

なんでせう

お人形さんか

おてまりか

母さまおかへり

待つてたら

おつむは鈴の

音ばかり

冬の夜

河合英太郎 (東京)

風はないけど

寒い夜だ

枯木はだまつて

ねてゐるな

カチ／＼夜まはり

遠くだな

お湯屋の煙は

まつ白だ

お空のお星さん

けむたかる

日曜日

中村みちや (兵庫)

わたしのお手々の

とどかない

柱のカレンダー

赤い文字

朝日にぼかばか

あたつてる

お庭の茶山花

白い花

雨の上つた

日曜日

姉さま机で

ABC

坊や

千葉 仔朗 (東京)

土風に

坊や

があるだつてよ

あんよが

赤くて

可愛いとよ

三ヶ月

さまの

晩だとよ

生れた

のだよと

言つてゐたよ

親の指の血を飲む王子

((阿闍世王の物語))

川崎春二

岩岡と枝畫



一
今から恰度三千年ばかり昔の
と、印度の國に大そうえらい王様
がありました。近くの國々は言ふ
に及ばず、遠い國々までも打従へ
て、正しい政治を行ひましたか
ら、國中は大層よく治つてゐまし
た。

でも、この王様には王子も王女
もなかつたので、王様も皇后様も
大そう心配しました。——この印
度中で一番強い、一番立派な國の
行末が何うなつてしまふことか
——と家來達までが心を痛めてゐ
ました。

しかし、その心配はやがて大き
な喜びと變る日が來ました。それ

は、もう子供など生れさうにも思
はれなかつた皇后様が、まる／＼
と太つた可愛らしい赤ちゃん、し
かも王子を生まれたのです。
お城の人々をはじめ、國中の人
人までが何んなに喜んだか知れま
せんでした。

ところが、この喜びの間に一つ
氣が／＼なことが出來ました。——
お城の一人子として、微風さへ
もいとふやうに大事に育てられて
來た王子が、二つ三つになつて、
やう／＼覺束ない口を利く頃にな
ると、お父様の王様の右足の親指
の血が飲みたくて／＼たまらない
といふ、世にも不思議な病氣にか
かつたのです。

「これは不思議なことだ!」と、

王様は考へ込みましたが、どうし
てもこの不思議な病氣の原因が解
りません。

「——血を飲みたいといつて泣き
叫ぶ、あの聲を聞くと、私は身も
魂も消えてしまひさうでござり
ます……」と、皇后様も身をふる
はして衰しがりました。

「私の足指の血を飲めば治る病氣
なら、私は體中の血を飲ませて
やりたい。しかし、醫者達は——
よろしくない、決して血をやつて
はならぬ——といふ。——あゝ、
何うしたならよからう……」

王様はいろ／＼と心を悩ました
末、西の方の國から名高い占者を
招いて、王子の不思議な病氣を占
つて貰ふことにしました。

占者は熱心に、王子と王様と皇
后様の顔をじつと見つめてゐまし
たが、

「はあ、これは困つたことにな
りました。お話し申上げるのもお
氣の毒な次第で……」と、心から
氣の毒さうな様子をしました。

「いや、そんなに心配せんでもよ
い。正直にお前の心に映つたこと
を話して貰ひたい!」

と、王様は不安な心を押し静め
て、早く占者の言葉を聞かうとあ
せりました。

「お聞き下さい、王様。この王子
様はあなた様の足指の血を飲まな
ければお生命が保てませんし、ま
た、少しでも王様の血をお飲みに
なれば體は丈夫にはなりません」

これには皇后様や大臣達こうごうさま だいじんたちはもとより、さすがの王様わうさままでが、あまりのことに顔色かほいろを變へてしまひました。

しかし、大臣達はかういつて王様を諫めました。

『王様に申し上げます。そればかり
は思止つていたゞきます。私共
は、御親切なる王様を殺して國を

王様の足指の血を飲んだ王子の病氣は、すぐに快くなつたことは言ふまでもありませんでした。

が、大勢の家来達はそのまゝに
すませやうとはしませんでした。
『今の中に王子を亡き者にしなけ
ればならない。國のためだ。王様
のためだ……』と、ひそかに王子
を殺してしまふ方法を考へまし
た。

皇后様は、それをちらつと耳みみにすると、もうゐても起つてもゐら

奪ふやうな王子様が、どんなにえらい國王に
おなり遊ばさうと、そのやうな方の家來にな
つてゐることは出来ません。どうぞ、王子様
の御病氣は國のためをお考へ下されて、お諒
めをお願い申し上げます。」

五四

そんな風ですから、たとひ何んなえらい占者が何と言つたから

とて、まさか、阿闍世が父様を殺さうなどとは思はれず、王様も皇后様も家來達まで、しまひには占者の言つた豫言なぞ、すつか

り忘れたものゝやうに、それを言ひ出す者もありませんでした。やがて阿闍世王は大きくなりました。すると、王子は、お父様が間違つた政治を行つたと言つて、とうとう一室に押し込めてしまつたのです。

『ほら、はじまつた！ 何なんといふ
恐おそろしいことだ！ 占者うらなひしやが言いつた

通りになるであらう……」と、家
來達はふるへ上つてしまひまし
た。智慧も勇氣も勝れてゐる阿闍
世王子の行爲を、大臣達でも誰で
も止めることは出来なかつたので
す。

ある時、阿闍世王子は王様を押
込めて置く室の近くで、急に氣分
が悪くなつて倒れてしまつたこと
がありました。

それを見た大臣達は、この時だ
とばかり一つの計畧を考へ出し
て、王様のところへ駆けつけまし
た。

『王子様が、とうとうお父様を殺
さうとなさつて門のところまで参
りましたが、急に病氣が起つて倒
れてしまひました。はやく、今の

中に王子様を殺してしまふ方がよ
ろしいございます……』

大臣達がかういつて熱心にすゝ
めましたが、王様は、

『とてもないことを申すな！』

阿闍世は私の可愛い子だ。あの子
が私を殺さうとするのは、早く國
王の位に上りたいからだ。私は直
ぐに阿闍世に王位を譲らう。これ
からは、たとひどんなことがあら
うとも王子を殺さうなど、言出し
てはならぬ。私が阿闍世に殺され
ることは、あれが幼い時分からわ
かつてゐる約束ごとではないか。』

と言はれるばかりでした。
大臣達をはじめ家來達は、王様
の愛情の深いのにつくつく感心し
て、再び阿闍世王子を殺さうなど

とすゝめる者はなくなりました。

このことを聞いた時、さすがの
阿闍世王子も、お父様の愛情が身
にしみたと思へて、お父様を押込
めの室から元の宮殿に迎へまし
た。そして、しばらくの間は悪い
心も起さずに、孝行を盡しました
ので、皇后様をはじめ、家來達ま
で大そうな喜びでした。

三

やがて阿闍世王子は王様となり
ました。王様になつた阿闍世は、
自分が急病で倒れた時計畧を用ひ
て、自分を殺さうとした大臣達を
そのまゝにして置くことは、危険
な爆弾でも抱へてゐるやうに思は
れて、不安でたまひませんでした。

た。

そこで、一年ばかり経つてか
ら、不意に兵隊を差向けて、大臣
達を皆縛りあげ、死刑の宣告を與
へました。

お父様は大そう心配して、

『大臣達は私と一緒にこの國を盛
りたてゝ來た者で、國のためには
この私に優るとも劣らない功勞の
ある人達だ。決して大臣達を殺す
ことはなりません。』と厳しく反
對しました。

大臣達を憎む心で一杯になつて
ゐる阿闍世王は、お父様の反對な
どには一向に氣にもとめないで、
いよいよ大臣達を殺さうとしまし
た。

そこでお父様は、計畧をもつて

大臣達を隣りの國へ無事に遁がし
てしまひました。と同時に、お父
様は自分から心臓を突いて死んで
しまつたのでした。

その時、お父様は阿闍世王に書
き遺されました。

『私が大臣達を遁がしたと言へ
ば、お前はまた私を押込めるに違
ひなからう。もう年寄の私は、間
もなく押込めの中に死んでしまふ
であらう。すれば、世間の人々は
直接に手を下さなくとも、子供の
お前が殺したも同様だ。阿闍世王
は親殺しの大罪人だと惡口を言ふ
に相違なからう。私は、お前が人
民から惡く言はれることが心配だ
から自分の手で死んで行く。どう
ぞ、これからは家來達や人民を可

愛がつて、立派にこの國を治めて
貰ひたい。それからお前は、濃
いお茶をあまり飲み過ぎるやうだ
が、あれは體のためによろしくな
い。薄い茶を少しづつ飲んで、長
生きをして呉れるやうに……』

お父様は、今はの際まで阿闍世
王の身の上ばかりを、祈りつゞけ
て死んで行つたのでした。それこ
そ、ちよつとでも阿闍世王を恨む
とか、憎むとかいふ心などは持た
ずに――

阿闍世王は、お父様の死なれた
ことを氣の毒には思ひましたが、
まだ／＼その深い愛情の限りない
ことを本當に悟ることは出来ませ
んでした。



四

それから幾年か経ちました。阿闍世王の皇后が玉のやうな王子を生みました。阿闍世王は、前にお父様が自分のことを可愛がつたより以上に、それは、大事に育てました。

ある日の夕方、阿闍世王と王子を抱いた皇后様とは、御殿の庭のお池のまはり散歩してをりました。と、皇后様に抱かれてゐた王子が急に烈しく泣き出しました。「王子は何うしたのか——」と、阿闍世王は皇后様に尋ねました。「はい。王子は昨日から指が突然はれ出し、今日は膿をもつた様子でございます。それに私が、思は

す觸つたものですから……」

なる程、王子の人さし指が腫れあがつて白く膿をもつてゐます。見てゐてさへ、づきん／＼痛さうに思はれました。

阿闍世王は、王子の手を自分の両方の掌の中に包むやうにしてゐましたが、たまらなくなつて、「私が今、この膿をとつてやる。」と言つて、王子の指に唇をあてゝすつかり吸ひ取つてやりました。

膿がとれたので指の痛みがなくなつたものと見え、今まで火のついたやうに泣いてゐた王子は、びつたり泣聲をやめ、阿闍世王と皇后様の顔を見比べながら、にこにこ可愛らしい笑みを浮べてゐるの

でした。

「おゝ、すつかり機嫌が直りました。」

皇后様はさも／＼嬉しさに、その美しい瞳をかゞやかせました。

この有様を阿闍世王のお母様が、向ふの窓のところから見てをりました。急に哀しさに顔を覆うてしまひました。

「お母様、如何なさいました？」

悲しいことがございましたら、何なりとおつ仰つて下さい。私で出来ることでしたら、何事でもいたしますから……」

若い王は、かう言つてお母様を慰めました。

お父様を死なせた程の阿闍世王

でも、お母様には大そう優しくかつたのでした。

お母様は、涙を押へて語り出しました。

「そんなことではありません。阿闍世王がお前がまだあの——不思議な病氣にかゝらなかつた、丁度この子くらゐの時のこと、泣いて泣いて三日三晩といふもの泣き明したことがありました。矢張りこの子のやうに指が腫れて膿んだのでした。その時、お前のお父様は今お前がしたやうに、お前の痛む指を口にあてゝ膿を吸ひ取つてやつたので、やつと元氣になつたことがありました。その時、お前は三日三晩の寝不足のうめ合せのため、一日半も眼を覺さずにぐっす

語物家平

島ヶ界鬼



り眠り込んでしまひました。お父様はまた、それが心配になつて、幾度お前の寝顔を、のぞきに來られたかわかりません。今、お前達の様子を見て、その折のことを思出し、つひ涙が出てしまつたのです。」

じつと耳を傾けてゐた阿闍世王の顔は、忽ち蒼ざめてしまひ、がついりした雄々しい體がわななくとふるへ出して來ました。——かと思ふと、王はお母様の前にひざまづいて、

「お母様、どうぞお許し下さい。と言つても、もはや宥していたゞけない程、不幸に生れついた私です。私は何といふ親不孝者でせう！ あれほど私のことを思つて

ゐて下さつたお父様を、私はこの手にかけても同様にして殺してしまひました。私は今、はじめて眼が覺めたやうな氣がします。はじめて人の親の心、あの慈愛の深い有難いお父様のお心がわかりました……この恐ろしい罪は、もはや償ふことは出來ません。私は、これから先何うしていゝかわかりません」

と、嘆き哀みました。

五

その頃から阿闍世王は、急に生れ變つたやうな、やさしい慈悲深い王様になりました。

これまで、印度中で最も怖ろしい王様として、畏れはゞかられてゐた阿闍世王が、間もなく、情深い慕はしい王様として、人民から、親しみ尊ばれるやうになりました。

その頃、佛教をはじめて此の世の中にひろめたお釋迦様は、竹林精舎といふところで大勢のお弟子達に、尊い教を説いてをられました。

阿闍世王は、強國の王様としてではなく、名もない一人の僧侶のやうな風をして、お釋迦さまの教へを受けるために竹林精舎へ行つて、とう／＼お弟子の一人となられました。

(をばり)

(俊寛と有王の物語)

大木雄三

松政徳次郎畫

薩摩、鬼界ヶ島。

それは、はるばると都を離れた大海の波の上に、置き忘れられた品物のやうに浮いてゐる小島です。治承元年の六月、日増しに暑さを増す太陽は大きく輝き、岸を洗ふ波は吠えるやうに響きました。何か變つたことのありさうな年です。

この島に不思議な三人の男が現はれて、土民たちが目をみはつたのはさうした或日の事でした。三人の男は都から送られて來た重い罪人だつたのです。

都から來た舟は、罪人を島に残すと、その儘行つてしまひました。三人は島流しにされてしまつたのです。

『世が世ならばこんな醜い姿にはならなかつたであらう。』三人の心は同じでありました。

三人といふのは、俊寛僧都、丹波の少將成經、平判官康頼といふ、都にゐた頃は、それぞれ立派な地位にゐて、何一つ不自由のない身體の人たちばかりだつたのです。それが、この寂しい島に追はれたのは、深いわけがなければなりません。

その頃、朝廷では平清盛の勢が熾んで、飛ぶ鳥も落すといはれ、平家でなければ人でない、とまで噂されてゐたのでした。清盛は勢のあるにまかせ、いろいろ勝手な行ひをしてゐたのです。

朝廷に任へてゐる人たちのうちには、清盛を憎む者が多くなつてまゐりました。

『清盛をたはせ。』

『平家を追ひ拂へ。』

その人々はかう言ひ合せて、京都からほど近い鹿ヶ谷の法性寺に、平家征伐の相談を開いたのです。けれども、この相談はたちまち清盛の耳に入つてしまひました。清盛が怒つたのはいふまでもありません。

『不屈な奴原！ 斬り殺してしまへ。』

清盛は嚇として言つたのでした。その時、清盛の子の重盛は父を諫めて、なるべく罪を軽くするやうにすゝめ、極く僅かな者だけは殺されましたが、あ

とは大てい「島流し」で済ますことになりました。

立派な役人が「島流し」にされるのは、よくよくの罪に限られてゐたのです。

成經も康頼も、その時の仲間として、こんな重い罪にされたのでした。俊寛僧都も悪い相談に自分の寺を用ひたり、相談の仲間入りをしてゐたといふので、同じ罪をうけ、二人と一緒に流されることになつたのでありました。

都に住んでゐた三人にとつて、島の様子は何も彼も珍らしいことばかりでした。島の人は着物もろくろく着てをりません、食物も木の實や魚のやうなものばかりで。しかもむしやむしやと生で噛ちるのです。言葉もちがつてゐて、話さへ出來ないのでありました。

珍らしい、けれども何といふ寂しいことだつたでせう。三人は涙ぐむ目を見合せて、くる日くる日を、口數も少く送つてゐたのでありました。お互ひに京都のことや、そこに住んでゐる妻子の顔が目に見えるやうで、胸はいつばいでありました。

なかにも俊寛は、可愛い子供のことはかり考へて夜も眠れないくらゐ苦しみました。

『私は、何故あんな相談に仲間入りしたのだらう、あんなことさへしなれば……。』俊寛はかう後悔することもありました。しかしすぐに心が變つて、『やつぱり清盛がいけないのだ。悪い者を征伐しや

うとした私にすこしも悪いところは無いのだ。それをこんな怖ろしい島へ流すのはあまりひどい。憎い清盛奴。」
呟いて齒齧みをするのでした。

二

青い月光が海邊に金を躍らせ、紫色に輝いた波頭が寄せてくる、ある夜のことです。俊寛は岩の上に踞んで、沖を走つて行く夢のやうな一隻の帆船を眺めてをりました。ちつと見送つてをりました。

「おゝ、あの向ふには、なつかしい都があるのだから。」

俊寛は心の裡で呟きました。

後ろに、ひたひたと足音がします。振向いてみると、やつぱり眠れなかつた康頼が、さびしげな微笑を浮べて近寄つてきました。

「どうしたのです。心配になりましたから、来てみ

ました。」

康頼は親しげに言ひました。

「有り難う。」

俊寛は答へました。がまだ帆船から目を離しませんでした。

「私は考へてゐたところです。ごらんさい、あそこへ行く舟。あれはきつと本國へ行くに相違ありません。私は、私たちがあの舟に乗つてゐるのだつたら、と思ふのです。しかし駄目です。いつ歸れるかわかりません。私たちは、死ぬまでこの島に置かれるのではないでせうか。」

「いや、そんな風にばかり考へるのはいけないでせう。」

康頼は何か信するやうに言ひました。

「私は國へ歸る日が來ると思つてをります。確に歸れます。」

「駄目だ。」



投げるやうに俊寛は言葉をはさみました。

「大丈夫です。私は小さい時から、熊野の權現を信じてきました。權現の力は大きいです。人間に出來ないことをしてくれませう。私は熊野權現を祈つて、その効のある日を待つつもりです。あなたもお祈りして下さい。私達三人の爲です。」

「嫌だ。」

俊寛は紙を破るやうに言ひ放つたのです。

「そんなことは嫌です。もし神の力が正しいなら、



てゐるのを幸ひ、假りにそこを熊野權現と呼ぶことにしたのです。

潮の荒れる日、風の鳴る日、康頼と成経はそこへ来て、心から祈願をこめるのでした。祈りの聲は波に響き、山に木霊して、時には物凄く、また時には哀れに聞えたのでありました。

二人は疲れることも忘れ、餓ちいのも忘れ、胸には、たと都へ歸りたい一心が火よりも強く燃え盛つてゐたのです。二人には夜も晝もありません。一心不乱に祈るのが勤めでした。

ある曉方のことです。いつかうとうと眠つてゐた康頼が、ふと氣つくと、島に向つて來る一隻の舟がありました。舟からは美しく着飾つて、紅い袴をはいた女が二十三人も、ばらばらと紅葉を散らすやうに渚へ下りたかと思ふ間に、ぼんぼんと鼓を打ちはじめたのです。そして女たちは唄ひました。その歌は「熱心に祈願すれば、枯れた木にも實の生る時が

來る。」といふ意味です。唄がおしまひになると、たちまち康頼の目から大勢の女も舟も消えてしまひました。

「あつ。」

康頼は目をこすりました。夢だつたのです。

潮はいつものやうに鳴つてをりました。

しかし康頼は、この夢をどんなに喜んだかしれません。すぐ成経にも話しました。

「私たちの祈りが神に届いたのだ。そのうちには赦免の日が來るだらう。」

二人は手を取り合つて、まだいつとあてもつかない日のことを喜び合ふのでありました。

俊寛は冷い目で、二人の様子を見てをりました。

三

康頼には年老つたお母さんがありました。康頼はそのお母さんを思ふたびに、子供のやうに懐しい氣

がし、どうしてゐるだらうと心をいためました。

康頼は、自分が達者であることだけでもお母さんに知らせたいと思つて、たくさんのお塔婆を作り、それに次のやうな歌を書きました。

薩摩瀉沖の小島にわれありと親には

告げよ八重の鹽風

「これが私の心です。」

かう言つた康頼の頬には涙が傳つてをりました。

「わかります。よくわかります。お互ひに悲しい私たちです。」

そばにゐた成経が、かう言つて合點しました。流石に氣の強い俊寛も、おつと首を垂れてしまひました。誰の心も同じだつたのです。

この歌の意味は「こんな薩摩の國の沖の離れ島にゐる私は、お母さんのことがいつさう心配でならない、海の風よ、どうぞ、私の心をお母さんに知らしてくれ。」といふことです。



歌を書いた卒塔婆がたくさんできました。康頼はそれをどんだん海へ投げ込んだのです。

『どこかへ流れついたなら、それを見た人がお母さんに傳てくれるだらう。』康頼はさう思つたのです。打ち寄せた波は卒塔婆を沖へ沖へと運んで行きました。だんだん小さくなつて行くのが、三人の目には頼母しく見えました。

日数がたつて、康頼の流した卒塔婆の一本は、波にもまれ風に送られて、嚴島神社に近い濱邊へ流れ寄りました。その時ちやうど京都から來てゐた坊さんが、これを見て、大へん康頼を氣の毒に思ひ、清盛に告げたのでした。

清盛は暫く考へました。清盛の一言で、何もかも定めるのです。

『赦してやれ。』清盛はかう言つたのです。

七月の末清盛の家來丹左衛門尉基安は、京都を後にして、鬼界ヶ島へ向ふことになりました。それは

康頼を赦すといふ使ひのためだったのであります。そんなことを知らない鬼界ヶ島の人たちはどうしてゐたでせう？

俊寛は黙つてばかりをりました。康頼や成經ともあまり口さへきません。いつも物凄く白い眼を上げて空を眺めてゐたのです。

康頼と成經は、毎日怠らず、熊野權現へ祈願をかけてをりました。

山に鳴る風、潮の響き、それは去年と同じです。

たゞ島にも秋が迫つてゐることだけは朝夕の寒さで知れました。

九月二十日でした。基康ののつた舟は、鬼界ヶ島へ着きました。都から役人の珍らしい姿を見つけた島の人たちは、蟻のやうにぞろぞろ集つてまゐりました。

『都から來てゐる方を知らないか。』基康が島の人にかう訊ねてゐるやうすを見たのは俊寛です。

『あつ、六波羅から使ひの役人らしい、きつと赦しに來てくれたのだ。』

俊寛は躍り上つて喜びました。岩の上、それから小石の上を、痛さも忘れて基康の側へ馳けつづけた。

二人は顔を見合しました。

『私は俊寛です。あなたは私たちを都へ連れて行つて下さるのでせう。さうです、きつとさうです。』

俊寛は言ひました。そこらが急に明るくなつたやうな氣がしました。

『あゝ、歸れるのだ、待ちに待つてゐたその日が來たのだ。』

わくわくと胸が躍りました。けれども、そんなに喜んだ甲斐もなかつたのです。基康が持つて來た赦免狀には、康頼と成經の罪を赦すと書いてありましたが、俊寛を赦すとは書いてなかつたのです。みるみる俊寛の顔色は土の様に冷く變つてしまひました。

『これは何うしたのです、私の名が書いてありません。私だけが赦されないとはいふわけはない、私たちが三人は同じ罪で同じところに流されたものではありませんか？』俊寛は狂つたやうに叫びました。

そのとき祈願を終つた康頼と成經も、基康の方へ飛んで來てをりました。

『私たちは歸れる、赦されたのだ。』

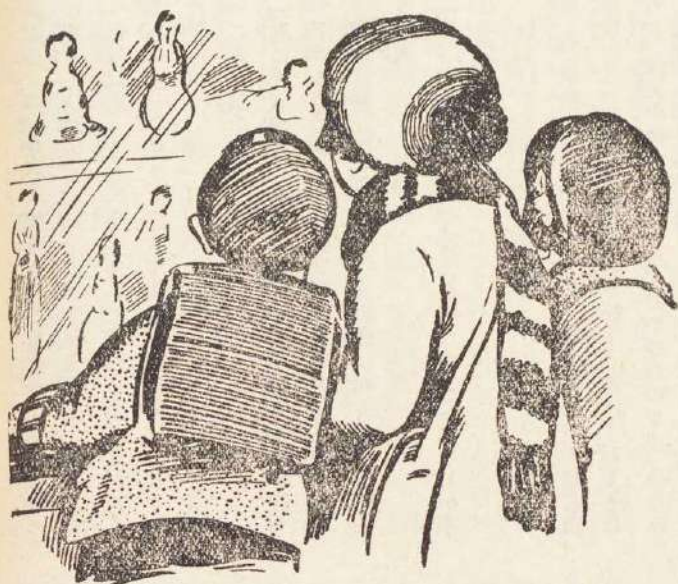
成經も康頼も涙聲で言ひました。嬉し涙です。

『見せて下さい、私だけが赦されない筈はありません。』

俊寛は、基康から赦免狀を見せて貰ひました。氣を落ちつけてよく眺めました。けれども、あゝ、いくらよく、十遍二十遍繰り返してみても自分の名は書いてないのでありました。

『あゝ。』

悲痛な唸きを洩らした俊寛は、両手で額を抑へたのです。聲も手も震へてゐました。(つづく)



博多のお人形さん

杜 仙之介

寺内萬治郎 畫

七〇

博多 博多の
お人形さんは
お母さん ないから
泣くんでせう

山に
山に

日ぐれりや 子供の
山うくひすも

お母さん お母さんて
啼くんでせう

もしく 人形屋の

お番頭さんよ

博多 博多の

お人形さんは

お母さん お母さんて

泣くんでせう

七一



おきつとたぬ吉

西川 喜平

寺内萬治郎畫



「おきつさん、く。」
 「おやッだれ。」と振り返つたのは、この頃この村へまぐれ込んで来た、おきつと云ふ、若い女狐、呼んだのは村に古く住む、たぬ吉と呼ばれる大狸でした。
 「おきつさん、己だと見て逃げなくともよからう。」
 「ナニ逃げやしないが、だしぬけに聲をかけられてビックリしたのですよ。」
 「アハ、ハ、ナルホド女の夜道は物騒だからな、丁度い、己がしよに行つてやらう……さつき新

田の田吾作とおなべが手を引き合つて歩いてゐた。己もなんだか羨ましくなつたから、お前の後を追つて来たのだ、チョイト田吾作の眞似をしやう。」
 「およしなさいよ、お月さまが見て笑つてゐらつしやるよ。」

「お月さまがお笑ひなさるつて、ナニもう直に雲の中でおやすみになつてしまふ。二人で田吾作とおなべに化やうしやあないか。」

「見つともない、馬鹿々々しい。」

「ナニ馬鹿々々しいことがあるものか、こんななりで歩いてゐると、往來の人に見つかつてひどい目に逢ふせ、サアく化やうく。」とたぬ吉は無理におきつの手を取つて、グルく二三廻廻ると、たぬ吉は、カスリの着物に、メリンスのヘコ帯をしめ、烏打帽子をかむり、メリヤスの白いシャツが、胸と手首に目立つ男になりました。

おきつもブルくと二三度、身を振はすと、忽ち

染ガスリの着物に、友禪メリンスの帯をしめ、毛糸のショールをかけた、若い娘になりました。

おきつのなりを見て、たぬ吉はニタく笑ひながら、

「出来たく、ほん物く、誰が見たつて田吾作におなべだ。」

「ナンダカ氣まりがわるいわね。」

「イヤその聲までおなべソツクリだ、うまいく。」
 とたぬ吉は喜びました。

「おきつさん、ではないおなべ。」

「ナニ。」

「どうした、フサイでゐるじやないか。」

「ア、今朝から、なんにも食べないので、お腹が空いてゐるの。」

「エッ今朝から食べないつてどうしたのだ。」

「ナニシロこの村では、お馴染がないから、何所をウロツイても、拾ひ食ひも出来やあしない。」とおき

つは涙聲になりました。

たぬ吉は、おきつの背を撫で、
「ム、可哀相に、それじやあお腹の空くのも尤だ、
己なぞは先祖代々、この村での古顔、何所へ行つて
も幅がきくのだ、お前もこれから己の家へくれば、
毎日ウマイ物の食ひ飽きで、一生不自由なしだ、ど
うだおきつさん。」

「嬉しいね、今夜からさうして貰ひませう。」

「ナニスグ来てくれる、有がたい。」とたぬ吉は
夢中になつて、お腹を、ボンボンと両手でたゝいて
踊りました。

「ダケドもうお腹が空いて、一と足も歩けなくなつ
てしまつたの。」

「困つたな、ここでそんなことを云はれちやあ、そ
んならおぶつてやらう。」

「それより食べ物を見つけて来て下さい。ア、ペコ
ペコになつてしまつた。」とおきつは道端にしやがみ

ました。

「仕方ないお前のためだ、食べ物をさがしてこや
う。」と見廻すと、此所は吞澤寺と云ふ、お寺の門前
でした。

「アル、さつき簀下で見かけたのは、おか持を
下げて、自轉車で行つた魚屋の小僧、持つて来た肴
はキツトこのお寺に違ひない、チョツクラ見てこや
う。」

「イクラお金持のお寺だつて、ごちさうを棄て、置
くものですか。」

「ナニサ庫裡の椽の下から忍び込んで、盗つて来て
やる、少しの間の辛抱だ、待つてゐておくれ。」とた
ぬ吉は、大きな門の脇のクマリ門から、中へ入つて
行きました。

おきつは門の扉よりかゝつて、

「たぬ吉なんて、アンナイヤ奴はありやあしない、
古狸を汚い鼻へかけて、己の家へこいなんて、ホン

ト馬鹿にしてゐる、ごちさうを食べたら逃げだし
てやらう。」と、獨り言を云つてゐると、クマリ門の
戸を開けてたぬ吉は頭をカキカ
キ、しほ／＼として出て來まし
た。

「大縮尻／＼、スツカリやりそ
くなつた。」

「大縮尻でもナンデも早く食べ
物を下さい。」

「面目ないが盗りそくなつた、
椽の下から忍び込んで見ると、
爺やは臺所で、何かムシャ／＼
食べながら、ドブヲクをやつて
ゐる、奥へ行くと、和尚さんは
お膳の上へごちさうをならべて
そばに徳利が二三本、猪口を片手にチビリ／＼と、
飲んでゐる、一とつ、おどかして盗つてやらうと、



一とつ目小僧に化て、和尚さん今晚はと出ると、和尚
さんは驚くかと思ひのほか、こつちをデロリと見て

小僧い、所へ來た、肩
でも揉めつと睨まれて
こいつばいけないと今
度は大入道になつて、
ヤイ和尚と云ふと、向
ふからあべこべにヤイ
入道、風呂へ水でも汲
み込めつ、と怒鳴りつ
けられて逃げ出して來
た、アンナ人間に出つ
くはした事はない。」と
たぬ吉はまた頭をかき
ました。

おきつは笑ひながら、

「お前さんは口先ばかりで弱虫ね、ソンナラわたし

が行つて来ますよ。」

「ドウシテ、己でさへ逃げてくるのに、お前なぞ手が出せるものか、第一お腹が空いて歩けないと云ふじやあないか。」

「イエー生懸命にやりますから、何所へも行かずに此所で待つてゐて下さいよ。」

「ナニ何所へも行くものか、お前の歸つてくるまでは、犬が来たつて一人では逃げないよ。安心して行つておいで、敷石がでこぼこしてゐるから氣をつけな。」

と、たぬ吉はおきつをクマリ門から入れてやりました。

「ウマクやつてくれ、ばい、な、ナニシロおきつをつれて家へ歸れば、今夜から賑かになる。これから毎晩己が腹鼓をたいておきつに踊らせてやらう。そうしたら、並木のむじ松や、川端のオン助が、さを羨ましがらうな、ウフ、、、、楽しみなこと



だ、しかしおきつはおそいなどうしたのだらう。」と門の中を覗きながら、

「さつき庫裡の戸が開いた音がしたやうだが、ヒッソリしてゐるな、何をしてゐるか氣がもめるなあ、まさか、一人でごちさうになつてゐるのでもなからう、それとも捕へられたのかな、ア、心配になつて来たぞ。」

と、門の中へ入らうと、クマリ戸を押して首を入れるとたん、だしぬけに頭をコツンと撲たれました。

不意にぶたれたたぬ吉は、目がクラ／＼として、石段からコロ／＼と轉げ落ちました。

そこへ門から出て来たのは、和尚さんと、寺男の二人で、手に／＼太い棒を持つてゐました。

「ヤイ何所の奴だ、今、村の娘が、泣きながら男に追つかけられたと騙け込んで来たが、この間から、女を追つかけていたづらをするのは、手前だらう、

太い奴だ、これからの見せしめだ。」

と、頭を押へて小さくなつてゐるたぬ吉を、ボンボンぶちました。

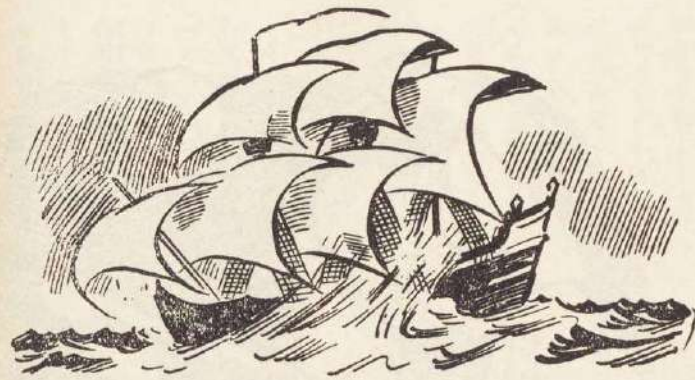
サスガのたぬ吉も、化けることも、どうすることも出来ず、とう／＼正體を現して逃げ出しました。

夜更けの村の野道を、ピッコを引き／＼、太い尻尾を引きつり、泣きながら歸つて行くのはたぬ吉でした。

その後姿を、稻むらの蔭からながめて、舌なめづりをしてゐたのはおきつでした。

「ウスノロのたぬ吉め、いゝ氣味だ、村の娘に化けたのを幸に、お寺へ助けて下さいと騙け込んで、和尚さんと爺やが飛び出した隙に、お皿ぐるみ奪つて来て、久しぶりでおいしいごちさうを食べた。これから川向ふの隣り村へ出かけやう、たぬ吉さんごきげんよろしう、——サヨナラ。」

(をばり)



(幕末物語)
海賊船か

犬田 卯
寺内萬治郎書

一
月山、湯殿山で名高い羽後の國の海岸を距ること十里ばかりのところに、飛鳥といふ小さい島があります。この島は、鳥海山が噴火した時出来たと云はれてゐるもので、周圍二里餘、人口は千五百ばかり、日本海の荒波の中に取り殘

された、本當に淋しい島であります。これから皆さんにお話しようといふのは、この小さい島に、今から六十年ばかり前、即ち明治維新當時に起つた、あまり人に知られない、皆さんのお學びになる歴史などには勿論載つてゐない珍談であります。

それは秋も末の、そろ／＼寒くなつたといふ或る日の夕方近くでした。島の少年恒太郎は妹のおよねと庄太と呼ぶ馬鹿と三人一緒に砂濱で遊んで居りました。天氣模様は急に變つて、今まで暖かつた日もかげり、黒い雲が島の上一面にひろがつて、俄かに雪がち／＼と落ちて來ました。その時でした。馬鹿の庄太は、ふと沖の方へ眼をやつてゐましたが、急に沈黙し、そして兄妹にその方を指差して見せました。「あれ／＼！ あれ！ 船！ 船！ 船！」と、叫びました。なるほど大きな船です。恒太郎もおよねも今までの喜びは何處へやら、その得體の知れない、これ

まで見たこともない、この島などには無い一艘の大きな船を見ると急にびつくりして棒立ちになつてしまひました。「兄さん、何んだらう？」「分らない！ 氣味が悪いな！」「早くお家へ歸りませう。」二人は青くなつて砂濱から一目散に家へ逃げ歸りました。「お父さん！ お母さん！ 沖へ何か來たよ！ 早く出て見ろよ！」かう二人は門口から叫んだのです。その叫び聲に應じて、家のものがみんな門口へ出て來ました。隣り近所のものも、早くもそれを聞きつけて、そこへ出て來ました。沖を見ると、ちら／＼と雪にけむつた波の上に、怪物のやうな大

きな船が浮んでゐて、だん／＼とそれがこちらへ近づき進んで來ます。三本マストの大きな船——島の人間は誰一人としてかうした大きな船を見たことがありません！一體何んの船だらう。得體の知れない人食鬼の乗つてゐる海賊船ではあるまいか。この小さい島へ泥棒に來たのではあるまいか？ 人間を取つて食ひに來たのではあるまいか？みんな恐れに震へてしまつて青くなり、もうこそ／＼逃げ支度をするものもありました。さうしてゐるうちにも、怪物の船は、だんだんと岸へ近づいて來て、早や人間の動く姿さへ見えて來ました。そのうちに吹さつたつて來た風の

音に交つて、何やら大きな聲で囀鳴りさへするのです。

「さあ大變。いよ／＼こゝへやつて來たのだ！」

島の人々はもゝ生きた心地もなく、誰からともなし家へ逃げ歸つて、びしやりと兩戸を閉ざし、一歩も外へ出ませんでした。そのうちにも、船から叫ぶ聲はますます大きく高くなつて、どうやら「小舟を出せ！」とどなつてゐるらしく思はれて來ました。然し誰一人應ずるものはありません。みんな神棚へ向つて無事平穩を祈つてゐる始末です。

二

怪物のやうな船はま／＼岸へ

近づきました。吹きつゝの風の爲になか／＼思ふやうに行かず、そのうちにどうしたはづみか、大きな岩に打當つて、あわやと思ふ間に胴腹が打ち抜け、がら／＼に碎けてしまひさうになりました。

すると勇敢な乗組員等は、吾勝ちと海へ飛込んで、十數人も岸へ泳ぎつき、それから島の小舟を漕いで行つて親船にゐる人達を救助しました。

この有様を見てゐたのは、かの薄馬鹿の庄太一人きりです。あと人間は、恐ろしさに家から一歩も出ないで、ぶる／＼打ふるへてゐたのです。

馬鹿なんでものは平常は仕様なもののだが、こんな時は怖いもの

知らずで、却つて役に立つのかも知れません。とにかく庄太は一人ぼかんとして船が難破し、多くの乗組員——しかも見馴れない洋服なんかを着た人達が、巧みに泳いで來て小舟を持つて行くのを眺めてゐました。

そのうちに船の人が二十三人上陸すると、もう薄暗くなつた濱に一人立つてゐる庄太を見つけて、二人三人寄つて來て、かう訊ねました。

「島の間人は何處へ行つてしまつたのか？」

庄太はえへ／＼笑ひ出しました。

「お前ら何んだ？　なんでこゝに來たんだ？」

庄太は船の人達に向つて不思議さうにちろ／＼顔を見ながら反對にかう訊ねたのです。

「うむ俺達か……俺は兵隊だ。今



すると庄太はまたえへ／＼笑つて、村の方へ駆けて行きました。馬鹿の庄太は村へ歸つて大きな聲で囀鳴つたのです。

夜、船がこはれたからお前の村へ泊りに來たんだ。早く村へ行つてさう云つて歩け！」

「兵隊が來た！　兵隊が泊りに來た！」

これを聞くと今まで青くなつて

ゐた村人もいくらか安心して戸を開けるものもありました。

「何、兵隊が來たと……庄太、ほんとに兵隊か！」

「あ、變ちきりんな着物きた兵隊だ！」

さう云つてゐるところへ、もう五六人の船の人が、村へやつて來ました。村人は尙も恐しがつて逃げようとしたが、そのうちに船の人が、決して鬼でも海賊でもないことが分つたので、みんな家から出て來て、話しをはじめました。

船の人達といふのは幕府の旗本の武士だつたのです。みんなで二百七十人ばかり上陸しました。そして暗くなつてから宿割をして、

みんな村の家へ五人六人といふ風に泊り込みました。

この二百幾人の隊長といふのは大澤龜之丞といふ色の白い若い武士で、當時十七歳で、その後見役が櫻井捨藏といふ年を老つた武士でありました。

この隊長は、島の少年恒太郎の家へ泊りました。恒太郎はそれまで何事があるのかと思つてびつくりしてしまひ、家の人達と隠れてゐたのでしたが、幕府の兵隊で、然もその隊長が自分の家へ泊ると聞いて、すつかり有頂天になつてしまひました。

恒太郎は風が止んで、尙ほ雪はいくらか降つてゐる中を、近所の子供達が集つてゐるところへ行つ

て、
『俺の家へは隊長さんが泊つたんだ。お前の家へは何が泊つた？』と聞いたほででした。

三

翌くる日、武士達は朝早くから海岸に集つて、難破した長崎丸といふ船からいろいろの武器、道具などを陸へ運んで來ました。――鐵砲、劍、彈丸、旗、その他洋食皿、横文字の本――島の少年はじめ大人達まで、驚きの眼を見張つた事はいふまでもありません。はじめは武士達の言葉がよく分らないので島の人間も武士達も閉口しましたが、三日と経ち五日とたつうちに、お互ひにそれも分る

やうになりました。
武士達は口ぐせのやうに云ひました。

『俺達は間もなく戦争をして死ぬんだ！』

戦争――しかしそんなものは島の人間は誰も知りません。
『戦争つてどんな事？ 小父さん』と島の子供達はよく訊ねました。そこである日、武士達は隊伍を整へて、廣い原でその眞似をして見せました。

恒太郎もおよねも、父親につれて見に行きました。廣い原の園りには、もう村のものがぎつしりつめかけてゐます。

そこへ洋服、白鉢巻の武士達が列を作り足を揃へて歩いて來まし

た。やがて原の一方に整列すると恒太郎の家へ泊つてゐる隊長がその前へ進み出て劍を引抜き、號令をかけました。恒太郎はその勇ましい姿に、思はず涙を流したほででした。

號令一下。陣太鼓がタラ、タラ、タラ、……と打ち出され、その拍子につれて、一列二列と隊伍を組んだ武士達が、足を揃へて歩み出す。まるで一本の柵でも動き出す様に、ちつとも亂れない！

これには感心といふよりはみんなびつくりしてしまつて、神様でも天降つたのではないかと思つたほででした。
やがて鐵砲を構へて打つ眞似をやりました。と、その筒先を見て

ゐた人々は、思はず叫んで逃げ出してしまつたのでした。が、別に彈丸は出なかつたので、安心はしたものの、もう訓練を見てゐるのが怖くなつたと云ひます。

三四時間かうして隊長の號令で訓練がありました。それから武士達は村へ歸つて、また各自の宿へ分れ／＼になりました。島の少年達は、その日の夕方から、濱邊で、もう訓練の眞似をはじめました。その時は恒太郎が隊長になつたといふまでもありません。

四

それから一ヶ月ばかり過ぎて、島にはもう雪が盛んにやつて來ました。ある日のこと、武士達は、

また隊伍を整へて、例の訓練をやつた原へ繰り出しました。
『さア、またやる！』といふので、少年達をはじめ、島のものほみな見物に出て行きました。

しかし今度は戦争の眞似ではありませんでした。組々に分れて雪の原に散らばり、そして號令がかると、手に／＼雪を握つて敵に向つて投げつけるのです！

雪合戦といふものだとして武士達はみんな、説明してくれました。

一方の組が大きな雪の塊りをぽんと遠く投げると一方の組のものも投げる。白い毬が兩方からばん／＼と出る。するとそれぞれを各自が旨く受け取つて別に崩しませず、また投げ返してやる。雪

を握つてゐる暇に、敵の雪玉を受け取つて投げ返すのである。その巧みなこと、これも人間業とは思へない位です。

島の子供達も大人達も、面白いものだとばかり、てんでに雪を握つて投げつけ、兩手を出して受けようとやつて見ましたが、これはまたどうしたとか、一つとして旨く受け取れません。みんな手先に當つて砕けたり、受け損じて顔へ當つてしまつたり、さうかと思ふと、つて、すつてんころりんところんだり、もう散々です。

そこを武士達は一つとしてはづさない、ほんと投げると、ほんと受けて、またほんと投げ返す。ぼん／＼ばん／＼……まるで器

械で、もやつてゐるやうだ。いや、全くこれにも驚いてしまつて、まるで天國から来た人達のやうにしか武士達が見えなかつたといふことです。

それから二三日後、武士達は退屈で仕方がないと云つて、小舟で島廻りをしました。朝から何艘も小舟へ十人位づゝ乗つてくり出したのです。

恒太郎少年とおよねは、若い隊長等と自分の家の小舟に乗つて一しよに出かけました。飛鳥には島の園りに十幾つの岩が突立つてゐて、なか／＼景色のいゝところが

魚を捕つて、お晝を食へました。見てゐると海鼠の腸を鹽で揉んでお酒の肴にするのです。恒太郎をはじめ、島のものは驚きました。曾てそんなものは食べられるものと思つたことさへないのです。しかし試みに貰つて食へて見ると非常に旨い。そこで島の人達もあとで食へたさうです。

その時のことでした。

「小父さん、鰯穴つて知つてるか？」かう恒太郎が訊ねました。「知らない。何んだね、それは、」
「ようし。ぢや一つ、俺が大きな鰯とつて見せてやる。」
恒太郎少年は小舟から海底をのぞいてゐましたが、やがて鰯で、一匹の大きな鰯を突いて引上げました。

「どうだ。小父さん！」

「うむ、なるほど！」と若い隊長は感心して見てゐました。そこで恒太郎少年が、

「小父さん、この鰯は號令かけたつて捕れないぜ。劍でだつて突けないぜ！」と自慢してゐます。若い隊長は「何が捕れないことあるもんか。」と云つて、鰯で探して見ましたが、第一、鰯の姿さへ見えません。

それもその筈、この島の海底の岩には鰯穴といふ穴があつて、冬になると鰯がそこへやつて来て隠れてゐるのです。それを知る間もない若い隊長ですから、この時ばかりは島の恒太郎少年に負かされました。



白帆の唄

小城庄一

寺内萬治郎畫



武士達は島に二ヶ月半ばかりもゐてから、迎への船が来て、それに乗つて島を立つて行きました。別れの時は、はじめて上陸した時とちがつて、泣きの涙で別れたといふことです。武士達はいろ／＼の土産——剣とか皿、瓶、鉢、洋書などをそれ／＼世話になつた家へ置いて行きました。恒太郎少年の家へは、若い武士が三幅對の掛物を置いて行きました。

さて島の人達はい／＼船が出て行く時、その影が見えなくなるまで見送りました。例の馬鹿の庄太は人前もかまはず、おい／＼泣きました。それから何年か過ぎましたが、あの武士達は果して何處へ行つたのか、何んのために二ヶ月以上も滞在したのか、一向分りませんでした。

五年たち十年経ち、明治が、大正となり、それでも島の人達には、あの人達が何者だか分りませんでした。たゞ當時のことや、家に泊つた武士の顔が、まだ忘れずに居るばかりです。かうして六十年の月日が過ぎて、當時子供だつた恒太郎君は白髪の老人になり、およねは、お婆さんになつてしまひました。

恒太郎老人は大正になつてから間もなく、生れて始めて海を渡つて北海道の札幌にあつた共進會へ島の人達と一しよに出かけて行きました。一しよに行つた老人達はみな武士達の來た頃を知つてゐる人達ばかりです。共進會の歸途この一行は函館の五稜廓へ見物に立ち寄りました。すると驚くではありませんか。六十年前あゝして島へ來た人達が、皆な木像になつて並んでゐるのです。即ちあの武士達は例の有名な榎本武揚の部下だつたのです。

老人達は思はずあつと叫びました。それからよく見ると、自分の家へ泊つた武士が一人々々よく分るのです。恒太郎老人のところへ泊つた若い隊長は、あの時そのまゝの美しい姿をして居りました。老人達はつく／＼眺めて、みなぼろ／＼と涙を流してしまつたと云ふことでした。

(をほり)

(前回の梗概は一三五頁にあります)

春之介の鋭い呼聲に大蔭齊はハツとして立止りました。併し相手が子供なので、

「何の用か。」

とせせら笑つてゐます。その顔つきが一層しやくに障つて、春之介はびり／＼と唇を慄はせ乍ら、「父上をおとしいれて酷い目に會はせたばかりか、只今の無禮な仕打ち、もう勘忍ならぬ。春之介も武士の子ぢや、見す／＼此儘過ごしはせぬぞ。」

と叫んで小刀の柄に手をかけました。

「おう面白い、俺を斬る氣か、斬れるものなら斬つて見ろ、小童のくせに生意氣な。」

大蔭は憎々しく言放つとずつと進寄ります。少年は怒りに燃え立つてスラリと小刀を放ち躍り掛らうとしました。併し何しろ未だ年端もゆかない子供のこと、まして相手は劍術の使手として藩中に知れ

てゐる大の男です。とても勝味はありません。

「い……い……いけません。春之介。」

母親、苦しい息をしぼつて止め様としました。峯枝も驚いてしつかと春之介を後ろから抱き止め、

「そんな事をしてはなりません。」ときつく叱りましたが、もう狂氣の様になつた春之介は、

「放して下さい、姉上、放して下さい。」と身もがきします。大蔭はいよ／＼嘲り笑ひ乍ら、

「さあどうだ子僧、相手になつてやらうか、その細首をねじきつてやらうか。」

「何を！」

たまり切れなくなつて、強く身體を一ゆりゆすると、峯枝はよろ／＼とよろけて手を放しました。それと同時に春之介は「えいっ！」と斬り込んでゆきました。が、ひらりと身をかはした大蔭はむんづと其手を掴んで、軽々と捻上げ、

「子供のやせ腕で我を殺さうなどとは馬鹿な奴、貴

様の様な海賊の子供はこれこの通り息の根をとめてやるから、母も姉も見物してゐろ。」

と少年の持つた刀を奪ひ取つて咽喉を貫かうとします。

「待つて下さい／＼、お願です。」

峯枝は髪ふり亂して其腕に縋りつきました。大蔭はうるさうにそれを蹴放して、

「邪魔するな。」と言ひつつ、ぶすりと春之介の咽喉に刀を立て様とした、その一せつな、何處からか一本の手裏剣が、びゆつと風をきつて飛んで来ると、

大蔭の手にぐざと刺さりました。

「アッ！」思はず刀を取落した大蔭の手からは、血潮が真紅に噴き出てゐます。

「何奴ぢや卑怯者。」大蔭は四邊を見廻して嗷鳴りますと、松の木の後ろでカラ／＼と笑ふ聲が聞えて、ぬつと一人の男が出て来ました。それは紛れもない、昨日宿屋で金を盗んで姿を消したあの町人なので、

母子は二度びつくりしました。

「卑怯とは誰に言ふ言葉ぢや。病に苦しむ哀れな女子供を捕へていじめつけるお前の方が餘程卑怯ではないか。」

町人は落ついて言ひました。

「うぬつ！貴様は何者ぢや。」

やりこめられて、大蔭は口惜し氣にどなりました。左手はしかと痺ついた右腕を押へて、ざり／＼と齒をかねてゐます。

「わしか、わしは臆る惣兵衛といふ旅の者ぢや。」さう言つてジロリと鋭い眼で大蔭の面を睨んだ男は、更に言葉を強めて、

「わしは人の物を盗むことはするが、弱い者をいじめめるのは嫌ぢや。お前は見れば立派な士の様子をしてゐるが、情も知らず、涙もない奴。元來なれば命を取つてもいい惜い奴だけれど、今日だけは助けをやる。さつさと此處を立去れ。それがいやなら、

もう一本これをお前の首に刺してやつてもいい」
とぐつと差出した右手には、手裏剣がきらきらと日に輝いてゐました。大蔭はすっかり氣をのまれてもじ／＼と後退りしましたが、敵はな
いと思つたか、
バツと身をひ
るがへして一

散に逃去つて
しまひまし
た。



二

臆る惣兵衛はその後姿を見送つて笑ひ乍ら三人のそばに近づいて來ました。そして

「大變御苦しみの様子だが、何處が悪いのです。」

と親切に尋ねました。併し三人共黙つてゐます。

今命を助けて貰つたのは有難いけれ共、昨夜の事を想出すと、氣味悪いやら怨めしいやらで、此男に口

がきけないのです。その様子を見てとつた惣兵衛は、

「見れば何にか仔細あり氣なあなた達の御様子、私も昨夜はつい出來心であなた達のを盗みました

が、御返し致しますから安心して下さい。」
と懷から胴巻を取り出し、腰に差した刀も取つて

三人の前に差出しました。

「今もお聞きの通り、私はこの道すじかけて澤山のこぶんを持つてゐる泥棒ですが、弱い者、哀れな者は決していじめないつもりです。私は強い者をいじ

めて弱い者を助けるのが好きですから。」

「ついてはこうして行き會ふのも何かの御縁、あなた達の身上を話して聞かして下さい。出來ることなら力になつて上げませう。」惣兵衛の言葉には胸に

せまつて來る眞實のひびきがありました。

「有難う御座ゐます。漸く痛みもうすらぎかけて來た母親は砂の上に手をついて、

「それではあなたの御親切にあまへて一通りお話し致しますから聞いて下さい。」

とくはしく事情を話し出しました。その話を聞いてゐる中に何故か惣兵衛の顔色が違つて來ました。

「そのあなた達のお父さんといふ人を私は知つてゐます。」

聞き終つた時に惣兵衛は叫ぶ様に言ひました。

「ええッ、それではあなたは知つてゐられるのですか、どうぞ教へて下さい。今何處にゐますか、早く教へて下さい。」

聞き終つた時に惣兵衛は叫ぶ様に言ひました。

「ええッ、それではあなたは知つてゐられるのですか、どうぞ教へて下さい。今何處にゐますか、早く教へて下さい。」

聞き終つた時に惣兵衛は叫ぶ様に言ひました。

「ええッ、それではあなたは知つてゐられるのですか、どうぞ教へて下さい。今何處にゐますか、早く教へて下さい。」

聞き終つた時に惣兵衛は叫ぶ様に言ひました。

「ええッ、それではあなたは知つてゐられるのですか、どうぞ教へて下さい。今何處にゐますか、早く教へて下さい。」

聞き終つた時に惣兵衛は叫ぶ様に言ひました。

三人は躍り立つて喜び乍らせき立てましたが、惣兵衛は静かに頭を振つて、

「それは判りませぬ。私も備前沖の船の中で一度會つたきりですから。あなた達のお父さんは今船乗りになつてゐらつしやいます。今日は東、明日は西と所定めず海の上を漂つて暮してゐらつしやいます。だから何處にゐられるといふ事はなか／＼分らないのです。併し大阪の港を探してゐたら、きつと何時かは會へるでせう。」

三人は又がつかりしましたが、大阪の港にゆけば會へるかも知れぬといふ言葉にいくらか心は勇んで來ました。その時サク／＼と砂を踏んで近づいてゐる人の足音が聞えました。

「あ、いけない、人が来る。顔を見られては都合が悪い。私はこれでお別れします。又會ひませう。達者で旅して下さい。若しあなた達のお父様に會つたらとくと私からお話して早く會へる様に力添へして

あげませう。では左様なら。」

惣兵衛は、そして又懷から財布を取り出してバラ／＼と金を投げ出し、そそくさと

「これは私の心づくしです。」

と言ふと其儘身をひるがへして、松の並木を縫ふて飛ぶ様に姿を消して了ひました。思ひ掛けない人間から思掛ない親切を受けて、三人はお禮を言ふひまもなく、ただ後姿をふし拜むだけでした。

三

臆る惣兵衛に救つて、三人が大阪の港についたのはそれから間もなくでありました。

毎日曇つた日和が打續きました。どんよりと暗い空が海の上に垂れ下つて、浪の上をかすめ飛ぶ鷗の啼聲が、はげしい出船入船のさわぎの中にまじつて聞えました。

賑やかな人ごみの中を春之介少年と、峯枝とは病

み疲れた母親をいたはりつつ、あちらこちらとさまよひ歩くのでした。けれ共父親はおろか、それに似

た人すら探しあてる事は出来ませんでした。その中に母の病は次第に募つて來て、或る日の暮方、到々宿で息を引取つて了ひました。峯枝と春之介は母の死體に取りすがつて泣きました。

宿の人々もよるべない二人の孤兒を憐れんで、近所の坊さんと呼んで、お葬ひなどすまして呉れま

した。「ねえ春之介、お母さんに死なれて、たつた二人きりになつてしまつたのですから、もうどんなに深し

てもお父さんに會へる望みはありません。どうしませう。」お葬ひが済んで、お寺から歸る途で、峯枝は力なく春之介の肩に手をかけて言ひました。春之介は黙つてゐました。胸は只はてしない淋しさと悲しさで一杯で、ものを言へば泣けさうだつたからです。

「村へ歸つて二人で仲よく暮しませうね。」

峯枝は暫くして又言ひました。

「え、春之介はうなづきました。そして涙をかみしめて、眼をあげると、暮れてゆく海面に、雲間をもれるうすら寒い陽かげが淡い金色を流して、風をはらんだ白帆が静かに走つてゐました。

二人はしつかと手を握りしめつつ、海岸に佇んでゐるのでした。

突然後ろに人の足音がして、大きな舟乗男が三人近づいて來ました。何かひそ／＼と囁くと、いきなり走り寄つて、峯枝を抱き上げ、一散に走り去らうとします。

「アレー誰か來て。」峯枝は驚いて叫びました。春之介もびつくりして、

「何を。」と、云ひつつ武者振りつきましたが、相手は三人、こちらは一人、散々になぐりつけられたので、無中で刀を引抜き斬りかかると、

『生意氣な小僧奴。』と舟乗り達は砂を掴んでは投げ
 投げ、少年のひるむ間に逃げてゆきます。
 此惡者共は、うはべは正直な舟乗りに見せかけて
 るますが、實はこのあたりで種々の惡事を働く人攫
 ひなのです。泣き叫ぶ竿枝を小舟の中に投げこむと、
 さつさと沖を目掛けて櫓を漕ぎ始めました。
 おのれ逃がすものかと、少年も
 直ぐ傍らの小舟に飛乗つて後を
 追ひました。何事が起つたか
 と澤山の人が海岸に集つて
 來ましたが、何しろ暮
 方で小舟も澤山あ
 ちらこちらに出
 てゐるし、
 其中を惡
 者共



の舟は矢の様に走りぬけてゆくので、何が何やら分
 らず、助ける人も居ません。
 とうとう舟を見失つてしまつた少年は、舟の上に
 ばつたり倒れてしまひました。何といふ不運な事
 せう。父を探しに出たばかりに、母と別れ、姉を
 失ひ、本當の一人ばつちにならなければならぬと
 は泣かうとしても、涙は出ず、叫ばうとしても聲は
 出ません。
 怨めしげに天を見つめたまゝ、少年は冷たい舟底
 に身を横たへて何時までも動かうとはしませんでした。
 日はとつぷりと暮れました。暗い夜が港を包みま
 した。そして幾時かが経つた後、ふと身を起して見
 ると、舟は波にゆられて港の外に遠く流れてゐます。
 空を見ると、真闇で、星影一つ見えません。天も海
 も恐ろしい程静まり返つてゐます。
 と間もなく、ふうつと生温い風が頬を掠めまし



た。
 『しまつた、嵐だ。』
 少年は思はず叫びました。海邊で育つた春之介は、
 海のことには精しく知つてゐたので、斯うした静かな
 闇の夜に、時節外れの温な風が吹く時には、きま
 つて、恐ろしい暴風が來るといふ事を感づいたので
 す。

果して先づ空にびゆーつといふ物凄じ響きが聞え
 ると、それと一緒に、わうつといふ海鳴りが遠くか
 らつたはつて來ました。
 大空を吼ゆる風と、海原を鳴りわたる海鳴りと、
 闇の中にこだまし合つて、やがてそれは一つの音に
 なり、波は小山の様に高くなつて、小舟は木葉の様
 に揺れ始めました。
 少年は力一杯に、港に向つて舟を漕ぎ戻さうとし
 ますけれ共、もう駄目です。
 『お母様、姉様——』
 と、叫ぶ聲は風に散らされて、舟は波のままに方
 向も定めず漂ひ流れます。そしてやがて少年は氣を
 失つてしまひました。
 この、哀れな少年の身は何うなつてゆくことでせ
 う。



童謡

野口雨情選

(子供篇)

やぶ(賞)

熊本 宮本のり美 (尋四)

小すゝめ

すゝめ

おねんねか

笹枯れ

小やぶは

暮れちやつた

あられ(賞)

福井 武

(秀雄 尋四)

こんこんこん

やねたたく

だれだる庭に

出て見たら

あられこんこん

屋根をうつ

もみちの葉(賞)

東京 上田ふく子 (尋三)

おててひろげて

とんできて遊ぶ

もみちのはつばが

かはいいな

かせに吹かれて

お山の上でも光つてる

お屋根の上でも光つてる

大星小星のお星様

つるし柿

千葉 高橋 龍子 (尋三)

二階につるされた

柿さん

いたからう

早くあま柿になつて

とつてもらひな

夕方

千葉 加藤 伊子 (尋五)

しづかな夕方だ

棒をつんだ車が

前の道を

夕焼

東京 木藤 安子 (尋六)

お日様西へ沈むころ

お空は夕焼真赤赤

夕焼見れば子供等は

歌を歌つて歸ります

どんぐり

埼玉 岡田 シン (尋三)

どんぐり

山の中

どんぐり山の

どんぐりは

おちても

山の中

いつでもお山で

さびしかる

杉の木

千葉 川上仁三郎 (尋五)

山にきりのこされた

一本の木

なにか一人で考へる

杉の木

しやぼん玉

東京 磯貝金之助 (尋六)

ふわり

しやぼん玉

どこできえたか

しらないが

ふわり

飛んでつた

皆さんあばよと

もみちの葉

飛んでつた
野山をこえて



元日に鳴く金の鶏



成川 冬至

岩岡とも枝 畫

九八

時は平治の頃で、丁度京の都では兵火の中に矢叫の聲を上げて、親子兄弟さへ敵味方となつて争つてゐたと云ふ聞くさへあさましい世でありましたが、其の頃阿波の平和な片田舎に起つた事です。其年をもしまつて、南國には珍らしい寒い大晦日の日でした、暮れるに早い冬の日は、西の山に没して、夕暗の空には二つ三つ星がまたゝいてゐます。

何處から來たともなく、一人の六部は淋しい野道を桑野村の方へ急いでゐました。村に着いた頃、日はとつぷりと暮れて、家々にはちらほらと灯がついてゐました。家々と言つても、四五軒しかないごく寂しい村のことですから、大晦日の今夜も別に賑かでもありません。こんな田舎のことなので、宿屋とてむろんあらう筈がありません。行き暮れた六部は立止つて暫く何か考へてでも居るやうでしたが、思ひ切つたやうに、つか／＼と杉の生垣のある家の門

邊に立つて、

「御免下さい。卒爾ながらお頼み申す。」

と聲をかけました。

すると内より「はい、どなた」と年越の用意でもしてゐたらしい婦人が立出でて、見慣れぬ六部の姿を不思議そうに見ながら、

「どう云ふ御用で御座いますか。」と尋ねました。

「それがしは旅の者で御座るが、行き暮れて泊る所としてはなく、ほと／＼難儀致すもの、何卒一夜の宿をお恵み下さるまいか。」

婦人は自分一人では計りかねると云ふやうにためらつてゐますと、やがて此の家の主人と思はれる人の聲で、

「何れのお方は知りませぬがそれは定めしお困りのこと、何のもてなしも出来ませんがお泊め申しては？」と、婦人に言ふやうに、また六部に聞へるやうに言ひました。

「主人もあのやうに申します。ほんの夜露をしのぐだけの事と思つてお泊り下さいますなら、一向差し支へ御座いせんから、お通り下さいませ。」と婦人も言葉を添へて内へ入りました。六部も嬉しそうに冠つてゐた笠を取つて婦人の後に續きました。

行燈の明りで見ると、氣品卑しからぬ六部で、初體面の挨拶から、立居振舞、言葉付きまで、田舎では見られない上品な、何れは世を忍ぶ名家の人とも思はれるやうな應揚な所があります。

やがて三人は夕餉の膳に向ひました。

「私達は見るゝ通り二人暮しの淋しい住居ですが、珍らしく客人が見へられたので、夕餉の膳も賑か何より嬉しく思ひます。」などと言つて、主人は心から六部をもてなすのでした。

六部は旅で出合つた色々の珍しい話や面白い話をして聞かせたり、今京の都で起つてゐる戦争の話な

どして夜の更けるのも知りませんでした。しかし六部自身の身の上については、

『私は京の者で、いさゝか官位もありますが、故あつて世を忍び諸國を廻るものです。』

と云ふだけで、他の事は一口も話しません。たまに話か自分の身の上に及ぶと、何故か話をそらして、淋しく笑ふばかりでした。

四方山の話は何時盡きるともなくありましたが、夜も大分更けたので、

『今年も平和に暮れました。又目出度いお正月を迎へませう。六部殿もお疲れでせうから、ごゆつくりお休みなさい。』

『お休みなさいませ。』

主人夫婦は次の部屋へ入りました。田舎の大晦日は全く静です。

その翌日、正月元日の明け方のことでした。此の



附近では雞を飼つて居る家などは一軒もないのに、不思議なことには、

『コケコツコー』

と、三度、四度と繰り返されるのです。しかも其の鳴き聲は、六部の部屋から聞えて来るやうです。

夫婦は目を覺して、互に顔を見合はせながら、尙も耳を傾けました。

朝になつて『お目出度う御座います。』『お目出度う御座います。』の挨拶も終つてから、其の家も何日になく賑かに三人で雞着などの祝をして、今年は何となく何時もよりよい年を迎へる様でした。主人夫婦は早朝の雞の鳴き聲が何うしても不思議に思はれましたので、

『六部殿、早朝の事です。があなたは雞の聲をお聞きになりましたか。此の附近では雞を飼つて居る家は一軒もないはずですが。』

と如何にも不審らしく六部の顔を見上げました。

すると、六部は笑ひながら、

『かうして此の家で年を迎へるのも、何かの因縁ですからお話し申しあげますが、實は誰にも見せた事の無い、私の家に代々傳はる寶物をお目にかかせよう。』

と言つて包の中から一寸八分ばかりの小さい桐の箱を二つ取り出しました。蓋を開けると、一つの方には目もくらむばかりに輝いてゐる立派な金の雞が入れてありました。

『今朝程お聞きになつたのはこれなんです。』

と、六部は金の雞を指しながら、

『この金の雞は正月元日に限つて時を告げます。』と言ひました。

又、もう一つの箱の方には小さく疊んだきれが入れてあります。不思議に思つて見てみると、其の小さく折り疊んだきれを取り出して擴げるのでした。不思議／＼それは次第に擴げられ、八疊の部屋一ぱ

いに廣がる蚊帳なんです。

「これも家に傳はる寶物です。まだ色々な寶物があ
りました。が、戦のため、京の家は焼きはらはれ、此
の二品がやつと手に残つただけで、今では仕むに家
さへ無くなりました。考へて見ると、全く惜しい事
をしました。」

と當時の恐しかつたありさまを思出したやうに、
淋しく微笑み乍ら、又ちやんと其の蚊帳を折り疊ん
で元の箱に入れました。八疊の部屋一ぱいに廣がつ
た蚊帳とはとても思はれない程小さくなつて、とう
とう一寸八分の桐の箱の中に入つたのですから、夫
婦の驚いたのは言ふまでもありません。

暫くして六部は、厚く禮を言つて立去りましたが、
夫婦はまるで夢でも見たやうに、六部の後姿を見
送りました。

桑野川の流れば、今年の平和を占するかのやうに
清い水をたゝえて靜かに流れてゐます。その流れに

差し上げますが、こればかりは千金萬金にも代へ難
い家寶の事故……」

と、後は聲さへ出ません。

「それはよく承知してゐますが、そこを何とか。」
「それはあまりに御無理と言ふもの……」

暫く沈黙が続きましたが、魔がさしたとでも言ふ
のでせうか、主人の眼は血走つてきました。

「それでは是非に及ばぬ腕にかけても！」と言ひな
がら山刀を抜いて、六部めがけて切つてかゝりまし
た。

「それはあまりの亂暴！」と六部は持つた杖でから
くも受け止めたが、かうなつては善惡の見さか
いはつきません。互に一生懸命です。しかし相手は
刀を持つてゐるので、六部は次第に追ひつめられま
した。一方は淵、一方は崖で、六部は全く進退谷ま
つてしまひました。

六部は刀を防ぎかねてとう／＼淵へ飛び込みまし

添つて、六部は人通りもない道を只一人川上の方へ
と上つて行きますと、後の方から「オーイ。」と呼ぶ
やうな氣がしますから、はてなと思つてふり返つて
見ますと、先程別れて來た主人が、急ぎ足に追つか
けて來るのです。

六部は何か忘れ物でもしたのかと思つて、主人の
近づくのを待つて、

「何か忘れ物でもありましたか。」と、聞きますと、
「いやお忘れ物では御座いせんが、實は最前拜見
したお寶物、どう考へても欲しくて仕方がありませ
ん。一つなりとも、お譲すり下さる事は出来ません
か。」

と如何にも欲しそに言ひました。一夜なりとも
快く泊めてもらつた恩を思へば、無下にことは
事も出来ず、さりとて品が品ですから譲る事は尙更
出来ず、六部はもち／＼してゐましたが、やがて、
「折角のお頼みですから、他の物なれば何なりとも

た。相手も續いて飛び込みました。淵の中で尙も切
りつ防ぎつ、追ひつ追はれつ争つて居ましたが、六
部は肩先深く切り付けられ、あつと言ふ間もなく水
の中へ打倒れてしまひました。

主人がはつと我に返つた時は、血に染つた刀をた
ずさへて居る自分に氣が付きましたが、今はせん方
もありません。そして六部の持つてゐた二つの寶も
争つてゐるうちに取落して流されてしまつたのか、
或は沈んだのか、見えなくなつてゐました。

今まで澄みきつて居た桑野川の淵も、二人の争
の爲に全く濁つてしまひました。

大正の今も尙濁つてゐます。で、誰れ言ふともな
く、この淵を濁が淵と云ふやうになりました。そし
て六部に切り付けた主人は、名も知れぬ六部の菩提
を厚く弔ひましたが、其家ではお正月にお餅を搗く
と、何處かで雞が悲しそに鳴くので、お正月が來
てもお餅を搗かなかつたそうです。(をばり)



山本
二枝
郎

(前回の梗概は一三四頁にあります)

一、不思議の森

不思議な人、影は次第に近づいて来た。その足音がふと連麻の耳に入つた時、連麻は思はず振り向いて見ました。

見ると、はつきりは見えませんが、よろ／＼とした足取りの人影が、此方へ差して歩いて来る様子です。連麻は、薄気味悪く思つたので、つと傍の木影に身を寄せました。

不思議な人の近寄るのを、物影からさかしめると、大體に年をとつた、半白髪、腰の曲つたおばあさんでした。瘦せこけた、等くれた片手には、杖を持ち、背中には大きな、重さうな籠か背負つてゐました。

おばあさんは、息切れがするの、時々道端へ立ち止まつては、溜め息をほつとついて又とぼ／＼と歩き出すのでした。

連麻は、心の中で、

「なんだ、よぼ／＼のおばあさんぢやない

か、何が悪いんだ。」と自分で自分を叱りながら、

「おばあさんは、荷物が餘り重いので、疲れてしまつたんだな。よし、それなら僕が持つて上げよう。」と木影を飛び出しました。そしてつか／＼とおばあさんの方へ近寄りましたが、おばあさんは、何だか氣味の悪い顔付きをして眼をギョ／＼させながら、あたりをにらむ様子で眼付きで見送してゐるのです。その様子

が、あんまり恐ろしかつたので、折角の連麻の親切も鈍つて、思はず又木影へ引つ込んでしまひました。

おばあさんは、よろ／＼と連麻の前を通り過ぎて、だん／＼遠くへ立ち去つてしまひましたが、おばあさんの姿が見えなくなると、連麻は、又何だか濟まなくなつて来ました。

「なんだ、僕はビルマの王子ではないか。あんな、ヨボ／＼のおばあさんを怖がるなんてこれは何うかしてゐるぞ。おばあさんを助けて、荷物を持つて上げることが親切なことなんだ。善いことをするのを怖がるなんてことがあるものか。」

さう考へると、連麻は急に尻づかしなつて来たので、一度往來へ飛び出して一目散に、おばあさんの後を追つて駆けました。

ところが、不思議なことには、幾ら駆けても、駆けても、おばあさんの姿は一向見えませんでした。

「はて、不思議だな、あんなヨボ／＼した歩き方で、こんなに遠くへ行つてしまふ筈はない

い。」と、連麻は、なほも一生懸命に駆け出しましたが、何うしたことか、一向、おばあさんは見當りませんでした。まるで、おばあさんは、かき消すやうに、姿を消してしまつたのです。連麻は不思議でたまらず、あたりを探し廻るやうにして、なほも駆けて行きますと、やがて、大きな木が兩側に立ち並んで、眞暗に往來を狭めてゐる、氣味の悪い森の中へ入りました。それはこの森では、「不思議の森」と呼ばれてゐて、その森のすつと奥の方には、魔法使いが住んでゐるとさへ云はれてゐたのでした。

知らず／＼のうちに、淋しい「不思議の森」の中まで来てしまつた連麻は、何處までもおばあさんの後を追ふ決心はしたものの、さすがに無氣味な氣がして来ました。それで、

「これは飛んだ遠方まで来てしまつた。此處らでもう引きかへさう。」と、もと来た道に戻らうとしてふと氣がつくと、道端に何かしら、大きなものが置いてありませう。

「おや、何だらう？」と寄つて見ると、それは、先刻のおばあさんが背負つてゐた、大きな籠でした。

「おや／＼、おばあさんの籠が、こんな處にあるのは變だぞ。お婆さんは、何うかしたのかしら。」

連麻は、その籠を持ち上げやうとしますとこれは又意外にも、その籠の重いこと／＼とても大人の手でも動さうもない程でした。

「ずぶん重い籠だな。待て／＼、籠の中には何が入つてゐるのか、一つしらべてやらう」と連麻は、蓋を開けて見ましたが、恰度月の光の影になつて、中は眞暗で、少しも見えませんでした。そこで、こわ／＼乍ら、そうツと手を差し入れて見ますと、何だか、固い、冷たい丸いものが、ヒヤリ、と手の先に觸れました。よく／＼探ぐつて見ますと、それは大きな鐵の丸だったのでした。

「鐵の丸だ。道理で重いと思つた。併し、あんな、ヨボ／＼したおばあさんが、何うしてこんな重い鐵の丸を、しかもこんなに深山に

持つて来られたんだらう。それもさうだが、おばあさんは一體何處へ行つたんだらう。」と不思議に思つてゐますと、背後の森の中で、ポキッと樹の枝が折れる音がしました。つづいて、がさ／＼と云ふきづれの音がつゞきました。きつと何者か、往來の方へ向つて、樹をかき分けて近寄つて来たのでせう。

「誰か来るな。見付けられては悪い。」

と思つたもので、森の中へ、さうして、手頃の枝の上へ、乗つて、しつかり頭の上の枝につかまり、息をこらして、何者が近寄つて来るのかと、眼を見張つて見てゐました。

すると、森の中から、がさ／＼と出て来たのは、先刻の、腰の曲つたおばあさんでしたが、其の他に、今度はもう一人、おばあさんの腰のあたり位までしかない、小さい小人がついてゐました。

「おや、妙な奴が来たぞ。」と見てゐますと、鹿の側まで来たおばあさん

んは、小人に鳥渡合圖をしました。すると、小人は、あの重い鹿を、まるで鳥の羽毛でも入つてゐるやうに、軽々と持ち上げると、おばあさんの後ろについて、又、がさ／＼と音をさせながら、森の中へ引き返して行きました。樹の上の連麻は、この不思議な様子を見てびつくりしました。

「まあ、なんて恐ろしい力の小人だらう。森の中には、きつと何か、もつと面白

いことがあるに違ひない。後をつけて行つて、一體何をするのか、様子を見届けてやらう。」

連麻は、スル／＼と樹をすべり下りて、恐び足に、「不思議の森の奥の中へ、おばあさんと小人の跡を追跡して入つて行きました。

二、森の二つ家

そんなことは知らない、おばあさんと小人は、すん／＼と森の奥へ進んで行つて、一軒の家へ入りかけました。その家と云ふのは、廣い割合に、屋根が低くて平つた、壁は白く塗られてゐます。そして、戸の處だけが

真黒に塗つてあつて、奇妙なことには、一つも窓がないのです。小人とおばあさんが、今少しは家の中へ入りかけたので、連麻は、静かに足か早めて二人が家の中へ入る前に、もつと近寄つて行つて、二人の様子を、よく見てやらうと思ひました。ところが、運悪くも、連麻は、足を早めたもので、つい足元に氣がつかず、大きな、固い樹の根に、バツタリ墜いて、地面へ、ズシンと倒れてしまひました。

「しまったッ！」

と舌打ちして、連麻は急いで起き上がらうとしました。すると、その瞬間に、おばあさんは、連麻の肩を、しつかり掴へてしまひました。物音に驚いた小人も、大きな籠を放り出して、駆け寄つて来ました。さうしておばあさんに加勢して、今一方の連麻の肩を、小さい手で引つ掴みました。

「縄を早くッ！」おばあさんは、小人に、云ひました。小人は背いたが／＼した上着を裂いて、手早く縄

をこしらへ、

「おばあさんこれだかい。」と、おばあさんに渡しました。おばあさんはその縄で、連麻の腕と、膝となしつかりと縛はへてしまひました。

「さあ、ついておいで。」とおばあさんは、連麻に、合圖をしました。連麻は、手足の自由がきかなくて、歩るけなかつたのですが、云はれるまゝに一生懸命に小股にきさみ歩きをして、おばあさんの後からついて行きました。小人は、又、あの大きな重い籠をかついで、一番背後から、ヨチヨチとついて来ました。

おばあさんは、黒い門の前まで、真直ぐに進んで行きましたが、そこで、ちよつと立ち止まつて、口の中で

「ぶつ、ぶつ、ぶつ！」と、わけの判らない、お呪文を唱へました。すると、固く、嚴重に閉した黒い門が、ひとりでに、ギョツと開きました。中を見ろと、薄暗い灯がぼんやりと、點つてゐて、長

い廊下がありました。その上には、凹凸の大きな石が、一面に敷きつめてあるのです。おばあさんは先頭に、三人が門を入ると、門は再び、ひとりでに、ガタンと音を立てて閉つてしまひました。

何がだが、連麻は、少しも驚が判らなくなりましたが、

「今に、なんとかなるだらう。」と思つて、たゞ黙つて、おばあさんの行く通りに、引かれて行きました。その凹凸の石の上を歩るいて行きますと、今度は又、前と同じやうな、戸が固くしまつてゐる入口がありました。

お婆さんは、又、立ち止まつて、

「ぶつ、ぶつ、ぶつ！」と、前と同じやうに、呪の判らない呪文を唱へました。すると、前と同じやうに、戸はひとりでに開きました。ところが、今度は、其の中の有様は、一時に眼が醒めるやうに、何とも彼とも云へない、美しきものでした。

連麻は、餘りの美しさに、

「アッ！」と聲を上げました。それも、その筈です。部屋の真中には、立派な、大理石の水盤があつて、美しい噴水が、サラ／＼と噴き上がつてゐるのです。また部屋の此處かしこには、青々と茂つた、棕櫚が置かれて、それらが、一様に、薄桃色の、眞珠のやうな、炊らかい光の中に、溶けるやうに照し出されて居るのでした。連麻は、すつかり、夢のやうな心持になつてしまひました。と同時に、連麻は疲れ切つてゐましたので、

「あ、こんな處で、ゆつくり眠りたい。お婆さんは、早く隠れてくれないかしら。」と思つたのでしたが、お婆あさんはどん／＼と先に立つて、急いで部屋の奥の方へと進んで行きました。

さて、連麻は、何處へ連れて行かれるのでせう。

三、黒い大鳥

お婆あさんは、立ち止まつて、

「早く来ないか。」と云ふやうな眼付きで、達麻を睨みましたので、達麻も、しぶく、足なはいかれたまゝ、相變らず小刻みな足取りで、ついで行きました。勿論、小人も後からついて来ました。

恰度、部屋の間の方まで来た時、おばあさんは、黒い上着を脱ぎ、二つの桃色の眞珠の首飾りを、取り出しました。おばあさんは一つ、それと同じ首飾りを、自分の首にもまきつけてゐました。

おばあさんは、懷中から取り出した桃色眞珠の首飾りの一つを、達麻の首に、黙つて巻きつけました。そして、今一つの首飾りを、小人の首に巻きつけました。小人は、温和しく、大きな鼻を、邪魔にならないやうに持ち上げて、その首飾りを巻きつけてもらひました。

さうして、おばあさんは、部屋の間を向いて、何か、考へてゐるらしい風をしてゐましたが、やがて小聲で、

「眞珠の洞の黒鳥、出て来い！」

と叫びました。

その文句は、達麻には、何だか聞きおぼえがあるやうに思ひましたので、ハツと、睡氣を醒して、よく考へて見ました。

「眞珠の洞の黒鳥？ 眞珠の洞の……あゝ、さうだ。あのお母さんが話して下さつた、僕の赤ん坊の時に、僕とお母さんを、ピルマの宮殿から連れ出した大きな、不思議な鳥のことだな。」

達麻は思ひ出しました。そこで、

「何んな鳥が来るか、一つその鳥の正體を、はつきりと見届けてやらう。」

と、眼を大きくして、あたりを見廻してゐました。

「眞珠の洞の黒鳥、早く出て来ないか。」とおばあさんは、一度繰りかへしました。すると、達麻は、俄かに睡氣がさして来て、今までよりも、もっと疲れは激しくなり、氣が遠くなるやうな心持がして来ました。

「これではいけないぞ。」

と、一生懸命に、眼を見開かうとしたまゝ、

すが、やつぱり、自然に目蓋がたるんで来るのでした。其時、何處からともなく

バタ バタ バタ

と云ふ、軽い鳥の羽音が、夢うつつのやうに聞えて来ました。けれども、達麻は、今はもう、その羽音の主を、見る元氣もなく、半分眠つてしまつてゐました。やがて、大きな鳥が、スウツと部屋の中へ、入つて来やうでした。

「さあ、此處へお入り！」

おばあさんは命じました。達麻は、うつ、で、その命令通りにしました。軟らかい、フワリとした、心持よい感じがしたかと思ふと、達麻は、下へ、下へ、底の知れない下の方へ、その軟らかいものに乗つたまゝ、降りて行くやうな氣がしました。が、それから後は、何も覺えはなく、深い眠りに落ちてしまつたやうでした。

達麻は、不意に、ちくちくと、おばあさんに手をつられて、ハツと自分に返りました。

「早く起きないか。」



達麻は、目をこすり、あたりを見廻しました。何だか、深い深い、地の底の洞の中にゐるやうな氣がしました。あたりは眞暗で、唯だ遠くに、ほんのりとした薄桃色の眞珠の光が、あたりをぼんやり照し出してゐるだけでした。

「さあ、早く私について来るんだ。」

おばあさんは、又もや、達

麻を促して、桃色の光の方へとすん／＼先に立つて行きました。

暗い闇の道をすかして見ると、大きな、巾の廣い段梯子が、その明るい方へつと、長く架かつて居ました。おばあさんは、すん／＼段梯子を登り始めました。達麻もついて登りましたが、いつの間にか、小人もついて来てゐました。

四、眞珠の洞

段梯子を登り切ると、その光の照してゐる所は、長いトンネルの様な、眞珠の洞の入口だったのです。天井からは、薄いカーテンが垂れ下がつてゐて、そこを通り抜けると、やがて、一つの大きな部屋へ入りました。その部屋は、天井も、壁も、床もすつかり美しい眞珠色の貝で張られてゐます。そして、入口から、細い曲のやうな形をした柱が、部屋の端から端まで、すつと長く續いてゐました。しかし、よく／＼見ると、それ等の柱は、何うしたことが、みんな僕

がついてゐます。
『とうとう眞珠の洞へ来たのだな。』

と達麻は思ひました。
この洞のやうな部屋の方には、又、前と同じやうに、長いトンネルのやうな廊下がついてゐました。そこを通り抜けると、また別な眞珠の部屋へ出ました。

この二番目の部屋へ入ると、達麻はびっくりして、思はず後ずさりしました。それもその筈、そこには、牛程もあるやうな大きな人間が二人、柱によつかりつて、首をだらつと仰向きに垂れたまゝ、大きな口を開いて吠えるやうな聲を出しながら、眠つてゐたのです。

よく見ると、此處でも、柱と云ふ柱は何かでひどく打ちつけたやうに、すつかり傷がついて、桃色眞珠の破片が、あたり一面に散らばつて居るのです。そして、床の上には、大きな塊が、ころがり出して、ゴロゴロしてゐましたが、其の間には、あの鐵の中にあつたのと同じやうな、鐵の丸が、ころ

がつてゐるのです。

『起きないか、これ！』

と云ひ乍ら、おばあさんは、一人の大男の傍へよつて、眼蓋を、

『フツ！』と吹きました。

小人もそれにならつて、帽子についてゐた鳥の羽根を取つて、それを今一人の、よく眠入つてゐる大男の鼻の穴へ突込んで、ぐるぐるとかきまわしました。

『あゝ、……誰だツ！』

大男は、大きな聲で怒鳴りながら、やつと頭を持ち上げて、ぶる／＼と首を二三週振り動かし、キョロ／＼とあたりを見廻して、

『やあ、お母さんですか。』と言ひました。するともう一人が、

『やあ、小さいお父さんも、歸つてゐたのです。』と云ひました。

が、直ぐ、二人の後ろに、呆氣に取られてゐる達麻に目をつけて、

『ほ、ほう、何ですかれ此奴は。人間ぢやありませんか。』

と、口をそろへて、物珍しきやうに、云ひました。

『何處で此奴を捕へて来たのですか。』

『お前達、これはね、人間の廻し者なんだよ。我々の秘密を探りに来たのださ。だから生け捕りにしてやつたんだよ。お前達の奴隷に恰度いいと思つたから、玉ころがしのお手傳ひには、便利だらうよ。』

『さうですか、アハ、ハ、ハ、これは有り難いお土産ですね。』

二人の大男は、手を叩いて喜びました。

その聲は、野獸が吠えるやうで、耳がガンガンしました。

『時にお母さん、丸は持つて来て呉れましたらうね。』

と二人の大男が訊きました。それは二人の中でも、とりわけ恐ろしいお付きをしてゐました。

するとおばあさんが、

『あゝ、其の鐵の中へ入れて来たよ。』と云つたので、大男は、

『あゝ、これですか。』

と、まるで、

卵をでも取り出すやうに、その鐵の丸を、指の先で摘み出して

した。

達麻は、その鐵の丸の重さを知つてゐ

ましたので、

『あんな、重い物を、指の先で摘み出すとは、何と云ふ恐ろしい力の奴だらう。』

と、心の中

で、呆れ返つ

てしまひました。すると大男は、

『少し小さいや、これは。』

とつぶやき乍ら、も一つの丸を取り出してしらべて見て、

『餘り小さ過ぎますね、これは。』

と、も一度不平さうに云ひました。おばあさんは、

『お前は、別に、大きい玉を十一も持つてゐるぢやないか。そして、一つは、そんなに大きいんだから、いいぢやないか。』

と、機嫌を取るやうに云ひました。大男は、

『僕は、十二とも、大きいので揃えたいのですよ。』

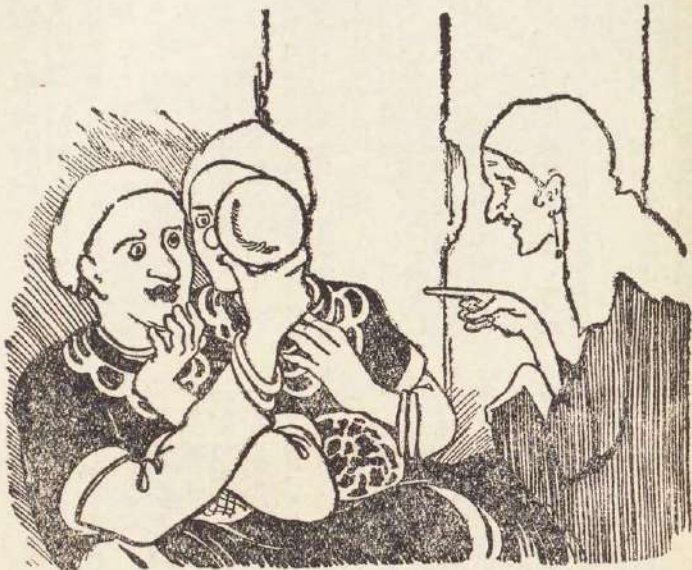
と云ひ強りました。其時、横から、もう一人の大男が、

『兄さん、では、それをみんな僕に呉れたらいいだらう。』

と口を挟みました。彼は弟だつたので

す。

『馬鹿な云へ、お前なんかにやるものか。弟



『あゝ、これですか。』

「昨日、お前は俺の丸を失くしたぢやないか。山の小人に丸を盗まれるなんて、みんなお前の開けからだ。だからお母さんが、今日、わざと、遠方へ、取りにあらしたんぢやないか。懲りもい、加減しろ。」

兄の方の大男はかう怒鳴り立て、弟の足元へ、その丸を投げつけました。遠慮にドシンと部屋中が揺り動かしやうな、大きな音響がしたので、達麻は、吃驚して、跳び上りました。大男達は、その様子で、可笑しかつたのか。

「あ、は、は、は、は！」

と、聲をそろえて、大口を開いて笑ひましたが、そのまた笑ひ聲が、餘り大きいので、達麻は、すつかり目を見張つて驚きました。

「おいッ、弟、此奴に玉ころがしの、標的の標を立てさせやうぢやないか。」

と兄が云ふと、弟は、

「いや、玉を拾ひ集めさせやうや。」

と反對しました。

「なに、玉はあとでいいよ。先に標を立てさせたい。」

「丸を拾ひ集めさせてから、標を立てさせればいぢやないか。」

「いや、標を立てた。」

「いや、丸だ。」

二人の大男は、お互ひに大聲に云ひ張つて、今にも掴み合ひを始めさうな氣配です。おばあさんは、それを見ると、節くれ立つた杖で、

ビシリッ！ ビシリッ！

と、大男達を叩きました。大男達は、妹の大きいのに似合はず、おばあさんが、大變恐ろしいのか、子供のやうに、一目散に逃げて行つてしまいました。

おばあさんは、達麻の傍へ寄つて来て、

「さあ、小僧、お前は、標を立てるんだよ。」

と云つて、床を指しました。

桃色、眞珠で張りつめた床の上には、白い大理石で、圓いものが、九つ積み込んであります。

「この九つの標を、床の上の圓のところへ、一つ一つ並べるのだ。」

と云ひ聞かせました。床の上の圓は、

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

と云ふやうに、くつきり順序正しく、ついでゐたのでした。

「おばあさん、僕すぐやりますが、僕の手は縛られてゐて、自由がきません。繩を解いて下さい。」

と、達麻は、初めておばあさんに、口をききました。

X X X X

さて、不幸な達麻は、これからどうなるのでせう。しかし、不幸は却つて幸福を生むかも知れません。達麻はこの「眞珠の洞」でおもひよらの大變見をするかも知れません。

(次號をお待ち下さい)



大石主税

三島霜川

羽鳥古山 畫

二、早駕籠

晩餐が済むでから、八助爺やは、子供部屋へ入込むで、吉千代から、「蜂谷戦」の話をして貰ひました。もう、何度も聞いた話でしたけれども、代三郎も、傍に、ちよこなんと坐つて、一生懸命に聞かうと身構へました——何か、すてきに、面白い話でも聞かうとするやうに……

「爺や、こりや、眞との話なんだぜ……昔話とは違ふよ、可いかな。」

と、吉千代は、念を押しました——いくらか、話に、もつたいをつけようとするやうに……

「はい、それは、存じて居りますよ。吉坊様が、げんに見ておいでたのだからな。」

と、八助は、吉千代の話を、はづませようとするやうに、調子よく、合槌を打ちました。

「ム、あれはナ、この月のお節句の日だった、御家

蜂の巣にとまつた。」

「それから、大へんになつたのだよ。」

と、代三郎は、膝をゆすつて、前へ出ながら、口を入れました。

「可かな、傍から口を出しちゃ……」

と、吉千代は、一ッぽん、きめつけました。

「それから、どうしました。」と、八助は、吉千代の「けんまく」をこつちへ、引取らうとするやうに、わざと、大聲に云ひました。

「うん……」と、吉千代は、それに乗つて、「すると蜂の巣の小蜂は、大へんな敵がやつて來たと思つて、巢から、ウヨ／＼出て來たのだよ。そして、ウヨウヨ群がッて、山蜂を攻めたのだよ。山蜂は憤つて、ブン／＼、ブン／＼、四方八方へ飛廻つて、一生懸命に小蜂と戦つた……でも、小蜂は、何百何千とゐる。前から後ろから、右から左から、滅茶苦茶に攻立てた……そんなに、やつて來られては、人間だッ

中の人が、皆なお祝に登城をなさる。」

吉千代は、話をすることが好でした。そして、大

人の眞似をして、話をすることが上手でした。

「するとナ、二の丸御門の廂の裏に、こんな大きな蜂の巣が……」

と、云ひつゞけて、吉千代は、手で大きさをして見せて、「さうだ、恰ど、爺やの頭の三ツがけ位の蜂の巣が出来てゐたのだよ。やア、珍らしい蜂の巣だ。何時の間に出來たのかと云つて、御家中の人が、誰も彼も立止まつて、見物する……それは、大變な騒だつた。しばらくするとナ、何處からか、蟬よりもツと、大きな山蜂が飛んで來たのだよ。」

「吉坊様、その蜂、御覽なさいましたか。」

「うん。」と、吉千代は、頭を振つて、「その蜂は見なかつたよ。だが、見た人から聞いたのだ……その蜂が、ブン／＼唸つて、しばらく、蜂の巣のまはり、ぐる／＼、ぐる／＼飛んでゐた。それから、

て、かなはないよ。山蜂は、とう／＼、さん／＼に刺されて、羽も、もげて、地べたに落ちて了つたよ。

わしが、二の丸御門のところへ飛んで行つたのは、恰ど、その時だつたよ。」

と、云つて、吉千代は、一と思ひました。

「その、山蜂は、落ちて死んで了つたよ。」

と、代三郎は、さう云はなければ、「爺やには解るまい。」といふやうに、云ひました。

「不思議なことがあるのですネ。爺やは、生まれてから、そんな事ア、一度だつて、話に聞いたこともございせん。」と、八助は、きんか頭を、振りふり、さう云ひました。そして、心から「その事」を不思議に思つてゐるやうでした。

「しばらくすると、恰ど、大きな手鞠はどある塊が、空から飛んで來た。ぶうんと、紙鳶のやうに唸つて……始め、皆な、何んだか解らないでゐると、その塊が、だん／＼、蜂の巣の傍へやつて來て、



「すむぶん、不思議なことがあるものだね。」
と、代三郎は、何んの屈托もないやうに——たゞ人の云ッてゐる口眞似をして、さう云ひました。
『だが、面白かつたよ。』
と、吉千代は、のんきに云ひました。

「この正月は、風もないに、お城の大手の門松が折れるといふし、この頃は、またお殿様のお居間の方の空に、毎晩白気が立ちのぼるといふし……」
と、八助は、打洗むだ顔で云ひますと、
「爺や、そんな、くだらない話はよせよ。」と、主税は、隣りの部屋から、不機嫌な聲で云ひました。
「はい……。」と、八助は、慌て、口を噤みました。
恰ど、その時、背戸の方で、きやん、きやん……と、つたと、掠めて行くやうに、狐の啼く聲がしました。
吉千代も、代三郎も、耳を立て、眼を光らせました。
「お兄様、狐が啼きましたネ。」と、吉千代は、主税の部屋の方を向いて云ひました。
「しッ……。」と、云ッたまゝ、主税は、やゝしばらく、何んとも云ひませんでした。
家のうちは、急に、地の底にでも沈むだやうに、

そして、バツと碎けて、飛散ッた……それが、爺や、何百匹といふ山蜂ぢやないか。わしも、びつくりして、恐ろしくなッたよ。皆なも、あれ……と云ッてゐるうちに、山蜂は、ブン／＼、ブン／＼、凄じい唸聲を立て、蜂の巢に飛びかゝッたよ。すると、蜂の巢からも、小蜂が、うよく／＼、出て来て、それから合戦になッた……」

行燈の灯が急に、氣味の悪いやうに、薄暗くなりました。八助は、振りむいて行燈の燈芯をかき立てました。

「小蜂が出て来ると、山蜂は、一ツべん、さつと引いて行ッたよ。そして、三ツにも四ツにも別れて、隊を作ッて、小蜂を攻めかゝッた……それから、大へんだッたよ。どツちが、どツちだか解らないやうに、ごちや／＼になッて戦ッて、両方で唸る聲が、まるで、嵐のやうだッたよ。だん／＼、時が経ッたね、小蜂の方が、ボタリ、ボタリと地べたへ落ちて

来るやうになッたが、それが皆な足が折れたり、羽がもげたりして、もう、飛べないのだよ。つまり、山蜂にやッつけられて、討死した奴さ。」
「小さな奴は、大きな奴に、かなはなかつた譯でございますね。」

八助は、「フム、。」と、云ッて、何か考へるやうに、首をひねりました。

「さうだよ、大きな奴が勝ッたのさ。」と、吉千代は、無難作に云ッて、「するうちに、小蜂が、ボタ／＼、ボタ／＼落ちて来て、地べたが、小蜂の死骸だらけになッて、そりや凄じい位だッたよ。さうして、小蜂が皆な討死をした。山蜂は、小蜂の巢へ亂入して、巢の王を殺した。それから、ブン／＼、勝鬨をあげてお城の北の方へ飛んで行ッて了ッたよ。」
「フム、。」

と、八助は何んといふことはなしに、深い歎息をしました。

しんとしました。

きやん、きやん…… また、耳の底を掠めて行くやうに、狐の啼聲が聞えました。何んとなく、淋しい聲でした。

「狐が鼠にかゝったンぢやないでしょうか。」と、吉千代は、また主税の部屋の方を向いて云ひました。

「ナニ、さうぢやありませんよ。」

八助は、れいたんに、にこついて、さう云ひました。

主税は、障子をあけて、縁に出ました。そして、内庭に向つた雨戸を、靜に、あけて、耳を澄まして、次の啼聲を待つてゐました。

吉千代も、ちよつと首を縮めながら、浮足になつて、部屋を出て行きました。そして、主税の枕の下を、もぐつて、『獲れたの、お兄様……』と、小聲で、さゝました。

主税は、黙つて、耳を澄ましてゐた。春の月が、

ぶやきました。そして、靜に雨戸をしめました。赤穂の城は、靜でした。城下の家中も、町も、靜でした。

それから、一ツ時ほど経ちました。もう、子の刻に近くなつて、大石の家でも、赤穂の町でも、しんと寝しつまつて、犬の啼聲さへ聞えませんでした。

その頃、有年街道の方から、『えい、はい。えい、はい。』と、掛聲勇ましく、二挺の早駕籠が、赤穂の城下へ入つて來ました。

一挺の駕籠に、五人の駕籠昇がついて、二人は、かつぐ。一人は、後棒に手をかけて、押して、後の棒組と肩をかへる。一人は、先棒に綱をくくりつけ、一間ほどのばして、その綱を肩に引つかつて、走る。そして、もう一人は、駕籠の脇について、駕籠に手をかけ、これも、駕籠を押すやうにして走るのでした——「おはや」と、云つて、これが、今から、

柔なく光を、そこらに投げて物の象がすべて、薄絹でつゝまれたやうになつて、見えませんでした。狐の聲は、それきり、聞えませんでした。

「やつぱりさうぢやなかつた。」と主税は、つ



駕籠昇は替ります。その宿場は、二三里の間に、必ずありましたから、駕籠昇の方は、せい／＼五六里も走ると、大がいの別の駕籠昇と替つて了ふのでした。

しかし、乗つてゐる方は、大へんです。一日二日なら、まだ／＼我慢も出来るが、三日四日とつゞくと、それこそ、命がけでした。何しろ、駕籠は、ひた走りに走るのですから、まるで、船に乗つてゐるやうに揺れる。それで、食事をすることも出来なければ、眠ることも出来ない。大がいの人が、三日も乗りつゞけると、ぐた／＼になつて了ひました。云ふまでもなく、よく／＼「非常」の場合でなければ、決して早駕籠などには、乗りはしなかつたのですが……。

この二挺の早駕籠に乗つてゐたのは、赤穂城主浅野内匠頭の家来、早見藤左衛門と荻野三平との二人でした。二人は、江戸から赤穂まで、約、百七十



里の道中を、五日五晩、早駕籠に乘通して來たのです。二人ともに、白木綿の後鉢巻、駕籠に下がったこれも白木綿を縄のやうに振つたのに、しつ／＼と取りすがつたまゝ、只、眼をバチ／＼させてゐるだけで、もう、正體がないほどに、ぐた／＼になつてゐました。

「えゝ、はい。えゝ、はい。」

合はせて十人の駕籠昇どもの掛聲は、赤穂城下の夜の静かさを破つて、宙を飛ぶやうにお城の大手口へ入つて行きました。そして、大石の邸の前で、ビタリと止まりました。

主税は、その夜、狐の畏のことが氣になつたり、「蜂合戦」のことが氣にかゝつたりして、何故か、やすらかに眠ることが出来ませんでした。で、あつちへこつちへ、寝返りして、ウト／＼してゐるうちに、「えい、はい。えい、はい。」と、いふ、駕籠昇どもの掛聲が、只事でないやうに聞えて來ました。

「おかしいナ、何んだらう。」

と、思つてゐると、その掛聲が、だん／＼、邸の方へ近づいて來ました。主税の眼は、シヤツキリと覺めて了ひました。

「江戸表から、お早打（急使）でございます。御門をおあけ下さい、御門をおあけ下さい。」

しばらくすると、駕籠昇どもが、門をたゝいて、けた／＼と、さう喚きました。

「江戸表から。」と、聞いて、主税は、ハツと、胸を躍らせました。

「こりや只事ではないぞ、殿様が、（内匠頭）急にお亡くなりになつたか。」

主税は、何んでも、ろくな事ではないと思ひました。そして、むっくり、起上ると、手をさしのべて、行燈を探りました。それから、その抽斗から、燈石とはくちとを取出して、カチ／＼、カチ／＼やつて、附木に火を移し、さらに、その火を行燈に移

しました。

ガタ／＼、バタ／＼と、家ぢふが、俄に物騒がしくなりました。若徒たちは、玄關の戸をあけて、門の方へ飛出して行つたやうでした。仲田(下男)部屋からは、仲間も飛出したやうでした。臺所の方では、女中、下女等が、ウロ／＼する様子——主税は、氣をフク／＼させながらも、靜に寢衣をぬいで、着物を着替へ、袴も穿きました。そして、玄關の方へ出て行きました。

そこには、内藏助が、もう自分に手燭を持ツて、立ッておりました。恰ど、早見藤左衛門と萱野三平とが、今、玄關へ上がらうとしてゐるところでした。いや、上がるといふよりも、二人ともに、若徒や仲間、右と左から、扶けられて、かつぎ込まれようとしてゐるところでした。

一目、見て、主税は、ハツと胸を冷しました。二人とともに、足が、ひよ／＼して、踏みしめて立つ

と、藤左衛門は、苦しさに云ひかゝる。

「いや、それは、後程、承る。お二人ともに、とにかく、しばらく、お寝みあれ。」

と、内藏助は、靜に、とめました。

それで、安心したのか、藤左衛門は、「はッ。」と云ツたきり、ぐたりとなりました。そして、そのまゝ、うつふしになツて、もう、正體がありませんでした。萱野三平も、やはり、その通りでした——何んといふ、恐ろしい體でしょう。二人ともに、眼をつぶツて、たゞ、スウ／＼云ツてゐるだけでした。

「何か、お氣つけ薬を……」

と、若徒の一人は、内藏助の顔色を窺ふやうにして、たづねました。

内藏助は、黙ツて、頭を振りました。そして、小聲に、「このまゝにして、そつと、蒲團をかけて差上げるが宜しい。お目が覺めたら、お粥を差上げるのちや、よいか。慌てゝはならんぞ……これは、ふ

ことが出来ません。まるで、甍のやうでした。そして、顔が死人のやうに青ざめて、眼が血走り、髪が、バラ／＼に亂れてゐました。

「お二人は、江戸表から、五日で、つかれたのぞ。」と、内藏助は、重い口で、そつと、主税に云聞かせて、自分が先きに立ツて、玄關の次の室に入りました。

主税は、そこに、ビタリと坐ツて、早見と萱野とお辭儀をすると、内藏助の後について、次の室に入ツて行く。いたましい二人の後姿を見送ツてゐました。

早見藤左衛門は、ハア／＼、息を切らしながら、懷ろから板挟にした一通の書面を取り出して、内藏助に渡しました。それは、内匠頭のお傍役、片岡源五衛門からの口上書でした。

「委しくは、その口上書にごさいましようが、何がさて、この度の大へん……」

いゝ氣絶とは違ふて、騒いでは、反ツて、命にかゝはることがある。そつと／＼。」

さう云ツて、板挟の書面を持ツたまゝ、自分も、そつと、立ちあがツて、自分の居間に行きました。『江戸表には、何事が起ツたのだらう、どツちにしても、大へんなことに違があるまいが……』

と、主税はまた、それを考へて見ました。そして、何事でもないやうな顔をして、落ちつきはらツてゐる父の様子を、むしろ、不思議でなりませんでした。

主税は、すゐぶん、いら／＼しました。何事が起ツたのか、疾くそれを、知りたいと思ツて、居ても起ツても、居られない位に、いら／＼しました。しかし、武家に育ツた者として、ツカ／＼、父の傍へ行ツて、それを、たづねることも出来ませんでした。

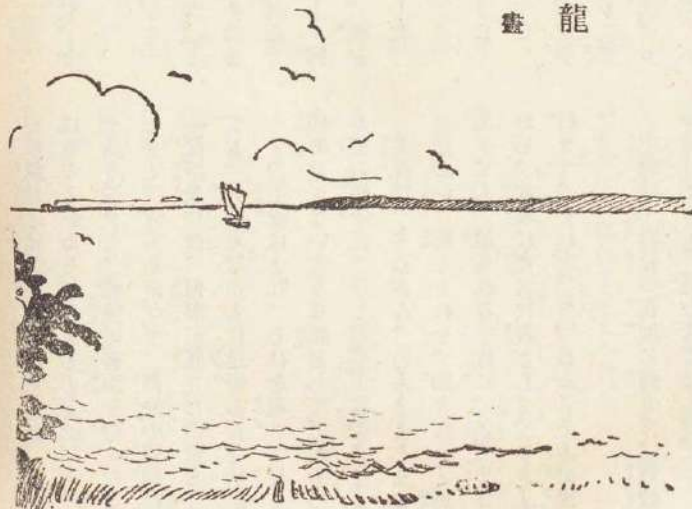
主税は、自分の部屋に歸ツて、行燈の下で、シヨンボリと、考込むでゐました。(つゞく)

島の子供は

達崎龍

岩岡とも枝畫

椿の花の
下道を
島の子供は
水汲みに
歸る雲さへ
かもめさへ
海が青いこ



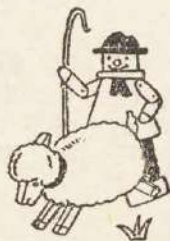
こんでゆく

郵便船は
伊東から
日より都合で
漕いで来る

島の子供は
紅ざうり
つるべかゝへて
水汲みに

伊豆の大島にて





綴 方

齋藤佐次郎選

遠足のこころも (賞)

仙臺市土樋町二四五

阿部 和子

(十四才)

午前八時、汽車はいよゝ仙臺驛をはなれた。

ふと目を上げた。澄んだ、静かな河がある。汽車は今その上の鐵橋をわたつてゐる。河の上を五六さうの小舟が行く。こいでゐる人々は小さな聲で舟うたを唄つてゐる。河原の砂の色がさばやかに光つてゐる。遠

く近く山々が横たいてゐる。私はこの景色をどう書いたらいいかわからない。静かで、のどかで、さばやかで、美しい、それだけでは先分でない。そのほかになにかあるやうな気がする。何とも言はれない美しさ、本當に見た者でなければ味は、れないこ、ちよさがあるやうな気がする。

わたりで汽車をなりて、田と田の間の一本道を歩く。なんといふ空の廣さだらう。私達をとりかこむすべてが、空と言つてもいいくらゐだ。近くには田がつゞき、遠くには山がならんでゐる。けれど、空のひろさにくらべてそれらがなんだらう。

みんな楽しさうに話しかけながら行く。私も楽しい。遠足に行くのが楽しいよりもこの静かなのどかな景色を見ることが出来て本當に楽しい。木々は風の吹く度に、何かさゝやいてゐる。かりとられた稻まで、さらさらとまたないこ、ちよいと音をたててゐる。小川は水を一ぱいためてうれしそうに流れてゐる。岸にはえてゐる草達の影が、その中にうつゝと本當に涼しさうだ。



(賞)「像 肖の父」
太英田金

山縣小學校
西郷郡一

とそばへ行つてもけりりと鳴くのをやめてしまふのにこのくつははもう命が短いと思つてか、人が行つても鳴くのをやめない。ぢきに死んでしまふのだからかまはないのだからと思ふと涙

が出ました。そつとつかまへて急いで家へかけて行つて、弟に『あすこにある梨を半分に切つてこい。』と言ふと、

『何をするのよ。あ、何か持つてゐるな。』と梨も持たずにかけて來たので、『早く持つてこい。持つてくれば見せる。』と言ふと、

『おう、ちやあ持つてくらあ。』

ところへにかわいらしい野菊の花が咲いてゐる。少しもほこらしい氣のないやさしい花だ。きつとこゝを通るお百姓さんたちを毎日々々なくさめてゐたことだらう。

あ、私の心は、私からはなれて、涼風と一緒に、田の中をとびまわつてゐるのかも知れない。私の頭の中は景色の美しさまで一ぱいだ。

くつはの運命 (賞)

神奈川縣高座郡大野小學校高二

河本 守正

二三日前の夕方の事です。耕地の畑で農をまゐいてゐると、悲しさうな今にも命を落さうと言ふ様なくつはの聲が聞えしました。ぢつと聞いてゐると、だん／＼と息もきれ／＼な聲になつて、しまひには何ともわからないやうに『がぢやがぢや』と鳴いては、大きなため息でもつてゐるやうでした。

『あゝ可哀さうなくつはだなあ。』と一人ごとを言つてゐると、又少したつて前よりも

と言ひながら、家の中へかけて行きました。くつはを見てゐると、時々びく／＼と動いては大きなため息でもしてゐるやうなかつこうをしてゐました。

『早く持つてこいよう。』と待ちきれずにかけて行くと、弟は梨の半分をくはへて、半分に持つて出て來ました。

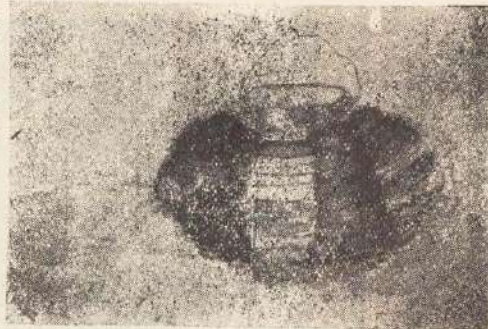
『よこして見な。』と言つて、梨の半分の手のひらにのせくつはの口へ持つて行つてやると、くつは、直ぐに口をつけて一生懸命に食ひ始めました。そして見てゐる中になり食つて、やがて腹いっぱいになると、歩き始めたので、ざるをかぶせて、ぶどうの木につるさげて置きました。

もう畑に行つても、いくらも仕事が出来ないので、梨まるきは止めて湯にはいりました。湯から出て、背戸を涼んで歩いてゐると、ぶどうの木の下で、きつきのくつはの事を思ひ出しました。今頃はとうしてゐるであらうと思つて、ざるを取つて、お月様の光で見ると、くつは、隅の方にころが

「チョウチン」(賞)

千葉縣木更津町新田

平山和



つてゐました。
「あゝ、あのくつばもぢみようがなかつたのか。」

とつく／＼あはれなくくつばの運命を思ひました。

ごせんぐう

千葉縣印旛郡本荏校尋六

篠原せつ

この間、おんたけ様の鳥居を立てたのでごせんぐうをしました。ごせんぐうのために集り合つた人達は、始めはまじめで色々となにやら話し合つてゐたが、よつばらふにしたがつて話がこんざつしてきた。だん／＼よつばらふにしたがつて、たいこをたたくやら、うたをうたふやら、にぎやかになつてきた。家のおぢいさんは、かたすみで笑つてゐた。みんな面白さうにうたつたりおどつたりしてゐるのに、おぢいさんはたゞ笑つてゐるばかりであつた。私はおぢいさんの顔を見ると、なんとなくなしくなつた。私のおぢいさんは、前にはうたが大すきであつたが、わづらつてから酒ものまないうたもたわなくなつたのだ。ますます村の人達は元氣よくおどつたり、まつた

りした。中には「今日はごせんぐうだ。めでたいのだ。みづちりのまう。」などといつてさはいでゐる人もあつた。でもおぢいさんは、なんともいはずだまつてゐるのであつた。だん／＼夜がふけて行くにつれて、私はれれなくなつてきた。「れれいや」と、いひながら、目をこすつてゐると、十時をうつた。村の人の中で、おこうさんのお父さんは、私のおぢいさんの肩をたゝいて、「おぢいさんも一つうたつて見る。」とすゝめたので、私のおぢいさんも一つうたつた。其の時、私はなんだかしらなけれど、ほんとうにうれしかつた。まもなく十一時をうつたので、みんなはおいとしました。

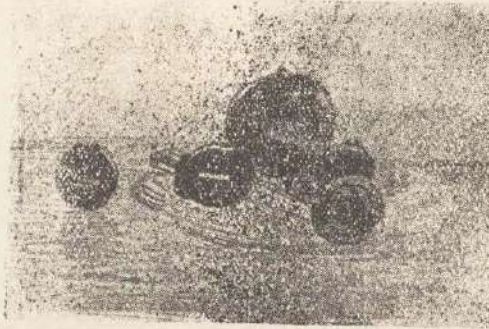
ふくろう

新潟縣中蒲原郡龜田小學校尋六

石本リイ

今年うちのうらへふくろうがきます。このあひだも私とおかあさんとだいてここにゐましたら、うらのほうにほう／＼といふこゑがきこえた。

「あれなんだね。『ふくろうださ。』『まいとし／＼くるんだね、どこにあたる。』おかあさんは夕飯をやるのでうらへたき



柿

住所不明

安藤徳夫

つけをとりにいつた。ふいに「りいや／＼あそこふくろうがゐるがの。私はたまつてはだしになつてうらへはしつていつた。」「どいれ／＼。」「どぞうの、わきのきのうへに。」「ほんだわ／＼。」「ふくろうはたまげたのだらう。すぐかしのきのほうへたつていつた。」「おか／＼、ふくろうて、だるまみたいなんだねい。」「ほんねさの。」「おらあんまりみたくつたすかい、はだしなつてとんできたわ。」「あしにひ／＼があくから早くあるわさいや。」「おか／＼、ふくろてなになたべてゐるが／＼。」「さうさの、かへるか、みみすなべてゐるのだから。」「そればならがみてゐないとき、とんでゐたかへるたべるがんだね。」「あゝ、きしちや／＼ならいまふくろうみたわ。」「ほんね、ならおつかないわ。」「なにの、ならこんでみてかへつてにげてゆくわね、おか／＼。」「なまゐもほんといへばおつかながつてゐるが／＼ではないかい。」「うふん。」「こんなが／＼事をおとうとおせるとおつかながるはれ。」「あゝ、おせら／＼なや。」「はい。」「はい。」

ひはの死

千葉縣千葉市小學校二部尋三

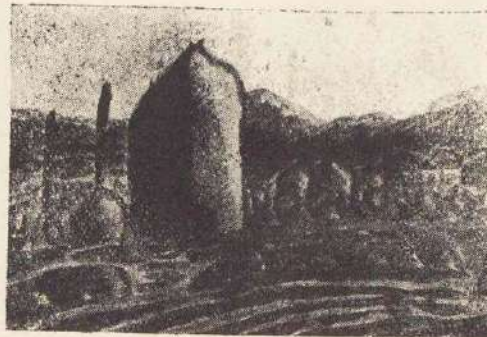
小川順子

朝ぞうきんをかけて居ると「ひはが死んでゐるよう」と正ちゃんのだなりごえに、どれ／＼といひながら皆ではしつて行つて見ると、かはいさうに一羽のひはが黒猫のすみに死んでゐました。太郎ちゃんがか／＼わ手に取つて見て「かたくなつてゐるね」といひました。それなら「ゆふべ死んだのだらう」と、正ちゃんがいひました。そしてよくみると、長い間病氣だつたので首の毛はぬけてやせてゐます。その黒にきいろのまじつたからだをちつと見つめて居るとかなしくなりました。「朝から皆かたまつてなになしてゐるね」と、お父さんのこゝろでびつくりしましたが、お父さんもやつぱりかわいさうなやうすで「死んだやつたれ」とおつしやつた。それかなやからくわを出しておにはのすみへいけてやりしました。

「野邊の秋」

埼玉縣川越市同心町九七四

田中直介



そして石をのせてコスモスを取つて来てびんにさしてあげました。この日は、八月のすまゝころにお父さんが二羽持つてきて下さ

つたのです。それが九月の中ごろから一羽がげん気がなくなつてじつとして居ますので、水はいくども／＼かへてやつたり、青なをいれてやつたりして、かわいがつて世話をしてゐたのですが、おしいことをしました。あとにのこつた一羽のひはも、どんなにかなしくまびしいでせうと思ひます。もし人のことがわかつたなら、うんとなぐさめて私も一つしよに泣いてやりたいとおもひました。そしてしづかにゑばこにわなをいれ水を取りかへてやりましたが、ひは、なんにもしらないやうにあわをたべてゐました。

祭の日のこつそ

兵庫縣田石郡小野校尋五

山本一夫

祭の日になつた十九日の朝起きて弟と一つしよに、かほあらひに出た。そしてかほあらふ時に
『岩、今日は祭だしきやー美しくいかほあらえ』

130
といつたら、岩は
『あんちゃんも楽しいあらつておきにやーあ』
といつた。

かほをあらつて歸つて、第一に神様をおがんで、岩に『岩、さ、着物をきようや、今日は祭だしきやー』といふと、岩はすぐおがあの所に行つて『おかあ早くよー。あんちゃんを着物と、わしの着物をだやして』といふと、おかあはぢきにおなごにいつて、わしのわたいれの着物と岩のあはせとを出した。

それで一番先に岩の着物を岩にきしてやつて、わしの着物を取つて来て、岩に『岩まゝくはあやー』といふと、岩はおなごからはしつて出て来た。そしてだれもぜんについた。僕は一ばんあまざけがすきんであるからおかあに『おかあ、あまざけおくれ』といつてあまざけをもらつて、あまざけを三はんばいんで今度はせきはんを入れた。せきはんはくりの一番ちやあにある方を入れてくひました。



「景風」 一高技學小戸水市戸水縣茨城

郎次精田吉

なとつてお湯をかきまはした。まだ少しぬるい『なんだまだか』と思つてうさぎのやうにはれながら本屋の方に向つたまゝ、
『まだ、少しぬるい』と言つたすると父は『そ

うか』と言つたが手ぬぐひをもつて湯場の方へ向つた。

その時、私は子供イソツアをよみかけてゐたので急いでさしきによつてその本をとつて父についていつた。父はぬるいので、はいるのだ。さかんにもさうと思つてゐると
『どんだんたいてくれ。お父さんははいるから』

とやさしくふりむいていつた。
私ははいと答えたまゝ、一足さきに湯場に入つて、どん／＼とたきまをくべた。火は

とろとろともえたかと思ふと、どん／＼勢がつよくなりさかんにもえだした。私はかまの前にしやがみながらその讀みをよみだした。
しばらくすると、父はお湯につかりながら『すいぶんこの頃は勉強するれ』と、言つた。
私は聞いてゐた本をふせて『はい』と答へると、父は言葉をついで、
『よく勉強しておきな。する時にしないでゐると、後になつてあゝあの時やつておけばよかつたなあなどと言つても間に合はないよ』
と教へてくれた。

私はだまつたまゝ、父の方をみた父も私の方を見てゐて、私が見るとほゝえんだ。私はまたたきまをくべた。父はもう出るからいいと言つた。

間もなく父といつしよに私も湯場を出た。そして父についたまゝ、今父が言つてくれた言葉を考へて見た。ほんとうにさうだ。これからはなほ精出して勉強しよう。私はこころの中と思つた。

父の言葉

千葉縣印旛郡本桧校尋五

高橋まさる

『お湯がわいたか見ておいで』父はやさしく私に言つた。私は元氣よく『はい』と答へてその湯を浴つた。その時はまだお日様が西の空でてらしてゐた。私は急いで湯場に行つた。ふなをとつて手を入れて見た。あつた。『あつ』といつてそばにあつた板



通信

自由畫選評

山本鼎

△金田英太君の父の肖像(推定)は描寫に勇氣があつて、背景に雄木の木立を取り入れたのも面白く、瓶も人物もよくかけて居る。唯トオンの觀察が足りない。物件の描き淡さの關係、其自然の相を感じ足りない。繪が風雅になつた。眼と鼻のあたりが最も生きて居る。△平山和君「チョウチン」推定は筆致に風味がある。提燈の骨つぼくでやぐい氣もちよく出て居る。△安藤徳夫君の「柿」形體は一と通り寫せて居るが、色彩も調子もでたらめだ。もつと實相をよく見給へ。柿の色はもつと深いはずです。又柿とバツクの色の照應はこんな

事ではない筈です。△田中直介君の『野邊の秋』構圖が面白い。大まかに氣樂にかきこなした處に特色がある。だが、いふん幼稚だ。△吉田精次郎君の『風景』筆致に豪邁さがあつて、色も大膽で、洗ひさらしたやうな色が围着。事實紙の上で洗つたものあり、紙が風を引いて居る處もある。その色が紫紺一調子のため繪をうるさくした

綴方の選後に

齋藤佐次郎

△阿都和子さんの『遠足のこと』は、景色がよく寫されてゐます。阿都さんは、物に感じやすい心を持つてゐます。この点なども、あなたからいつたら自分の感じを十分の一も書けなかつたやうな氣がしてゐるでせう。それだけに生き生きとあなたの見た自然の風景が寫されてゐます。△河本守正さんの『くつはの運命』も、作でした。くつは虫をあはれむやさしい氣持ちがゆかしく思はれます。△篠原せつさんの『せんのう』ではおぢいさんの面影が讀む者の胸をうちます。皆ながわい／＼騒いでゐる中におぢいさんは身體がもう弱つて了つて、皆なのにさやかな喜びを淋しうに眺めてゐるその姿が目

童話の選後に

野口雨情

仙臺市に、郷土童話を標榜して立つた、おてんとさん社のあつたことは、皆さん方は御記憶のこと、思ひます。この、おてんとさん社の天江登美草さんと鍋木翠さんとが主となつて『わが日本の子供達よ、祖國へ歸れ』との愛國運動でありました。この愛國運動を先として賛成されたのが、相澤太玄さんであります。相澤さんは、徳泉寺といふお寺の御住職でありましたが、愛國的精神は幼いときに養つておられ、故に目下と云ふことをよく識つてゐました。そのために、お寺を他の人に譲つて、太陽幼稚園といふ幼稚園を立て、園長さんになりました。まことに人格の高い、愛國的精神のあふれた方でありま

した。私は、相澤さんとは、天江さんや鍋木さんと同じやうに、親しい交りでありました。その相澤さんが、舊曆十三日の拂曉に、急病で亡くなりました。相澤さんは、愛國運動から後へ残して、この世の中を去られたのであります。郷土童話を通して、愛國運動に心をおかると、皆さん方は、私と同じやうに、相澤さんの、この訃報を悲しんで下さると思ひます。

童話の選後に

齋藤佐次郎

○相變らず苦心の作が澤山に集りましたが、今月の分では次の作が、最もいいものでしたから推薦作に挙げます。

- 或る田舎の兄弟 福井 藤秋
金山に見つけた牛飼ひ 持丸 輔夫
雪女の話 冬木 一
つくしと旅人 古川 静人
小 雀 原 よしか

編輯室より

(記者)

▽二月號は各先生のお骨折で面白い雑誌が出来たつもりです。皆さんの御批評をお聞かせ下さい。

▽さて、童話童話がこの頃になつて、何となく振るはなくなつたのは何としたこととせうか。『金の星』と同種類の雑誌も一時は随分澤山ありましたが、今では本誌の外に

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありま

金の星社

出版目録を

お送りいたします。

出版目録の御入用の方は、ハガキで本社宛にお送り下さい。早速お送り申上ります。

僅かに『赤い鳥』と『金の船』があるばかりでしかありません。一時の元氣がなくなつてゐます。▽純真な児童の世界に、常に喜びを與へて

行く爲めに生れてゐる童話と童話雑誌が、時勢の移り變りと共に、だん／＼に振舞を俗化して行かなければ雑誌としての賣行を保つて行くことが出来ぬといふのはどういふ譯でありませうか。▽最早童話雑誌としての使命が終つたのでありませうか。それなら非常に結構なこととす。若し、さうでなくては、児童讀物の世界が退歩し、逆轉したのであるならば、まことに悲しむべきことです。▽しかし、實際を觀察すると、児童讀物の趣味の退歩であるやうに思はれて、まことに嘆かばしい次第です。

▽ご覧下さい。今書店の店頭で最も賣れる雑誌といふのはどういふものであるかを。また、さういふ雑誌にならざる爲めに急に編輯方針を變へた雑誌もありました。▽あくまで、純真な児童の世界の友である可く心がけてゐるわれ／＼童話童話雑誌は、まことに馬鹿々々しい氣がしてならぬのです。俗悪な雑誌を作つて悪い種子を増したか分らないと思ふのです。

▽これは一雑誌のよはれと見られては困ります。童話雑誌の雑誌として立つてなされる御同類も恐らく同様の事と思ひます。二月號の巻末をかり長い児童雑誌の爲めに奮闘して來た者の一人として、いさゝか所感を書きます。

自由畫掲載外佳作

河野 正則(福岡) 三浦 久一(和歌山)
小川 潤郎(千葉) 柴田 啓山(山形)
伊藤 清宮(宮城) 齋藤 邦一(和歌山)
馬淵 好治(和歌山) 和氣伊勢雄(東京)
三崎 周一(和歌山) 東 政二郎(京都)
吉田 精次郎(茨城) 菅野 貞子(東京)
吉田 精次郎(茨城) 菅野 貞子(東京)

綴方掲載外佳作

佐藤 カウ(新潟) 土井 久爾(千葉)
佐藤 千代(新潟) 松井 俊郎(東京)
小名木 山三(千葉) 小池 ヨネ(新潟)
齋藤 邦一(和歌山) 牛丸 一男(東京)
鈴木 文七(神奈川) 小川 順子(千葉)
牧野 清之助(山口) 中里 公正(石川)
河本 喜一(神奈川) 中村 達生(大阪)
飯島 力夫(長野) 千代田 勝弘(東京)
大迫 元治(東京) 小寺 勇三(三重)
岩井 喜代子(千葉) 五十嵐 盛夫(岩手)
高野 修次(東京) 稲垣 秀邦(東京)
福岡 ちよ(兵庫) 漆原 克己(香川)
柴田 啓山(山形) 漆原 克己(香川)

童話掲載外佳作

石村 力(愛知) 島田幸三郎(神奈川)
千代田 愛三(東京) 持丸 轉天(神奈川)

童話掲載外佳作

〔大人篇〕

金子みづの(神奈川) 柳澤 まつ(長野)
茶木 七郎(神奈川) 土屋 静文(岐阜)
岩本 ひろし(京都) 小玉 謙之助(秋田)
河野 悦夫(長野) 増田 實(茨城)
神村 悦夫(長野) 福井 勝秋(愛知)
松田 省吾(北分) 笠原 信雄(東京)
飯島 眞砂雄(神奈川) 伊藤 富士(京都)
中村 利雄(大阪) 橋本 暮村(群馬)
植田 良高(高知) 金子 一郎(愛知)
三橋 勇(朝鮮) 千代田 勝弘(東京)
塚田 清六(北海道) 中村 ばやな(大阪)

前回の梗概

佛蘭西軍の勝利が東部ヨーロッパに波及した。ジェラルド中尉とルジャンドル大佐とは、兵卒と共に、寒むい雪の路を四百頭の馬をつれて戦線へ向つてゐた。リゼンベルグの町まで来たとき、ジェラルドはルジャンドル大佐と別れて、たゞ一騎寂しい旅についた。サールフェルトの村を通り過ぎた時、デニロツクと云ふ若い士官が、たゞ斥候兵の一團に逢つた。そこでデニロツクは馬を進めた。アレックスドルフの村まで来たとき、デニロツクは長い間さがし求めたストローベントル男爵の行方をやつと訊ねて、大變に喜びました。百姓の話によるとストローベントルの住家は、暗闇城と村の人達が云つてゐたことであつた。

〔白帆の囀〕 伊豫の國の静かな漁港の村に、春之介少年は姉の峯枝と母の三人で寂しく暮らしてゐました。春之介の父は、昔五百石をいたゞいてゐた立派な武士でありました。海賊の大將を知らずにかくまつたのを、日頃仲の悪い大薩摩のために悪しざまに殺された。成日のこと、親子三人は悲憤の姿になつて、その生死も解らぬ父を尋ねて、あてもない旅につきました。三人が姫路の町へ着いた夜、お金をすつかり賊のために

新誌友名簿

藤田 忠治(青森) 土屋 房枝(岐阜)
伊藤 定雄(三重) 五十嵐 慶夫(岩手)
原田 三井(富山) 岩本 節子(東京)
岩田 繁雄(岐阜) 角本 都彦(朝鮮)
小田 昇三(愛知) 伊藤 清(宮城)
稲垣 真夫(三重) 八木 久雄(神奈川)
近藤 義典(新潟) 安松 谷豊一(大阪)
河野 青雨(朝鮮) 萩田 真彦(東京)
須田 義典(千葉) 酒井 賢三(新潟)
小原 光司(不明) 長谷川 賢三(新潟)
佐藤 清秋(田) 山村 カネ(熊本)
柏崎 清秋(田) 谷本 清(熊本)
高野 修二(東京) 青山 八郎(岩手)
櫻井 文一(長野) 東條 夏子(東京)
山本 今子(愛知) 細川 直介(埼玉)
馬場 新一(東京) 細川 公正(石川)

子供篇

飯塚 とし(群馬) 上田ふく子(東京)
岩本 博(東京) 赤羽宗四郎(東京)
西尾 知善(石川) 沼田 滋夫(神奈川)
大谷 吉雄(東京) 丹波 直次(山口)



【讀者だより】

△金の星さん、お元気ですれ。
一月號の表紙、岡本先生の手紙に
入りました。中のさし紙に岡本先
生のが少なくて悲しかったから、
今度は多くして下さい、お願ひ
します。(かえ子)
△かえ子さんのおつしやる通り、
次號からは岡本先生に挿画
を描いていただくようにします。
楽しみに待つて下さい。(編輯子)
△皆様お目出度うございます。と
は云ふのも、未だに新しい師走
です。ですけれど、わが「金の
星」讀者諸兄姉、逸早く新玉の
年を迎へし愛読「金の星」を祝福
いたします。今年も幸多き事な
つて神様にお祈りします。そし
て、我が「金の星」を、童話、童書

界の權威たらしむるやうに期待し
て努めませう。十二月號には拙な
い作を幾選へ入れて下さつて何と
もお禮の申しやうもございませ
ん。初生をそして可憐なる見は一人
笑んで居ります。(同僚)
△お目出度う、お目出度う、今年
も楽しい年であつて呉れるやう、
ひたすらにお願ひします。(給仕)
△私は五ヶ月前から金の星の愛
讀者になりました。フランダース
の少年も、もう終りになったので
して下さい。(東京入野 柳子)
△三宅先生にお願ひして、又、何
かすばらしく面白お話を書いて
いただくやうにします。(編輯子)
△金の星の皆さま、明けまして
お目出度う存じます。金の星も、
諸兄姉もみんな一つ宛お歳を重
ねられました。今年こそ大いに本
誌上にて奮闘致さうではありませ
んか同時に金の星の大正十六年の
活躍大発展を心から期待して止み
ません。(長崎 西岡さかえ)
△皆さま、お一つおとしなとつて
「だめ」(後西岡さんのまじり
て童話を作らうと思つたがやっぱ
り使えなからうと出来ないうや。童話

つてむづかしいものね。(給仕)
△始めて手に取つた金の星があつ
まり、いのでびくつきやうな
も少し童話を澤山載せて下さい
お聴かしい作ですがお送りします
御寄稿下さい、とてもキレイで賞
直な雑誌です。岡崎市六供町大竹
一三)
△東西々々、岡崎の大竹一三さん
が童話の雑誌を出されました。皆
さんにごひらう申します(東西屋
△先月から、川島君にすゝめられ
て投稿してありますが、どうもみ
めな成績。童話の掲載外欄に、様
名みめる、山賀多新三君の名の見
えたことはなつかしく思ひました
共に、研究して進んで行きたい
今月は綴方を出してみましたが、
さてどうなることやら。……では
斎藤野口社達崎諸先生の御健康を
祈ります。(神藤正七)
△投稿させて下さいます様になつて
から三月目の今日、種々の都合に
依つて横濱市不老町の本多商店に
やめて歸郷致しました。自分の家
に居るやうになりすべし少しは
自由になりすべし前より以上に
力を出して投稿させて頂きます。

136
諸兄姉よりお便りをお恵み下さい。
(愛知県蒲原町大通り橋本一耶)
△新年お目出度うございます。今年
もどしどし「投稿」しますからよろし
く、投稿の方ではまだ新米ですか
らどうぞよろしくお導き下さい。
終りに本誌の御発展を祈ります。
(東京 高野修次)
△金の星正月號の美觀、作品の粒
描には驚かされました。岡一先
生の筆になる表紙繪はまらなく
好きです。青柳さんの推薦童話
上にと光つてゐます。金の星誌
上に毎號い、童話童話の多いこと
を何よりも嬉しく思ひます。それ
から僕も十二月まで發表してあ
たさかえといふ名を捨て、此後西
岡水朋といふペンネームを使ふこ
とに致しました。今まで僕を御存
知の諸兄姉へ本誌上をかりて一寸
お知らせ申す。(長崎童話研究會
西岡さかえ)
△一日中一分の休む間もなく次か
ら次へ上稿準備書類、製作し、五
月號に電報の取次と來客。應對
し、そして精神勞働のげに夜學へ
通ひ一里の道を徒歩で歸宅すれば
十時、それからエスのみ前に小

い新りの會を催して漸く自由な自
分の身になる。就寝十二時半起床
六時といふのが此頃の私の生活
です。貧しい暮口にはたいに買つ
た雑誌をへ読み得ず時には投書
へ「出来ぬのを大へん悲しく思つて
あます。珊瑚色の空に驚か悠々と
描く繪を見ながら、廣々とした稻
田で赤銅さながらの兩腕に傲を振
つた一年前の田園生活を懐いては
ひとり淋しんで居ります。夜の二
時過ぎまで起きて、拙い童話を書
いてお送りする——私を記者先生
どうぞお導き下さいませ。(京都
駒田汀香)
△あはたゞしい御生活の中にも、
そうして御勉強なされてる駒田
さんの御心がけに感心させられま
した。御體を大切に下さいませ。
(記者)

とぬす私は、二度目の投書をやつ
て書き終へました。童話でほん
うにまだ駄目なのですけれど……
やうぞよろしくお導き下さいませ
やうお願ひ申します。それから駿
阜市のお方、是非お便り下さいませ
せ。私は長良川のほとりにすんで
ゐます。(駿阜市外芥見 土屋静)
△記者先生、僕の童話をのせて下
さつてほんとに有難う御座いまし
た。そして挿画までつけて下さつ
て、何と御禮申してよいやら解り
ません。今後ますます金の星に投
書いたしますからよろしく。ほんと
に有難うございまして。(河野青南)
△童話の御入賞を御喜び申す。
編輯部でも、貴方の童話には感心
してゐます。(編輯子)
△金の星が毎號發展して行くのは
喜ばしい事です。野口先生の童話
は毎月愛読してゐます。横上様、
海様、古村 名方様おふるひ下さ
いませ、かげながらお祈り申す
(東京 大木實)
△金の星と云ふ本は表紙を見た
だけで美しい。なほ中には爲めに
なる童話がずん分澤山にある。そ
ればかりではなく色々の先生が多
くさん畫を描いて美しい。(東京

滋谷正治)
△寒くならしました。御元氣の事と
存じます。僕も元氣にて、十二月
七日、名古屋にて童話の放送なし
その夜、北國、放賀へ参りました
降り出した雪は止まず、一尺三寸
餘、積りました。一日僕が勤めた
事のある、早稲幼稚園に行き幼き
子供に接しました。お蔭で寒い旅
行をしました。
加ふるに童話界は不振です、皆
様もつと、賞演童話を創作し、賞
際運動にあつて欲しい、同じ子
供團體を持つてゐられる、群馬縣
の青柳様、お暇な時は、お便り下
さいませ。それから青柳、神野先
生が健康を害されてゐられる由、
早く快くなられます様、お祈りし
ませう。(大阪天王寺東内、大阪お
伽學園、藤野 福雄)
△大變寒くなりました。僕は此
の寒さにまけて十一月二日から今
月の六日迄凡そ一月も學校を休ん
で居りました。それで病氣中
は、たゞ金の星ばかりなしたのし
まして居ました。病氣が全快して
七日に學校に來て見ると、第二回
考査は初まつてゐました。僕は金
の星を讀んでゐたなかげで六十四

人の中で八番でした。先生や外の
友達がたまたまげられた。これ
も一重に諸先生及び記者様のくし
んのたまものだと厚く御禮申しま
す。それから又盛に投稿しよう
と思ひますから、どうぞよろしく
下さいませ。(前橋市萩町二二八 石
田武男)
△十二月號嬉しく拜讀しました。
皆々一掃選りのものとて、何とも
云はれぬ程に、感心させられまし
た。來月はどうなるだらうと思
つて居つた「愛犬物語」「フランダ
ースの少年」「怪星」ももう終りま
した。ほんとに面白く讀んだもの
でした。一月號からは此等にもま
した面白お話があるだらうと思
ふと待た遠くになりませぬ。童話
「蜚蜚」はとても良い作です。推
選作として近來にないお作と思ひ
ます。(秋田 小玉禮之助)
△四月號に一回投稿したきりで休
んでゐましたが、また投稿しまし
た。よろしく。先日は阪野さん藤野
さんの童話金の星會に参加して愉
快でした。金の星十二月では「か
なし玩具」期抄りの名人」等ば
い、なと思ひました。大阪 石川
英一)



金の星社 二月號 出版だより

近刊書のお知らせ

一月中には左の五冊の本が新刊として發行の豫定になつてをります。

金の星社は、本の新刊書を後から／＼と澤山に出版しますので、今では児童圖書の出版として日本一となりました。また賣れる数も日本一で、大層な評判です。

○魔法の小人

(世界名作童話七)

○大勇士

(世界名作童話八)

○ロレーン ビーター大帝

(偉人傳ノ九)

○海を越えて

(童話讀本ノ四)

○フランダーズの少年

(名著大系ノ四)

【近刊書内容紹介】

『魔法の小人』西洋の有名なお話です。それだけに實に面白いもので、一度讀み出したら止められないお話です。譯述者は津山千代子女士で、挿圖は寺田真作博士、装幀はおなじみの松政徳次郎博士です。

お話の主人公は親孝行の少年です。お母さんの三人きりで暮らしてゐますが、大層貧乏してゐました。或る晩、病氣のお母さんに

お薬を買つて来ようとして外へ行くとき、ふと悪い小人に出

会ひます。小人は少年をだまして川向うの王様の御殿へ連れて行つて寶物を盗ませやうとするのです。

少年は何も知らずに行きましたが、親孝行の少年のことですから、そこで、きま／＼の困難に出あひますが、却つて魔法使ひの小人を

こらして思はぬ仕合せに出遇ふといふ本當にスベシク面白いお話です。定價は例によつて六十錢といふ無類の安いものですが、本は非常に立派なもので、繪も澤山に入つてゐます。

『ビーター大帝』と『海を越えて』の事は前に述べましたから略します

『フランダーズの少年』は

『金の星』の誌上で大評判でしたが皆さん御存知の事と思ひます。雜誌の上では十分に全篇を掲載することが出来ませんでした。この一冊として全部をくわしく掲げました。あはれな少年藝術家の物語りです。是非御一讀下さい名著大系の一冊です。

『大勇士』これは有名なイギリスのお話です。イギリスの物語館には、今でもこの勇士の物語りか傳へた古い／＼本が大切に保存されてゐるさうです。

譯述者はおなじみの久米敏一先生で、装幀と挿圖とは松政徳次郎博士です。

昔ビョーウルフといふ勇ましい王子がいました。小さい時から武藝が好きで、十五六になつた時には、もう國中に並ぶ者が無いと云はれるまでの剣の達人となりました。ビョーウルフは、方々の國から頼まれて、色々な怪物退治に出かけます。或る時は、恐ろしい食人鬼と闘つたり、又或る時は七日七晩海の上に浮んでゐて、数知れぬほどの海の魔者と戦つたりしました。ビョーウルフが九十二歳になつた時、スエーデンの國を荒らし廻つてゐた恐ろしい火の龍と一騎打ちの勝負をして、首尾よく龍を倒しましたが、自分の又龍の火に焼かれて、花々しい最後を遂げました。勇ましい中に涙のあるビョーウルフの物語はどんなに皆さんの血を湧かせる事でしょう。

推薦書三冊

著者賞讀物調査部では、本社發行の次の三冊の本を、優秀なる書籍として推薦しました。著者賞と云ふのは、全國の發行圖書の内、最もよいものを選んで推薦する非常に權威のある會です。

○少年鼓手

(名著大系)

○ボムベイ最後の日

(名著大系)

○新ロビンソン漂流記

(名著大系)

次に、その審査評を掲げます。

『少年鼓手』世界各國の少年美談の中から、特に感動の深い十篇を選んで一冊にまとめたもので、その中の一篇少年鼓手を表題にしたものである。何れも勇ましい話ばかりが集められてゐるから、小學四五年以上の兒童の讀物、又は家庭でのお話の資料として適當であらう。

『ボムベイ最後の日』本書は英國

の小説家、戯曲家にして同時に又政治家であつたエドワード・ブルワー・リットンと云ふ人の著る平易に書きかえたものである。少年少女にきくべきもので、多少子供くさくなり過ぎて、どうかと思はれる節もないではないが、大體おもしろく出来てゐる。

『新ロビンソン漂流記』本書はウィットス作『スキス家庭ロビンソン』の譯本である。親子六人の一族が難船して、南洋の無人島に漂流し、野獸と戦ひ寒暑に堪へ、草根果實を食して二ヶ年を暮すお話を書いたもの。文章の妙もあり、それに、宗教、生活收束、其他日本の子供には解り難いと思はれる筋もあるが、しかし子供の喜びさうな冒険譚が場面を換えて、現はれてくるし、又それが危険な冒険心をそそる體のものでもないで、單なるお話の本として無難であらう。

【近刊豫告】

王子物語

○ジューグフリード (名著大系)

○ビーターパン (名作童話)

○魔法くらべ (名作童話)

○義經物語

○少年天才物語

○少年探検家物語

右の六冊が近々出版の豫定になつて居ります。楽しみにしてお待ち下さい。

本社發行圖書の評判

『親指トム』を讀んで (賞)

芝罘三田四國町二ノ二 千代田勝弘

世界名作童話大系がある事を、『金の星』で知つたので、早速本屋へ行つて見ました。六十錢だからあまり立派な本ぢやないと思つてゐましたが、四編とも皆んな美しくて厚かつたので、びつくりしました。『親指トム』を買つて讀むと思はれたやうな本でした。なんと痛快な滑稽なトムさんでせう。一寸法師のトムが、人間にまつたり、吹き飛ばされたり、あらゆる冒険をする痛快な姿が、おも

しろい漫画の線にあらはれて來ます。僕は初めてこんな面白い童話を讀みました。これは、全國の子供が必ず讀まねばならぬ名作だと思ひます。

『赤い猫』を見て (賞) 名古屋市中區南鍛冶屋町三ノ九 田中淳

私はこの夏休みにはるばる名古屋から東京へ來ました。そして三越へ行つて赤い猫を買ひました。『きれいだ』と僕は思はずつとよみました。それから私は毎日よくよみました。面白く爲になる事がたくさんついでゐました。暑中休みも終り學校がはじまつてゐる日の事話方がありましたので、私は庄屋としか話したもので、皆がかん心しました。これも沖野先生のおかげです。

新らしく出た本

メテルリング集 青い鳥

メテルリングの作品の中から特に優れた『青い鳥』を初めとして、尼の身替り、犬、青い鳥さん、十二人の盲人の四篇が入つてゐます。

懸賞創作募集

【注意】童童 綴童自

（少年少女の創作）

由 山 本 鼎先生選

方 野 口 雨 情先生選

齋 藤 佐 次 郎 先生選

懸賞は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したごとや諸君の好きなもの、諸君の好きなやうに書なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにしてください。用紙は自由書はなるべく重厚紙に、童話や綴方はなるべく原稿用紙（または牛紙）に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は一月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は四月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地の星社。

（一般讀者の創作）

話 野 口 雨 情先生選

齋 藤 佐 次 郎 先生選

童話は十五行以内、童話二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價 寄附金四拾錢 送料壹錢五厘
三分分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の際は分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

【注意】
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（電報切手）一割増しです
▽第何巻第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は照會次第お答へ致します

昭和二年一月五日印刷納本（毎月一回）
昭和二年二月一日發行（日曜）

編輯發行人 齋 藤 保

印刷人 小 端 安 之 助

印刷所 東京市本郷區動坂町三五九番地 電話 田二二三三

發行所 金の星社
東京市本郷區動坂町三五九番地 電話 小石川 五三八七番

金の星社發行著名目錄

野口雨情先生著

青い眼の人形

野口雨情先生の最も圓熟せる時代の傑作を集めた本書は日本童話世界の珍寶といふべく研究家の座右になくてはならぬ名著であります。挿絵と挿歌は豊富で現代の大家を網羅し一大藝術の殿堂の觀あり。

金一圓八錢 料六錢

三宅房子先生譯

家なき子

佛國の大家豪マロリの世界的名著である。名家に生れ乍ら不思議な運命にあってあそび旅役者に賣られて旅から旅をさすふ哀れな孤兒の物語である。フランスの家庭では必ず本書を備へてゐる。

金一圓八錢 料六錢

三井信衛先生譯

家なき娘

「家なき子」と同様文豪マロリの作になり世界有数の家庭小説である。旅の間に両親を失つた少女パリンが驢馬を道づれに、まだ見ぬ祖父を尋ね行き親戚辛苦する大傑作である。

金一圓九錢 料六錢

小島政二郎先生譯

狼少年

印度の大自然の中で狼に育てられた不思議な少年の物語である。熱帯の森林の中で猛獸と共に暮しつゝ、狼々の習性を行ふ勇壯無比の大雄鷹にして、文豪キツプリングの世界的名作である。

金一圓十五錢 料六錢

武井雄生先生著

ブウ太郎鍛冶屋

日本に武井雄生のある事は日本童話界の一大珍寶であるといはれてゐる程有名である。その武井先生が自作中最も自信のある童話に澤山の美しい挿絵を入れて理想の輸入童話集にしたのが本書である。

金一圓 料六錢

歯をみがけ。
歯をみがけ。

ライオンはみがきと
ライオン歯ブラシで

歯をみがけ。

お歯もきれい、

お口もきれい、

お顔もきれい。

